
ニューボーイ・オールドボーイ
ニューボーイ・オールドボーイ
高坂 結城

ニューボーイ・オールドボーイ

YUUKI KOUSAKA

高坂　結城



身体をこわ張らせている葵の顎を摑んだ。伸ばした舌先で、詠生がそっと唇を舐めた。(P93より)

イラストレーション／須賀　邦彦

ニューボーイ・オールドボーイ

高坂　結城

1　ニューボーイ

1

「葵、高校の入学祝いだ」

そう言って父から手渡されたのは、金色に輝く懐中時計だった。

高校の入学祝いなど、別段父からは期待していなかった。思いがけないプレゼントに少々驚きながらも、黙って受け取った。

金ピカかつ年季の入った懐中時計をしばらく手の上で見つめてから、葵はおもむろに顔を上げた。

「これ、趣味悪い……」

「何を言うか！　それは、俺の一番の宝物だったんだぞ。昔、俺が親父から譲り受けて以来、ずっと大切に持っていた。お前も、もう十五歳。高校生になる。これくらいのもの持っていてもお

かしくないだろう」

いつもいい加減でテキトーな父にしてはめずらしく、気色ばんで言った。

葵の父、潔（きよし）が、とうの昔に亡くなったという祖父のことを口にすることはほとんどない。葵には調べようがないが、父には肉親というものがひとりもいないらしかった。

「お祖父（じい）さんの形見？」

父は首を振った。

「そういう物じゃない。ただ、親父からもらった。親父もたぶん父親からもらったんだろう。この時計は、そういう親子の歴史も刻んでいる。だから、今度は俺からお前に贈る番だ。ただそれだけのことだ」

葵は手の中の懐中時計にもう一度目を落とした。

金メッキの時計は、刻んできた時間の永さを物語るようにかなり古びて見えた。文字盤を覆う表面のガラスには細かい傷がいくつも走っている。頭にはねじ巻きがあって、チェーンを通すリングがついている。チェーンも金色で、長いその先っぽもまたリングになっていた。裏返してみると、西洋風の模様が細かく彫り込まれている。

手にしてみて、かなりの年代ものだと葵にもわかった。しかし、時計は狂いもなく正確な時間を刻み続けている。

父がこんな時計を持っていたとは知らなかった。腕時計をしない主義の父は、時計が嫌いなんだと思っていた。いや、時間に縛られるのが嫌いだったと言う方が適当か。

だから、父親から譲られたというこんなアンティークな懐中時計を大切に持っていたなんて、なんだか意外だった。

祖父から父に譲られたという時計。代々父親から子へ受け継がれてきただろう時計。

手の中にそれをぎゅっと握り込んだ。

「父さんにも、お父さんがいたんだ」

「あたり前だ。俺が木の股から生まれて出たとでも思ってんのか？」

父の手が、葵の額を突っついた。

ぺろっと舌を出した葵は、次には真剣な瞳をして父親を見上げた。

「そんな大切なもの、俺がもらっていいの？」

「葵にやるために大切に持っていたんだ。葵が大切にしてくれたら、俺は嬉しい」

父はそれだけ言うと、上着を手に取った。時計を見つめている葵にちらっと視線を投げてから、いつものように出かけるとも言わずに、ふいっと出ていってしまった。

ドアが閉まる音にハッと振り返ったものの、もう父は出かけてしまったあとだった。

『ありがとう』を言いそこねてしまった。葵は小さく息をつくと、ダイニング・テーブルの椅子

に腰かけた。テーブルに片肘をついて、懐中時計のチェーンを持ってみる。そうやって、時計を目の高さにぶら下げてみた。

金色の時計がゆらゆら揺れた。手にかかる心地好い時計の重み。

キッチンの小窓から差し込む光が、やさしい金色をピィンと弾いた。

「親子の歴史か……」

ひとりごちた葵は、くすっと微笑った。

もうじき入学するはずの公立高校の制服はガクランで、こんな時計などとても似合わないだろう。それでも父が、自分の身につけていたものを葵に与えてくれたのはこれが初めてだった。

永い時間を静かに数えてきた古い時計。この時計は父から葵へあげられる最高の贈り物に違いないのだ。

「大切にする。ありがとう、父さん」

金色に輝く時計に向かって、葵はそっと呟いた。

壇ノ浦葵は、十五歳。

この春、中学校を卒業したばかりだ。家から徒歩通学も可能な、県立西崎高校にも無事合格を果たし、あとは入学式を待つだけの気楽な身分だった。

父親の潔は三十五歳になる。一か月ほど前、勤めていた会社をやめて、ただ今求職中といったところだから、今の生活は結構厳しい。ちょこちょことアルバイトなんかをしては、とりあえず親子二人糊口をしのいでいる。勤めにはなかなか向かない彼も、水商売関係のクチには困らないようで、懐が寂しくなれば、知り合いのクラブなんかでバーテンをやっている。

背が高くハンサムな彼は、子持ちのやもめには到底見えない。葵が長ずるに従って、兄弟と見られることもしばしばあった。業界でも、評判の伊達男だ。

母が亡くなってから、早いものでもう十三年になる。

父子二人のわびしい生活にも、慣れてしまえば別段支障は感じなかった。

ものごころついた時から潔と二人だったのだから、それが普通だと思ってしまったせいもあるかもしれない。家事一切を取りしきる葵は、主婦業をそれなりにこなすテクニックをすでに身につけていた。

本当のことをいえば、母が死んだということについて、葵は完全に納得している訳ではなかった。

潔は一度も墓参りに連れていってくれたこともなければ、家には位牌のひとつ遺影のひとつすらないのだ。いくら考えたって、それは絶対変だった。

葵が聞くと、

「うちは、もともと過去帳だから位牌はない」
では、過去帳はどこかと聞くと、
「引っ越しの時に失くしたようだ」
母の写真のことも「失くしてしまった」の一点張り。
さっぱり埒があかないのだ。
小さい頃はそのことでさんざん潔を困らせたものだが、十五歳になるこの頃の葵には、そんな潔の曖昧さもわからぬものではない。男と女のことだから、言いたくないことも思い出したくないこともあるのだろう。それを無理にほじくり出そうとするのは、人の心の機微にうといガキのやることだ。
だから、葵は決めていた。
潔がまだ何も話してくれないのは自分が子供だからだ。早く大人になって、潔が話してくれるまで待ってやるのだ、と。

＊＊＊

潔からもらった時計をさっそくポケットに突っ込んで、葵は外に出た。

高校合格と同時に、近所のコンビニのバイトを父に無理矢理やめさせられていた。ぽっかり空いた時間をもてあまして、葵はここのところ退屈で死にそうだった。

子供の頃から、家事やバイトで忙しい毎日を送っていた。それが葵にとって普通の生活だった。こう突然に何もやることがなくなると、間がもたなくって困る。趣味とか、好きなこととか、そんなものなど何ひとつ持たない葵には、やることがないことが一番の苦痛だった。

本当は、受験も無事終わった今、バイトに思いきり打ち込めると色々と計画を立てていた。高校の学資くらいは自分で賄おうと思って気合いを入れていたのに、それをいきなりぶち壊してくれたのが父の潔だったのだ。

葵の高校入学を目前にして、これから金が必要になる時期だが、潔の仕事はまだ見つからない。いつものクラブでバーテンを続けるにしても、しょせんアルバイトだった。父のやる気がなくなればそれまでだ。

親子というより、まるで兄弟みたいな二人だが、変なところで頑固なのは父の潔の方だ。長いつき合いで、葵はほどほどのところで折れるということを学んだ。そうでなくては、父子といえど男二人、到底うまくつき合えない。

急にバイトに反対し始めた父の考えが今ひとつわからなくて、葵は頭が痛かった。

アパートの自転車置き場から愛車を引っ張り出して、それに跨った葵は颯爽と走り出した。

頬を撫でる春の風が気持ちいい。
ついこの間まで、バイトの往復に自転車をかっ飛ばしていた。身を切られるような冷たい風に鼻の頭を真っ赤にして帰ると、潔が風呂を沸かして待ってくれていた。風呂上がりに潔と乾杯したビールのうまかったこと。
風のやさしさを感じて、季節の移り変わりを実感した。
入学式の頃は、きっと桜の花が満開だろう。
どんな高校生活が始まるのか、葵は今から楽しみでしょうがない。
春休みに入って、街には家族連れが多かった。
賑やかな商店街を人波に注意しながら走る葵の前に、お馴染みのパチンコ屋『ラッキーDELDEL』の派手なネオン看板が見えてきた。
《祝・新装開店》の花輪が並ぶ店先に自転車を止めて、葵は店内をこっそりと覗き見た。
もういない誰かの姿を捜している訳ではなかったが、ここを通るたびに葵はそうせずにはいられない。そうせずにいられない何かが、葵の中にまだ残っていた。
父の時計がポケットの中でコチコチと時を刻む。
そう――、時間は誰の上にも平等に過ぎゆきていくのだ。
そうして、過ぎてしまった時間は、もう二度と取り戻せない。

葵はポケットの中の時計をぎゅっと握りしめた。

商店街を通り抜け、公園が見えてきたら中田の家はもうすぐだ。
中田信次（なかだしんじ）は小・中学校を通してのクラスメートで、今度入学する高校にも一緒に進むことになった。暇だな～と思ったら、まず一番に中田のことが思い浮かぶ。そんな友人だった。
一昨年の夏、台風で二階の屋根が飛んだ中田の家は、その後一部改築してきれいになっている。門扉の脇に自転車を置いて呼び鈴を押すと、中田本人が顔を見せた。
「ちょっと出ない？」
葵の誘いに、
「おー。退屈してたんだ」
ズックをつっかけて、中田は出てきた。来た道を今度は自転車を押しながら、葵と中田は並んで公園へと足を向けていた。
「親父さん、まだバイトはだめだって言ってんのか？」
途中の自動販売機で買ったペプシを飲みながら、中田が訊いた。
「うん……」

「そう言っといて、自分は仕事も決まってないんだろ？」
「うん……」
「困ったフーテン親父だな」
葵は頷いた。
潔には定職につこうという気が元からないのか、勤めてはやめるということを繰り返していた。その合間にギャンブルをやっていることも、葵は薄々感づいていた。だが、その件で文句を言うつもりは葵にはない。他人に迷惑をかけることさえなければ、何をやろうと潔の自由だった。
「でも、どんなフーテン親父でも、元気でいてくれさえすればいいよなぁ…」
中田が呟いて、葵は思わず彼の顔を見た。中田も、葵の顔を見返した。
「じいさん…生きててほしかったもん」
言って、中田がペプシの缶を差し出した。葵が立ち止まると、中田は缶を手渡し、代わりに自転車のハンドルを支えた。
「うん。生きててほしかった…」
缶に口をつけながら、もう二度と会うことのない人のことを思った。
葵もよく知っていた中田の祖父は、四か月前に亡くなっていた。小学生の頃から、よく可愛がってもらったパチンコ好きのじいさんだった。

この街のどこにも、もう彼の姿を見ることはないのだ。
公園の入口に葵の自転車を置いた。
今日は抜けるような青空。陽も暖かいので、外で遊ぶには絶好の日よりなのだろう。子供たちが大勢集まっては、大きな声をあげてそこここで遊んでいる。
子供たちの遊びの邪魔にならないよう公園の隅にぶらぶら歩いていって、誰もいない鉄棒にもたれかかった。
「高校入ったら、どこかクラブ入る?」
中田が訊いた。
「うーん…。俺は、バイトしなきゃならないからなぁ。多分、クラブには入らないと思う」
「でも、ひとつくらいは入っておいたら? 女がいるクラブとか。うまくいけば、彼女できるかもしんねーだろ」
「中田は? 何か決めてんのか?」
「そりゃあ…、時代はサッカーですからね。俺も、時代に便乗してサッカー部にしようかな〜って…、女にももてそうだし」
さもおかしそうに笑いながら、葵は中田を見た。
「まったく、中田の選択基準は『女にもてるか、もてないか』。これだけなんだもんなー」

「だってえー、お年頃だもん。――葵も、適当に彼女作った方がいいぞ。彼女作らないから、男からラブレターなんかもらうんだ」
「えー……」
葵は口ごもった。
そうなのだ。男からのラブレターをもらうようになって、葵は自分の見てくれを初めて意識することになったのだ。
潔によく似ていると言われるこの容姿だが、色も白けりゃ首も細い。認めたくはないが、見れば見るほど、泣きたくなるほどの女顔で。
そんなことを潔にグチってみたところで、
「俺の子供なんだから、綺麗であたり前だ」
息子の悩みなど知らぬげに言い放つ。とんでもないお気楽な親父に訴えてみたところで、訴えるだけ無駄だった。
鏡で自分の顔を見るたびに、葵は思う。
女顔とはいえ、少女の持つふわふわとしたやさしい愛らしさとは全然違う自分の顔。
硬質ながら、優美で透き通るような一種不思議な顔の造作は、間違いなく潔の血から受け継がれたものだった。

でも――。
そうしたら葵を生んでくれた母の存在は、いったい自分のどこに残されているのだろう…？
「教科書…、いつ買いにいく？」
はぐらかすように葵は訊いた。
「んー…、どうしよっか？」
「俺はまず父さんに聞いてみなくちゃ…。金ないようだったら、ヘソクリから出さないと。文英堂で一式全部揃うんだったよな」
商店街の文具店の名前を出してみる。
「らしいぜ。文英堂なら、ツケ利くんじゃないのか？」
「高校生活のスタートからツケ利用してるんじゃ、俺の青春終わってるよ」
葵のセリフに中田がげらげら笑った。つられて葵も笑う。
「おし、んじゃ来週あたり一緒に買いにいこうぜ。葵、制服はどうする？」
「あ、制服はもうバッチOK」
「ちぇっ！　準備いいなぁ…。俺、お袋がついてくるなんて言い出したらどうしよう」
「ついてきてもらった方がいいと思うよ。ほら、補正とかあるから。中田、そんなのよくわからないだろ」

冗談じゃねえ。絶対やだぞ！　と言い張る中田がなんだか羨ましい。
誰かについてきてもらったり、世話焼いてもらったり。そんなことなど、昔っから葵には無縁だったから。
ころころと足元にサッカーボールが転がってきた。
きた方向に目をやると、広場で子供たちが手を振っていた。
「葵兄ちゃーん！　信次兄ちゃーん！　一緒にサッカーやろうよお！」
「おーしッ！　ガキども、待っとれー！」
手をぐるぐる振り返して、中田がサッカーボールをぽーんと蹴った。
「さてと。西崎高校サッカー部入部希望者、中田信次君のお手並み、拝見といきましょうか」
そう言って駆け出した葵に、
「お足並み、だろ！」
中田がわめいて、あとを追った。

＊＊＊

陽が落ちるまで子供たちとサッカーで遊んだ。

外で駆け回って遊ぶなんて、考えてみれば葵にはずいぶん久しぶりのことだった。受験とバイトを抱えて、いつの間にか『遊ぶ』という感覚を忘れてしまっていたのだ。

だが、忘れていた感覚を思い出すのは簡単だった。つい夢中になってしまって、気がついてみれば、夕飯の支度のことをすっかり忘れていた。中田とも別れ、自転車を飛ばして帰ってきた葵がまだ冷蔵庫も開けないうちに、潔まで帰ってきてしまった。

「ごめんっ！　お腹空いた？　すぐ、ご飯の支度するから！」

あわててキッチンに飛び込んでお湯を沸かし始めた葵の背に、潔が言った。

「いい。今夜は寿司を食いにいこう」

「寿司――？」

葵は訝しげに振り返った。

くわえ煙草の潔が、のんびりと紫煙を漂わせながら頷いた。

教科書代のことも言わなくてはいけないというのに、寿司なんか悠長に食っていられる経済状態かってんだ、うちは。

「たつみ鮨の大将が、今日はいいネタが入ったって言ってた。お前、寿司好きだろう」

どうやらギャンブルで大勝ちしたというところなのだろう。潔は上機嫌だ。

寿司は好きだけど、潔と一緒では大トロをバンバン頼みかねない。宵越しの金を持った試しの

ない潔に教科書代のことを言うのなら、今しかない。
「父さん、行ってきていいよ。俺は行かない…。その代わり教科書買いたい…」
「教科書？」
「高校の教科書…。買わないと、授業受けられない」
ハイ、ちょーだいと手を出した葵の顔を見て、潔がかすかに眉をしかめた。
いくらだとも聞きもしないで、胸ポケットから財布を出す。万札を適当に引き出すと、葵に差し出した。
「これで足りるか？」
数えてみたら七万あった。
「充分。……おつり」
教科書代と当座の生活費の三万だけもらって、残りの四万を返そうとしたが、潔は受け取らなかった。
「お前にやる」
「だって…ヘソクリにするよ」
「しろよ」
「あとで返せって言っても、返さないから」

「そんなこと言うかよ。さあ、寿司食いにいくぞ」
「だからぁ…父さんひとりで行ってきて」
潔がたつみ鮨に行く気満々なのはわかってはいても、七万という大金を絞り取ってしまったのは葵だった。その上さらに寿司などご馳走してもらうなんて。
潔は両手を腰にあてると、ため息をついた。これは聞き分けのない息子にほとほと手を焼いていますという、潔お得意のポーズだ。
「親の言うこと聞かない子は、ケツぶっ叩く！」
潔の怒声に、葵は跳び上がった。
「行きますッ！」

しかし、晩飯のたつみ鮨はさんざんだった。
葵が今度の高校の制服の話をした時、潔は血相を変えて怒ったからだ。
「他人のお下がりをもらうだと！」
「人聞きの悪い。もういらないのなら、譲ってくれるよう俺から頼んだんだよ」
「同じことだろう！」

制服は、この春西崎高校を卒業したひまわりベーカリーの一人息子鈴原先輩から譲ってもらう約束をしていたのだ。二年の終わりに新調したというガクランは、実質一年しか着ていない。『お古』というにはまだ新しい制服だ。

制服を買う金も結構馬鹿にならない。これだけでもお金を浮かせることができれば、体操服とか靴とかを心おきなく買うこともできる。

潔が一か月前失業してから、葵は葵なりに一生懸命考えていたのだ。

それを、潔は――。

「俺の息子が、他人の着古した制服を着て、新しい学校に入るって言うのか。えっ？　そんなみじめなマネ、俺の息子にさせろって言うのか！」

「何がみじめなんだよ。俺がいいって言ってんだから、いいじゃないか！」

「いいだと？　嘘をつけ！　お前がいい訳がない！　誰が、好き好んで制服の古着なんかをもらうんだ！　そんなもの喜ぶ人間がこの世にいる訳がない！　だいたい、何でお前が西崎なんかに行くんだ。お前の頭だったら、もっとランク上の学校に進めただろう。何だって、よりにもよって西崎みたいな馬鹿でも入れるようなところに！」

「だって、近いし、知ってる人多いし。ランク上のとこに行ったって、どうせ大学なんか行かないんだから。そんなの無駄なだけだ」

潔が鬼のように目をつり上げた。
「大学に行かないだとぉ？　なんでもかんでも勝手に決めて…、挙句に大学には行かないだと――ふざけたこと言うなッ！」
「もう入学手続きしてんだよ！　意見聞きたい時には、いっつもいないくせに、今さらワアワア言うなよなッ！」
「絶対に許さないからな！　他人のお下がり着せて、お前を学校にやるくらいなら――」
「古いも、新しいも、この際関係ないだろ！　制服は制服なんだから！」
何を言い出すからわからない潔を、葵はあわてて遮った。西崎なんかやめてしまえ！　などと、とんでもない暴論をかまされてはたまらない。
「新しい学校に入る時は、新しい服を着ていくっていうのが、常識だろうが！」
「父さんに常識うんぬん言ってもらいたくないよ！　非常識が服着て歩いているくせに！」
「このガキ！　俺のどこが非常識だって言うんだ！」
「自分の息子をこのガキ呼ばわりするようなとこだよッ！」
親子のつばぜり合いのさなか、目の前に並んだ寿司たちはいたたまれなかっただろう。
たつみ鮨の大将が、「まあまあ…、寿司食いねぇ」と仲裁に入ってくれて、二人は黙って寿司を食べるのを再開した。

たつみ鮨の客は、皆顔なじみのご近所さんたちばかりだ。
また親子ゲンカやってるよ…仲いいんだから…と笑っているおじさんたちにぶんぶん首を振ってみせて、葵は口いっぱいに大トロを頬ばった。
カウンターの隣で、もそもそと寿司を口に運ぶ父親を見ながら、変なところで超頑固なのは、このフーテン親父の方だと思った。見栄ばかり張っていたって、どうにもならない。よそ様の家と比べてみたって、しょうがないことなのだ。壇ノ浦の家は、世間一般の家とは違うのだから。
自棄になったように寿司をつまむ葵だったが、とろけるように旨いはずの大トロも、なんだかイカのできそこないを噛んでいるみたいで妙に味気なかった。

たつみ鮨からの帰り道を並んで歩きながら、葵はいつものように折れてみせた。
「制服、さっきのヘソクリで買うから。心配しなくて、いいよ」
潔がむっと葵を見た。
「鈴原先輩には、きちんと断わる。制服、買ったら父さんに見せてあげるね」
「……」
「お寿司、ごちそうさま」

控えめに笑いかけてみても、潔は前に向き直ったきり何も言わない。
まだ怒ってるのかなぁ…と思った葵も、それきり口をつぐんだ。
アパートの階段を上る時になって、ふいに潔が言った。
「葵、ごめんな…」
潔が何を謝っているのかわからなかったが、葵はとりあえず頷いた。潔がもう怒っていないことがわかって、本当はうれしかった。
部屋に帰ったらビールをご馳走してやろうかと思いながら、葵は弾むように潔のあとを追いかけて階段を上った。

2

翌日は、葵は朝から洗たくに精を出した。

潔は昼前に出ていったきり、お昼にも戻ってこなかった。毎日毎日ふらふら出歩いて、いったいどこをうろついているのやら。

洗たく、掃除を済ませてから、お昼ごはんにチャーハンを作って食べた。テレビを観ながら、ずるずる時間を過ごし、いつの間にかうたた寝してしまっていたようだ。

ハッと起き上がった時、陽はだいぶん傾いていた。

テレビのある六畳間は東向きなので、もうすっかり薄暗くなっていた。

つけっぱなしのテレビはロボットアニメの再放送を放映している。その画面の明るさだけが、チラチラとした光を室内に投げかけていた。

「あー…」

葵はだるい身体を起こして、大きく伸びをした。そうして、次の瞬間ギョッと伸ばした腕を硬直させた。

薄暗い部屋の隅に、誰かが座り込んでいた。



暗さに目が慣れた葵がじっと見てみると、それは父親の潔だった。
「――びっくりした。もう帰ってたんだ。脅かさないでよ」
ほっと息をついて、立ち上がった。電気をつけて、改めて畳に座り込んだままの潔を見下ろした。
「どうしたの？」
「――」
明かりの下で見る潔の顔色は、幾分青ざめて見えた。
「あ、お腹空いてるんだ。ごめん、ごめん。すぐに支度するから」
「葵――」
呼ばれて、葵は振り返った。
「葵……葵――。すまない――」
「何が？」
屈託なく尋ねる息子から目を逸らせるようにして、潔は言った。
「借金を――作ってしまった。莫大な、それこそ簡単には返済できないくらいの借金だ」
「――」
「一生かかったって返せないくらいの、本当に本物のものすごい借金なんだ」

「――ギャン…ブル……？」

目の前がぐるんと一回転した。急に渇いてしまった喉の奥から、葵はやっと声を絞り出した。

潔が黙って頷いたが、そんなこと今さら聞かなくてもわかりそうなものだった。莫大な借金を一日のうちに作ってしまうには、ギャンブルか、はたまた投機の失敗か、そんなものくらいしかないではないか！

「――いくら？」

葵は努めて平静に訊いた。

「三百万」

「大丈夫だよ！」

葵は絶叫した。潔の身体に飛びついて、言い聞かせるようにその肩を揺すった。

「――大丈夫！　それくらいなら、絶対に返せる！　悲観することはないよ。俺も…！　俺も働くから…！　そんなの莫大でもなんでもない！　軽い軽い！　大丈夫ッ！」

叩きつけるスコールの中で溺れかけていた親子が、一瞬にして虹の輝く雨上がりの南国の空の下に転がっていったようなものだった。明るい光明がぱあっと射してきて、目の前が一気に開ける思いがした。

呆然と、そんな息子を見ていたのは潔の方だった。

「二人で力合わせて金を貯めれば、それくらいの借金屁でもない！　そんな死にそうな顔をしなくてもいいよ！　絶対になんとかなるから！　なんとかしてみせるから…！」

「――――」

「俺のヘソクリ、全額出すから！　昨日もらった金の時計も質に入れて、あとは…あとは…」

「――ドル…」

「へ？」

「三百万……ドル」

潔がぼそっと呟いた。

「〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰！」

三百万――ドル！

葵はふらふらと立ち上がった。

混乱した頭の中で、必死に計算をしてみる。

今いったい、一ドルはいくらするのだろう…。えーとえーと…百円だったとしても……、

――三・億・円・！

日本円にして《三億円》もの借金を、父はどうしてだかドル建でこさえてしまったというのか！

三億円。それは、大根一本買うときですら、一円でも五円でも安いものをと店を選ぶ葵から見てみれば、天文学的な数字とさえ言えた。

そんな超莫大な借金を、たったの一日で……。

がたがたと震え出しそうになる身体を、懸命に押さえ込んだ。

歩こうと一歩足を踏み出して、葵は強烈な眩暈に襲われた。そのまま目を回して、畳の上にばったりと倒れた。

「あおい！」

潔の声が遠くに聞こえた。

いつかは何かやらかすかもしれないと思ってはいた。葵の父、潔のことだ。

彼はなかなか予測のつかない男で、やることはいつも唐突だった。何か考えているようで、何も考えていないかと思えば、熟慮した末にそれこそどーしようもないことをしでかしてくれたりする。

今回の借金も、葵の入学式を控えた今この時というタイミングが、彼らしいといえば彼らしい。それも教科書を買う直前！　制服を買う直前！　たつみ鮨で大トロをたらふく食ってしまった

翌日に！　――こんなことになってしまうなんて……。
さすがの葵も思いもしなかったことだった。

「葵…葵……」
心配そうな声が聞こえる。
ああ…お父さんだ……。
ぽっかりと目が覚めて、葵は声のした方向に顔を向けた。
目を回して倒れてしまったあと、潔が横にさせてくれたのだろう。そんなに時間は経っていないはずだが、なんだか倒れた時のことが大昔のように感じる。苦しくないようにと、シャツの胸元がくつろげられていて、肌布団の手ざわりがさすがに気持ちよかった。
枕許に取りすがっていたらしい潔の顔は、かなり憔悴しているように見えた。
「父さん……大丈夫？」
葵の言葉に、潔はなんとも形容しがたい表情を浮かべた。泣きそうにも、苦しそうにも、切なそうにも見える。こんな顔をした潔を見るのは、葵には生まれて初めてのことだ。
「ごめんな……。ごめん…葵…ごめん……」

葵の左手を握りしめて、潔が呟いた。
その手をしっかりと握り返して、葵は微笑った。
「もういいから…。ね、二人で頑張ろう。二世代ローンってあるでしょ。あれ、組んだと思えばいいんだし。人生、目標あった方が頑張れる。借金返済を生きがいにするってのも、なかなかいいんじゃないの」
「――――」
「俺は大丈夫だよ。父さんも、大丈夫。俺、西崎高校行かないで、明日から働くから…」
「いや…お前は学校に行くんだ」
やけにきっぱりと潔が言った。
「――え？」
「但し、お前が行くのは西崎高校じゃない。M県の、全寮制高校に行くんだ」
「なんで……」
「詳しいことはあとで話す。今は、とにかくゆっくり眠るんだ…」
葵の左手を布団の中に戻しながら、潔が言った。
「そんな…！　ちゃんと話してよッ！」
潔はしかつめらしい表情で、首を横に振った。

「今話すと、お前はショックを受けてしまうかもしれない。またぶっ倒れてしまうかもしれない。怖い話は、少しでも先に延ばした方がいいだろう？　そう思うだろう…？」

いったい何が起きているのかわからなかったが、とにかくその潔の言い回しに、葵はゾーッと背筋を凍らせた。

「そんなの、一生聞きたくないッ！」

「確かに、今は聞かない方がいいな。だが、明日には聞いてもらう。大切な話だからな」

そう言って潔はうっすらと笑ったが、目だけは全然笑っていなかった。

「聞かないよ！」

潔はもう何も言わなかった。布団の中に葵を残したまま部屋を出ると、音もさせずに襖を閉めた。そんなことすらものすごく怖くて、葵は布団の中で身体を固くしていた。

父親が何を考えているのか。

それがさっぱり読めないことが、本当は一番怖かったのだけれど。

＊＊＊

ショックを受けてしまうかもしれない。またぶっ倒れてしまうかもしれない。

潔は別に謙遜して言った訳ではなかった。

翌日、

「何も聞きたくなーい！」

わめき立てる葵を無視して、潔は厳かに言ったのだ。

「とりあえず借金の担保として、お前を差し出すことにした。何、無事借金を返済してしまえばなんてことない。無傷で返してもらえるんだ。ほんの少しの辛抱だから」

「――たんぽ!?」

「ゆたんぽ、じゃないぞ」

わかりきったことを潔は言う。

「担保？　――担保?!」

「昔風に言えば、人質だな」

「――今風に言ったって、立派な人質じゃないか！」

「そういうことだ」

三百万ドルの借金のショック覚めやらぬまま、目の前のフーテン親父は、今度は一人息子を借金返済までの担保――要するに人質――に差し出しました、ときた。

くらくらする頭を抱えて、葵は畳に片手をついた。落ち着け、落ち着けと自分に言い聞かし、

父親が巻き起こしたこの難局をどう乗り切ればいいのか、必死に考えていた。
そんな息子にかまうことなく、潔は淡々と質権者についての説明を始めた。
「お前がこれから世話になるのは、帝壮一郎（みかどそういちろう）というじいさんだ。このじいさん、不動産を扱っている株式会社ミカドを中心として、金融・建設・興業・サービスと多岐に渡る商売に手を出している。お前は知らないだろうが、日本国内の経済界でもそれなりに名前を知られているやり手ジジイなんだ」
葵は不安げに顔を上げた。
昔、ここら一帯を仕切っていたヤクザも、帝と言わなかったか？
「ヤクザ……」
「だったらしいな。堅気になって、三十余年とかなんとか言っていたから」
「……」
そんな…牛丼作って何十年じゃあるまいし……。
深い衝撃に打ちのめされている息子にかまわず、潔は続けた。
「まぁ、心配するな。借金ったって、なんともならない金でもない。俺が金を作る間、お前はおとなしく担保になっててくれさえすれば…」
「――なぁんともならない金でもないってェ…?!」

三百万ドル。日本円にして、約三億円もの大金を――！
借金こさえた当の本人が言うにしては、許されない暴言だった。
カーッと怒りに燃え上がった葵は、憤怒のままに潔に摑みかかっていった。
「バカバカバカッ！　よくもそんなのんきなこと言ってられんなッ！　俺たちの置かれている状況が本当にわかってて、そんなこと言ってんのかよ！　三億円だよ、三億円！　どうやったら三億円なんか返済できんだ！　どうやったら、俺を受け出せるっていうんだ！　一生借金の担保に入れられたまま、あきらめて人生終えろって言うのか！　――もっと緊張感持てよッ、この馬鹿オヤジ！」
「三百万…円、だ」
「昨日、三百万ドルって言ったじゃないか！」
父親の背中をバンバン叩いた。
潔は少し考え込んでいたが、それがポーズだけだというのは見え見えだった。
「覚えてないな」
白々しい言いぐさに、葵はキレた。
「三百万ぽっちで、誰が人質になんかなるかッ！　だいたい、今は江戸時代じゃないんだ！　身売りみたいなそんなマネ、明らかな人権侵害じゃないか！　現代のこの法治国家で、そんな非道

が許されるもんかッ！」

「三百万を馬鹿にすると、あとで三百万に泣くぞ。それに、この取引はもうすでに成立しているんだ。法治国家大いに結構。だが、そんな世の中でさえ、まだまだ暗黒な部分はあるんだよ。その証拠に、お前が担保にならなきゃ、俺はドラム缶にコンクリート詰めにされて、東京湾に沈められることになっている。そうした方がいいなら、そうしよう」

まるで他人事のように、潔が言った。

「あッそう！　じゃあ、そうしたら！」

「わかった」

立ち上がった潔がさっと踵を返したので、葵は度肝を抜かれた。タックルするように潔の足にすがりつくと、泣き声でわめいた。

「嘘だ、嘘だよ！　父さんが死ぬなら、俺も一緒に死ぬ！」

ため息をひとつついた潔が、静かに息子を見下ろした。死んでも離すものかとばかりに、父親の両足をしっかり抱え込んでいる我が子をじっと見つめた。

「担保になるか？」

「なる！　なるから、行かないで！」

担保とはいっても、要するに借金返済までの『人質』だった。
てっきり帝の屋敷ででもこき使われるのがオチだろうと思っていた。
高校進学など、夢のまた夢。借金返済の一部に、当然葵も組み込まれるものだと思っていたのに――。
しかし、酔狂なジジイというものも世の中にはいるものだ。帝壮一朗は借金の担保に取った葵を、私立の高校に行かせてくれるという。
潔の説明はこうだ。
「俺は、とにかく借金返済のために働きに出なくちゃならない。残念だが、西崎高校にお前を通わせることはできない。それで、帝の勧めでお前をある私立の全寮制高校へやることにした」
「なんで…、なんで西崎高じゃダメなんだよ」
「お前、本当に今の状況をわかってんのか？」
「……」
それを潔に言われるとは、葵にとっては極めて心外である。
「いいか？　これからも、俺たち二人が今まで通りの生活をやっていけるなんて思っていたら、それは大きな間違いだぞ。俺はお前を一刻も早く受け出すために、身を粉にして働かなくちゃい

けない。この街にいては、それは無理だ。帝の口利きで、仕事を世話してもらうつもりだ。遠いところに行かなくてはいけないだろう。当然、お前を置いていかなきゃならない。だが、お前をここにひとり残していては、心配で俺はおちおち仕事もできやしない」

今までさんざん放ったらかしにしていたクセに…。今さら心配だもないもんだ。

「だから…全寮制高校……」

「そうだ。帝が言うには、とてもいい学校らしい。学費も寮費も、帝がみんな面倒みてくれる。小遣いだってくれるんだぞ。今までみたいに、大根一本買うのにキュウキュウ言わなくていいんだ」

「キュウキュウ言った覚えはないよ！」

葵は本気で怒って言った。貧乏がつらいと思ったことは、本当に一度もないのだ。

「とにかく、お前が寮に入ってくれれば、俺も安心だ。最初は寂しいかもしれないが、すぐに友達もできる。楽しい高校生活が始まるさ」

「体のいい、牢獄ってとこだね」

葵は鼻先で嘲笑った。

「葵…お前な」

「大事な担保物件である俺を逃がさないように、学校という名の牢獄に俺を閉じ込めるって、要

はそういうことを帝は言ってんだろ！　いいよ、入ってあげるから。鉄格子の中で、父さんが迎えにきてくれるのを待ってるから。友達なんかいらない！　何にもいらない！　俺は、何にもいらないんだからね！」

葵のそんな思いを理解したのかどうかはわからなかった。潔は黙って受話機を取ると、帝に電話をかけたのだ。

「息子は承知しました」

そう言う父の冷たい声を、葵はじっと聞いていた。

＊＊＊

帝壮一朗翁お勧めとやらの私立香陵高校は、M県のM町にあった。

とにかく奥地というか、へき地というか、要するにそんな山奥にあるという。まさに牢獄と呼ぶにはふさわしい学校だったのだ。

慌ただしく出発が決まったので、見送りもささやかなものだった。中田や近所のおばさんたちが、とにかく駆けつけてくれて別れを惜しんでくれた。

「せっかく一緒に西崎に入れるって、楽しみにしてたのに……」

中田は何度もぼやいていた。
本当のことを言う訳にはいかなかったので、『父親がらみのやむなき事情で』と葵は言い訳したのだが、急なことでもあったし、中田には何が何やらさっぱりわからなかったみたいだ。
「連れション感覚で、高校に行く奴がいるか」
別れの情緒を介しない潔が、ばっさりと中田のぼやきを切り捨てた。
葵の袖をこっそり引っ張った中田が、
「おい。あの親父、なんとかしろ」
と訴えたが、葵は苦笑するばかりだった。
「葵、バスがきたぞ」
潔がそっけなく言った。
大通りの交差点を曲がって、バスがやってくる。葵は荷物を持ち直した。
「葵ちゃん、夏休みには元気な顔見せてねぇ」
おばさんたちと順ぐりに握手を交わした。最後に、中田とも握手をした。結構長いつき合いだが、改まって握手なんかしたのは実に初めてのことだった。
バスに乗り込むと、座席にもつかないうちにさっさと発車してしまった。あわてて、窓の外に目をやると、中田たちが一生懸命手を振っていた。

潔だけが、見送りの輪から外れた位置で、腕を組んだままじっと立ちつくしている。
別れに際しても、特に一言もなかった。見送りに出てきただけマシだったというべきか。まったく、とんでもない親父だった。
どんどん小さくなってゆく…。
両手を振り回している中田やおばさん連中。
黙って立ちつくしているだろう、父親の姿——。その姿が完全に見えなくなってしまった時、不覚にも葵の瞳から涙がこぼれ落ちた。

3

ＪＲを乗り継いで、たどり着いたのが山あいの小さな町だった。

古い駅舎を出て、あまりの田舎ぶりに葵はびっくりした。

駅前にはつきものの華やかな町並みもなければ、人っ子ひとりの姿すらない。申し訳程度の店々が駅前銀座を気取るように並んでいたが、その半分は雨戸を閉めたままだ。

死んだような静けさの中に、時おり野鳥のさえずりだけが澄んだ音色を響かせている。

初めてディーゼルカーというものに乗って、そのエンジン音のものすごさに肝をつぶしたばかりだった。もっと肝をつぶさせるものが、列車を降りたご当地で待っていようとは。

唐突に、いつかテレビで見た古い西部劇を思い出した。

砂ぼこり舞うゴーストタウン。乾いた風に転がるタンブルウィード。なんだか、あの時の映画のイメージがこのド田舎と重なってしまう。

そうすると、葵は夕陽を浴びながらひとりやってきたガンマンというところか。

ふと地平線上に目を向けてみると、遠く緑の山並みが連なっているのが見えた。冗談ではなく、三百六十度ぐるりとその光景に囲まれている。正面の山のふもとには、なだらかな丘が続いてい

た。

視線を転じて、今度は駅からの一本道を目で辿ってみた。形ばかりの商店街を抜けた先は、のどかな田園地帯になっているのがわかった。

とんでもないところにきてしまったという意識が葵の中にわき上がった。これで、学校が某ヨットスクール並みのすごいところなら、さっさと帰ろうと本気で思い始めた。

「おおっ！　ニューボーイ！　ニューボーイ！」

駅前のロータリー（と言うほどのものじゃない）に停まっていたタクシーが、わめき声をあげながらいきなり葵の目の前に横滑りしてきた。

人っ子ひとりいないと思っていたのに、タクシー一台と運転手があっという間に葵の前に現れる。ゴーストタウンと見えた町に、実はたくさんの人間が隠れていた西部劇と同じだ。

車の窓を開けて、まだ若い運転手が帽子をくいと上げながら顔を覗かせた。

「香陵の生徒さんだね。一発飛ばすから、乗んな」

「いえ……。バスがあるはずだから……」

「かーッ！　金持ちの坊っちゃんが、ケチケチしなさんな。どうせ親の金だ。乗んな！」

無理矢理乗せられた。バス停は確かにあったが、こんな町ではいつバスがやってくるのかもわからない。そんな状況にあっては、そう文句も言える立場でもなかった。

「いやー、今日は朝から香陵の生徒さんで稼がせてもらってるよ。あさって入寮式だからね。今日あたりから、坊っちゃん連中ぞろぞろってヤツでさ」
田舎道をタクシーかっ飛ばしながら、運転手が楽しそうに笑う。
「ぞろぞろ……」
「そう。今日はあんたで、三人目」
「ぞろぞろ…？」
たった三人で？
「始業式前には、帰省してる上の生徒さんもドッと帰ってくるしね。楽しみだよ」
「さっき、ニューボーイって言ってましたよね」
葵は尋ねた。
「ああ？」
「ニューボーイってなんですか？」
「そりゃ、あんた。新入生のことだよ」
「そうなんですか」
「そうなんですかも何も、卒業生をＯＢって言うだろ。オールドボーイってさ」
「ああ…。そう…なんですね」

この時期、香陵学園の生徒をカモにしているタクシー運転手は、カモにしている相手のことをよく勉強していた。おかげで、学校に着くまでの間に、葵は自分がこれから入ることになる学校のことを、片鱗だけでもやっと知ることとなった。

私立香陵学園高校はイギリス人ジェイムズ・メイトランドが創始した全寮制の男子高である。生徒の大半が、海外赴任中の親を持つ子弟であり、勢い帰国子女が多い。入学金、授業料及び寮費が馬鹿高くて、それなりの金持ちでないと到底子供を入学させることなどできない。いわゆる典型的なお坊っちゃん学校ってヤツだった。生徒数は、一学年四十人の一クラス編成。全校生徒合わせても百人ちょっとの小さな学校だ。

「生徒さん、良家の子息だけあってみんな礼儀正しいねー。その反面、真面目過ぎて頭固い子ばかりだと思っていたけど、なかなかおもしろい子もいるよ。去年だっけか、うちの親戚の畑、制服姿で耕していた生徒さんいたしね。あそこの縞の上着は目立つから。すぐわかった、香陵の生徒さんだって」

「畑を…。え？　耕していたんですか？」

聞き間違いかと思って、思わず葵は聞き返した。

「そう。なんでだって聞かないでくれよな。そんなの、耕したご本人しか知りゃしないんだからな。そら、着いた」

タクシーから放り出されて、葵は目の前に立ちはだかる練鉄製の立派な校門を見上げた。
その先には、英国のパブリックスクールもかくやと思わせる石造りの校舎があった。
私立香陵学園高校。
今日から、葵はここで生活するのだ。

学校の事務室で、入寮の手続きをした。
舎監の先生から寮の二人部屋の鍵をもらい、同室の相棒がすでに三日前、一番乗りでこちらに着いていることを聞いた。沢崎詠生というのが、葵と同室になった生徒の名前だった。
静まり返った校内を寮へ向かって歩いていった。
渡り廊下から、広々とした庭園が目に入る。春の日射しをいっぱいに受けて、木々の緑が眩しい。ヨーロッパ風の庭園に桜は似合わないかもしれない。そんなことをチラリと思った。
石造りのアーチを抜けて寮に入った。
ひっそりとした廊下に、自分の靴音だけが響く。一〇六と表示があるドアの前に立つと、壁に名札を入れるケースがかかっていた。さっそく『沢崎詠生』の名札が入っている。
その隣の空のケースに、鍵と一緒にもらった自分の名札を入れると、葵はドアをノックした。

「どうぞ」
中から男の返事がした。葵はドアを開けると部屋に足を踏み入れた。
彼――沢崎詠生――はいた。
窓辺に腰を下ろして、大きく開け放した窓から外を眺めている。端正な横顔がゆっくりとこちらへ向けられた。入口で立ちつくす葵の姿を認めると、彼は立ち上がった。
「壇ノ浦――葵…？」
問われて、葵はぺこりと頭を下げた。
「はい。…これから、どうぞよろしく」
「こちらこそ。僕は沢崎詠生」
そう言って彼は右手を差し出した。
この学校の生徒は礼儀正しいというのは本当らしい。別れの握手も初めてなら、こうやって初対面の挨拶を握手でするというのも葵は初めてだった。
握手を交わしながら、葵は彼の顔を見上げた。背が高い。何かスポーツでもやっているのだろうか。細身の身体は鍛え抜かれているように見えたが、そのインテリめいた風貌は彼の頭脳の明晰さを如実に表わしている。彼が頭のいい男だということは、確かめなくてもわかった。
「悪いけど、勝手にこちら側を使わせてもらってる。何か不都合があれば、替わるけど？」

入って左手の机とベッドを示して、詠生が言った。
「別にかまわないよ」
葵は右手のベッドに荷物を放り投げ、上着を脱いだ。黙々と荷物をほどく。そんな葵の背に向かって、詠生が言った。
「隠していると思われるのが嫌だから、先に言ってしまうけど」
「え？」
葵は振り返った。
「僕は、君よりもひとつ歳上になる。他の高校に進学したんだけどね、どうしてもこの学校で勉強したくて、もう一度入り直したんだ」
「へえ…そうなの。じゃあ、本当なら二年生なんだ」
学校をぽんぽん変えられる贅沢など、それこそ金持ちの特権ってヤツだ。借金に縛られて、こんなところに叩き込まれてきた葵とはえらい違いだ。
「気にしないでくれ。君と同じ新入生だ」
「ニューボーイってヤツだね」
覚えたての言葉を使ってみた。
得意気な葵を眩しそうに見つめながら、沢崎詠生が微かに笑った。



入寮式までの二日、詠生と一緒にいていろいろなことを話した。
詠生は、それなりの進学校に通っていたらしいのだが、これといってやるべきことがない高校生活に嫌気がさして、この学校に入り直したのだという。
では、何をやりたくてこの学校にきたのかと尋ねると、困ったような顔をした。
「それをこれから見つけようと思ってるんだ」
詠生はそう言った。
その頃には、新入生たちもぞくぞく学校にやってきて、すぐに寮は新生活に興奮する新入生たちで騒がしくなった。隣近所は皆クラスメートだった。彼らはすぐに顔見知りになり、この年頃の子供らしく、たわいないことで騒ぎ合った。
入寮式が終わると、今度は入学式までの間に片付けることがあった。
制服を作ってもらうこともそのひとつで、出入りの仕立屋にデザイン選びの相談に乗ってもらったり、採寸してもらったりと、そんなことなどまるっきり初体験の葵は結構忙しい。
「驚いた。この学校の制服って、三種類もあるんだ」
葵の言葉に、

「寮内でも、自分の部屋以外はきちんとした服装を義務づけられてるから、どうしても種類が多くなるんだ。どれを選ぶのかは自由らしいよ」

そう言って、詠生はあれこれと試着させては、楽しそうに葵の世話を焼いた。

結局、葵はオーソドックスなアイビー型の紺ブレザーと、ダブルのキングストン・モデルのジャケットに決めた。いずれも、胸ポケットにはスクール・イニシアルのモノグラムがほどこされている。潔からもらった金の懐中時計も、この制服なら違和感ないはずだ。

詠生は、その二つに加えて、大胆なストライプ柄のクラブ・ジャケットを選んだ。

見栄えのいい詠生は、何を着せても似合いそうだった。日本人だけど、英国的といえなくもないその容姿が、そう思わせるのだろう。

いつぞや、タクシー運転手が言っていた他人の畑を耕していたという生徒のことを思い出した。彼はこの縞のクラブ・ジャケットを着ていたに違いない。さすがにこの派手な縞模様では、何をやらかしてもすぐにバレそうだ。

この学校の特徴は制服だけでなかった。創始者がイギリス人だったせいか、この学校のすべてが西洋風だった。食事は箸ではなくナイフとフォークを使うし、和食メニューも少ない。

寮の部屋はさすがに狭いが、寮にはオープンスペースとしての大部屋が幾部屋もあった。学習室を始めとして、娯楽室や、運動室などがそれなりに充実している。

特に上級生たちが集まる南側の娯楽室は『サロン』と呼ばれて、そこを利用できるのはすごく名誉なことなのだと、隣室の真木尚一が教えてくれた。

なんだか、別世界にいるみたいだと葵は思った。

父親のこさえた借金担保事件さえなければ、予定通り葵は西崎高校へ進み、今頃はガクランを着ているはずだった。

毎日商店街を抜けて学校に通い、バイトに勤しみ、時には中田と自転車で走り回ったり——。主婦業も相変わらずで、家計に頭を痛めながら、階下のおばちゃんの煮しめのおすそ分けに感謝し、時には炊事で荒れた手で潔をはっ倒したりと、そんな平凡な毎日が続いていたはずだ。

最終的には自分の意志で選んだとはいえ、この学校に入るということは牢獄に入ることと同じだった。葵にとっては、それこそ死ぬほどの覚悟だった。

それなのに、今は新しい生活に興奮する心を抑えきれない。初めて見たり聞いたりするものの、その目新しさに目を奪われてばかりだ。

本当は、先のことを考えると胸が押しつぶされそうになる。潔のこともちろん心配だった。だが、くよくよしていても始まらない。賽は投げられたのだ。あとは潔を信じて、葵は待つだけだった。

だから、牢獄だとばかり思っていたところが、実はそうでもなさそうだとわかって嬉しかった。

同時にブルジョワ的習慣に慣れてない葵を、何かにつけてリードし、さりげなくフォローしてくれる詠生の存在も、それこそ涙が出るほど嬉しかった。
悲惨な状況にいながら、それでも葵は強く守られている。
なんとかやっていける。
葵は、そう何度も自分に言い聞かせた。

＊＊＊

入学式前夜は、全校生徒が揃ってさすがに食堂は大賑わいだった。
それでも、定員いっぱい生徒がいる訳ではない。明日入学式を迎える一年生にしても、入寮をすませたのは、今のところ三十二人。全校生徒合わせても、恐らく百人にも満たないのではないか。
食事のあとは、部屋に戻って詠生とお茶を飲むのがこのところの習慣だった。詠生の淹れてくれた紅茶を飲みながら、その生徒数の話題になった。
「人員枠がある程度空いてるのは、当初からの予定通りなんだ。ここは転入生が多いし、特に九月なんかは海外から帰国したばかりの転入生とかが多いから」

もの知りな詠生は、なんでも葵の疑問に答えてくれる。
「でも、一学年一クラスだろ。そんな生徒数で、学校は商売やっていけるのかな」
持って生まれた貧乏性で、つい余計な心配をする葵だった。
詠生が笑いをこらえるようにして、葵を見た。
「心配ない。この学校は寄付金が多いからね」
「え！　授業料や寮費に大金ぶん奪(と)っておいて、まだ寄付金を搾り取ってるわけ？」
そんなアコギな…と呻いた葵に、今度こそ詠生は笑い出した。
「在学生からじゃなくて、ここを巣立った卒業生たちが、後輩と学校のために寄付金を寄せるんだってさ」
「へー。すごい」
「それだけ、みんなこの学校を愛してるんだね…」
その時、ドアを叩くリズミカルな音が聞こえた。ノックに応えて、詠生が「どうぞ」と声をかけた。
ドアを開けて部屋にやってきたのは明らかに上級生とわかる背の高い男だった。例の派手な縞柄のクラブ・ジャケットを着て、それが彼の持つ粋な雰囲気をより一層引き立てていた。
「沢崎詠生君と壇ノ浦葵君だね」

部屋を見回し、きびきびと尋ねた。詠生と葵は立ち上がると、その上級生の前に立った。
「僕は寮長の小野有弘。三年だ。どうぞ、よろしく」
小野が右手を差し出した。
この習慣にも、もう慣れた。葵と詠生はそれぞれ名前を名乗りながら、小野と握手を交わした。
「せっかくのティータイムをお邪魔して悪かったね。こうやって新入生の部屋に挨拶にくるのも、寮長の仕事でね。どうかな。寮生活に何か不都合でも?」
「いえ。たいそう快適です」
「結構。気がついたことがあれば言ってくれたまえ。——壇ノ浦葵君、君は山口県出身?」
「よくそう聞かれますけど、全然違います。ちなみに、平家と源氏ともまったく関係ありません」
葵の返答に、小野が口許に笑みを浮かべる。
「壇ノ浦…。なかなかインパクトある名字だね。葵という名も、君にとても似合っている。ご両親の命名センスに心から感服するよ」
小野は詠生に向き直った。並んでみると詠生の方が少し背が高い。だが、背の高さだけでは押し計れない威厳といったものが小野にはあった。
「沢崎詠生君、君は年令のことをここではずっと隠し通したい?」

「そんな必要はありません。現に、もう何人かは知ってます」
詠生がきっぱりと言った。
「結構。――今後、君たちのことを、ファースト・ネームで呼んでもいいかな？」
小野が二人に向かって尋ねた。
「かまいません。寮長のことはなんて呼べばいいんでしょうか」
「名前で呼んでくれ。僕は『長』で呼ばれるのには慣れなくてね」
「わかりました。小野さん」
詠生に任せておけば、なんでもスムーズにいくものだ。葵は感心しながら、二人のやりとりを聞いていた。
「南側の娯楽室を知っているかい。通称『サロン』と呼ばれている。僕は大抵そこで時間をつぶすのだが、よかったら今度遊びにきてくれたまえ。おもしろい輩もいるから、退屈しないですむことだけは請け合うよ。どうかな、詠生。葵？」
「もちろん、お邪魔させてもらいます」
「待ってるよ」
小野は最後に茶目っ気たっぷりにウィンクしてみせると、静かに部屋を出ていった。
詠生と葵は、ふーっ…と肩の力を抜くと、互いの顔をそっと見合わせた。

「ダンディー……！」
二人の口から同時に漏れ出たのが、その言葉だった。

4

入学式兼始業式が無事終わり、校内は穏やかな日常に包まれていた。

期待していた訳ではなかったが、入学式にもやはり潔の姿はなかった。入学式だけじゃない。葵の出発以来、音沙汰ひとつないのだ。電話の一本すら寄こさない潔に業を煮やして、葵の方から電話してみたりしたが、そんな時に限って留守だった。頭にきた葵は、もう二度と電話なんかしてやるか！　と半ばヤケっぱちで決心した。

寮長の小野は、あれ以来葵と詠生のことを気に入ったようで、頻繁に声をかけてくるようになった。

彼は、信じられないことだが全寮生の顔や名前をすべて覚えていて、実にいいタイミングでどんなところでも気軽に出没した。面倒が起ころうとしていても、彼の采配ひとつで事態は収拾の方向に向かう。その統率力は、傍で見ていても気持ちいいくらいだった。

学校内の規律はほとんど生徒の自治に任されていた。校則という形での押付けはほとんどなく、教師の口出しも滅多になかった。代わりに、最低限の社会的ルールというものがしっかりと校内には根づいている。

その模範となっていたのが、どうやら寮長の小野であるらしかった。面倒見のいい彼が、誰からも慕われていることは、入学したばかりの葵にもすぐに理解できた。

入学式から一週間ほど経った頃、葵は詠生と一緒にサロンに出向いてみた。

小野が社交辞令でもなく、本心から二人をサロンに招きたがっていることがわかって、せっかくの好意に甘えることにしたのだ。

南側の、一番いい場所にあるサロンは、どうやら生徒自治会の役員及び寮会の幹事の溜り場らしかった。それだけでも、他の娯楽室とは充分に一線を画する部屋だった。足を踏み入れて、そのことを目で確認してみることになって、感嘆するとともにさらに納得した。

バルコニーに続く奥のガラス戸の側にはグランドピアノが見える。部屋中の壁は本のぎっしり詰まった書棚や、サイドボードの類いで埋めつくされ、床には豪華なペルシア絨毯が敷きつめられている。アンティーク物の丸テーブルやソファなどがその上にてんでに配置され、飾り立てるようにごちゃごちゃとした小物があちらこちらに散らばっていた。

上級生たちは思い思いの場所に席を占めて、お茶を飲みながら優雅なひと時を過ごすのだろう。

室内の装飾はバラバラで雑多な印象だが、家具や小物のどれひとつ取ってみても相当な年代物らしかった。それが、この学校の特権階級だけに許された唯一の贅沢に違いない。

その雑多で野放図なエネルギーが、サロンのイメージをさらに強烈なものにしているのだ。

「よくきてくれた」
戸口に現れた葵と詠生を見て、小野はとても喜んでくれた。さっそく居並ぶ上級生の前に二人を連れてゆくと、彼らに紹介した。
「今年のニューボーイ、壇ノ浦葵君と沢崎詠生君だ。詠生の面構えがなかなか渋いが、それは彼が葵よりひとつ歳を食っているせいだ」
「そのせいだけじゃないね」
アールデコ調のソファに深く腰かけている男が笑いながら言った。
「彼は、自治会長の羽仁一朗だ。三年。映研の部長でもある」
小野の紹介に応えて羽仁は立ち上がると、二人に右手を差し出した。
「羽仁一朗。又の名を『鵜飼いの鵜』。鵜飼いは、ご存じそちらにおわす小野寮長だ」
「鵜飼いとはひどいな」
小野が苦笑いを浮かべて抗議した。
「何を言うか。俺は自治会のことなんか、何もやっとらん。お前が『あーせい、こーせい』言う通りに動いているだけだ。立派な鵜飼いだ。俺は可哀相な、鵜。なぁ、葵？」
葵と握手をしている手を、羽仁は離さない。
「おや？　手が葵と離れるのを拒否してるぞ。こんな美形に出逢ったことがないもんだから、こ

いつノボセたな。さあ、これは困った」
うそぶく羽仁に、葵は助けを求めるような視線を詠生に向けた。詠生は、『やれやれ…』といった顔をして首を振った。
「この手！　この手がいけない！」
横合いから、バイオリンの弓で羽仁の手首をぴしりと叩いた者がいた。
「いてッ！」
「スケベな手は、こうして退治するのが一番だ。俺は、二年の小笠原章（おがさわらあきら）。寮会の幹事だが、実際は何もやってない。小野さんがいれば、仕事はないからな」
羽仁が引いたあとの葵の手をさっさと握って、小笠原が言った。
「通称、『キッド』だ。来年は寮長をやらせようと思ってるんだが……」
小野が困ったように言った。
「器じゃねーよ！」
小笠原《キッド》は可愛い顔をつんと澄ましたまま、まったく取り合わなかった。
そういう風に順繰りに紹介が続いていって、全員の紹介が終わる頃、羽仁の淹れてくれたお茶とスコーンで午後のティータイムとなった。
勧められるまま、一番いい椅子に詠生と二人座らせられたものの、お茶をゆっくり飲むどころ

じゃなかった。
興味深げに向けられるたくさんの視線――こんな無遠慮な視線にさらされることなど、生まれついてのこの容姿のせいで慣れたものだが、この時ばかりは葵はたじたじとなった。
なんといっても、今、葵と詠生の目の前にずらりと居並んでいるのは、学内外を実質的に取り仕切っているという、特別な男たちなのだ。
その中でも特に、葵への興味を隠そうともせず熱っぽい視線を送ってきたのは、自治会長の羽仁だった。
「君みたいなすてきな子に出逢ったのは、本当に初めてだよ。逢えて、光栄だ…」
葵の側に引き寄せた椅子から身を乗り出すようにして、彼はうっとりと囁いた。
「はあ…ありがとうございます」
上級生たちがおもしろそうに見ている。たくさんの目に見つめられて、葵はなんだか動物園のパンダにでもなった気分で落ち着かない。チラッと隣の詠生を見上げると、彼は、
(大丈夫……)
とでも言うようなやさしい瞳で、微かに頷いてくれた。
「ところで、葵は映画は好きかな?」
羽仁がにこにこしながら話題を映画に向けてきた。

「まぁ…好きです」
そういえば、羽仁は自治会長であるとともに、映研の部長でもあるとの話だった。
「どんな映画が？」
「カンフー映画とか…」
「なるほど。ブルース・リー、彼はよかった。素晴らしいカンフー・アクターだった」
「ジャッキー・チェンが好きなんですけど…」
「なるほど、なるほど。ホラー映画とかは、興味ある？」
「『13日の金曜日』は観ました。でも、基本的に怖いのは苦手です」
「ああ…あれはね、別に観なくてもいいよ。ヤンキー娘がキャーキャーわめいているだけのドタバタ映画に、美学もクソもない。ゾンビなんてどうかな？　多少腐ったりしてるけど、あれでも結構可愛いところあるんだよ」
「可愛い?!」
《キッド》がチャチャを入れて、室内は一斉に忍び笑いに包まれた。
「…ゾンビだなんて、そんなの…もっと怖いです」
「おいおい、彼を怖がらせてどうするんだ。お前の目論見はもう読めてんだ。ここはズバッと本題に入ったらどうだ」

困り切った葵を見兼ねたのか、小野が助け船を出してくれた。
「まあ、そうだな」
羽仁がうんうん頷いて、ニヤッと葵を見た。
思わず我が身に振りかかってきそうな嫌〜なものを覚えた葵が、腰を浮かしかけたところで、羽仁の手に押し留められた。
「葵…、君と出逢えたことを、天に感謝したいこの僕の気持ちは本物だ。そこで――」
と、ここで羽仁は一段と声を低めた。
「――ものは相談だが、君、映画に出演する気はないか？　実は前々からやりたかった企画があってね。その主役のイメージに、なんと君がぴったりなんだ。引き受けてくれさえすれば、君のその美しさを徹底的にフィーチャーした、素晴らしい作品に仕上げると約束するよ」
「映画?!」
「まさかホラー映画…」
詠生がぼそっと呟いて、サロン中が爆笑に包まれた。どうやら詠生の言葉が大あたりということらしい。
「俺…ゾンビなんかできませんッ！」
何が何やらわからなかったが、とりあえず大きな声で断言した。

確かに演技経験はない。それ以前に、死んだ死体だってまともに演じられる自信はないのだ。生きた死体など、絶対にやれるわけがない。

「じょ…冗談だろ?!　君をゾンビになどする訳ないじゃないか！」

うろたえたのは羽仁だった。笑いころげる外野を一喝して黙らせると、逃げ腰の葵の両手を強引に握りしめ、ここを先途とばかりにかき口説いた。

「君は苛酷な運命に翻弄されるヒロイン…いやヒーロー…なんだから、ゾンビになどなる訳ないじゃないか。君は幾多の苦難をかいくぐって、最後には幸せを摑むという役どころだ。死んだりゾンビになったり、そんな心配などまったく無用なんだよ。ホラー映画だけどね」

「せっかくですけど、できません。ホラーだろうが、なんだろうが」

「そんな…、考えてもみないで、薄情なその一言で片付けることはないだろう」

羽仁が恨めしげに葵の手を揺すった。

「すみません。でも、できないものはできません。ごめんなさい…」

握られた手をもぎ離すと、葵はぺこっと頭を下げた。

「謝るこたーない。どーせ、引き受けたところで、とんでもないことやらされるから、断わっておいて正解だぜ」

「キーッド！　頼むから、余計なことは言わんでくれ！」

羽仁がもうお手上げだ…という風に天を仰いだ。キッドは横目に羽仁を見ながら続けた。
「その企画は、羽仁さんの趣味丸出しのちょいとアブナイ作品だからね。ヒロインを…あ、ヒーローか。ヒーローを苛めて苛めて苛めまくるってゆー、そういうスタンスでいこうって企画なんでしょ。羽仁さん、あんたの、愛するが故に苛めまくりたいっていう気持ち、わからない気もしないけど、いきなりそれじゃいくらなんでも葵が可哀相だ」
同感だ、の声がいくつもあがった。
「こーゆーことは、時間かけてじっくりいかなきゃ。オンナ落とすんでも、速攻でいこうなんて思わないだろーが」
さすが、キッドのセリフらしい…と外野の声がかかったが、キッドは聞こえないフリをした。
「じゃあ、葵の映画出演の件は、今回はお流れということで…、異議は？」
小野がさっさと票決を取りにかかり、
「ありません…って、俺が言やーすべてが丸くおさまるんでしょ。はいはい、ありませんです」
羽仁が渋々同意したところで、この件に関してのケリはついた。
それからしばらく世間話をしてから、葵と詠生は席を立った。
「これに懲りずに、またきてくれたらうれしいよ」
小野がそう言って、羽仁も「ぜひ、そうしてくれ」と笑った。

「今度、羽仁さんに去年作った映画見せてもらえよ。俺が、ゾンビになってるヤツ。俺の演技も、捨てたもんじゃないから、なかなか見ごたえあるぜ」
キッドのセリフに、誰かが冷やかしの声をかけた。
「キッドの死体演技がヘタだったヤツだろ。怪談話が、途中からゾンビものになったって曰くつきの…」
「何、目玉焼きを作るのに失敗したら、急いでかき回してスクランブルにしろと言うじゃないか。映画だって同じさ。役者が大根で、おとなしい死体になってくれないなら、とっとゾンビにしてしまうに限る。こんなのはホラー映画の常識さ」
羽仁が大威張りで言った。
「ホラー映画は、何をやっても許される。そこが魅力なんだ」
一瞬顔を見合わせて、それから大笑いしてしまった葵と詠生だった。

＊＊＊

楽しい日々は過ぎてゆく。
葵と詠生はすぐにサロンの常連となり、小野や羽仁、キッドたちとの交遊を深めることとなっ

た。当然のなりゆきで寮の幹事を頼まれることにもなったが、そんな役目も働くことに慣れている葵にしてみれば、大した仕事でもない。

小野は紳士で、特に葵にはやさしくしてくれた。羽仁はその型破りのキャラクターで葵たちを笑わせてばかりだった。相変わらず葵の映画出演の希望は捨てていず、ことあるごとに葵を口説きにかかった。

キッドは二年ながら、三年生にも一目おかれる存在だった。可愛い顔をしてる割に口は悪いが、その底にあるやさしいものを葵は見逃さなかった。詳しく知った訳ではないが、例の他人の畑を耕していた生徒というのも、どうもこのキッドらしかった。

葵と詠生のいる一年クラスは最初こそ各人がバラバラだったが、季節が初夏になろうとする頃にはなんとかクラスとしてのまとまりを形成し始めていた。海外経験者がさすがに多くて、主義主張の違うものたちが寄せ集まって一時はどうなることかと思った（都合が悪くなると、英語しか喋らなくなる奴、フランス語しか喋らなくなる奴、スワヒリ語しか喋らなくなる奴…そんな奴が多発した）が、そんな心配は杞憂だったようだ。

海外経験はおろか、ろくに転校経験もない葵はそういった意味では異端だったが、そこはそれ、持ち前の順応性でクラスにも溶け込んでいた。それには、詠生の存在が非常に大きいのだと、今の葵は認めずにはいられない。

常に何かに守られていると思った自分だが、詠生という人間がいてこそ自分は守られているのだ。この頃の葵には、そう思い至るだけの余裕ができた。

日々の時間の大半を一緒に過ごす詠生がいてこそ、こうやってなんの悩みも苦しみもなく、楽しい毎日を送っていられる。そのことに、早いうちに気がつくことができてよかったとも思うのだ。

「詠生……」

放課後のけだるい時間を、ベッドに身体を預けてうとうとまどろんでいた葵は、机について勉強している詠生に声をかけた。

「何――？」

詠生が振り返って葵を見てくれる。なぜだか、おざなりに返事をするということが詠生にはない。いつでも葵が望めば、瞳を、手を、差し出してくれるのだ。

「俺……詠生と逢えてよかったよ…。一緒の部屋になれて、よかった……」

「僕も、葵と逢えてよかったよ」

「ほんと？」

「ほんとだよ」

クラスでは無口な詠生が、こうして葵のたわいない問いかけにも応えてくれる。そんなささい

なことが、今の葵には無性にうれしい。
「詠生のやりたいことって……見つかった？」
「…見つかったと思う」
「そう。…いつかそれ、教えてくれるよな？」
「約束するよ」
「うーん…。メシの時間になったら起こして…。ひとりで行ったりしたら、怒るぞー…」
「はいはい」
「なんか、嘘みたいだ…。バイトしなくていいし…メシ作らなくてもいいし……。詠生もいてくれる……」
「――――」
何も言わないけど、詠生が微笑んでいるのはわかる。
葵は気持ちよさそうに目をつぶった。
「あとは……」
あとは、父さんが元気でいてくれさえすれば……。

＊＊＊

「葵〜っ、事務室に電話が入ってるってさ」
隣室の真木が、葵を呼びにきた。
「誰？　父さん？」
「誰かなんて知らないよ。取り次ぎ頼まれただけだもん」
真木に礼を言って、事務室に駆け込んでいった。
「もしもしッ！　お待たせしました――」
『……葵か？』
「父さん！」
久しぶりに聞く父の声だった。葵は一気に涙ぐみそうになった。
『どうだ、葵。元気でやってるか？　友達たくさんできたか？』
「うん、元気だよ。友達もたくさんできた。父さんは？　父さんは元気でやってる？」
『ああ。元気だ』
「よかった…。電話したんだよ。なのにいつもいなくて――」
『遠いところに行くと言っただろう。家にかけてもどうせいないから、もうかけるな。連絡はこっちから入れる』

「必ずだよ、必ずまた連絡して…」
『わかった。――ところで、帝のところの子とは友達になったか？』
葵は一瞬自分の耳を疑った。
「――どういう意味？　帝の子って…。帝なんて名前の生徒、ここにはいないよ」
『帝の身内の子供だ。お前と一緒に入学したはずだ』
「それ、誰のことだよ…！　そんなの、――嘘だ！」
潔が受話器を外して、誰かと話しているのが微かに聞こえた。
『――《沢崎》という名前の生徒だそうだ』
「嘘だ――――ッ！」
葵は電話を叩き切ると、再び部屋に向かって駆け出した。
「詠生ッ！」
ぶち破る勢いでドアを開けた。詠生は窓辺に腰かけて、外を見ていたらしいのだが、葵のその勢いにさすがにびっくりしていた。
「どうした、葵。血相変えて」
葵の耳には、詠生の言葉など耳に入っていなかった。カーッと頭に血が昇るのと同時に、心の奥を冷たく凍らせるものがあって、何も考えられなかった。



ただ、確かめなければという思いだけが、葵を衝き動かしていた。
「――いいかッ！　これから俺が訊くことに、正直に答えろ！　一つ！　お前は帝壮一朗の身内の者なのか?!」
「……」
「二つ！　お前は、どうしてここにきた！　俺を監視するためにきたのか?!」
「――」
「三つ！　俺と同室になったのも、すべてこのためなのか?!」
「――」
「詠生――答えろッ！」
詠生は葵を見つめていた目を逸らすと、しばらく考え込んでいた。それから、ひとつ大きく息を吐いて、もう一度顔を上げた。
睨みつける葵の瞳から目を逸らさずに、口を開いた。
「そうだ。僕は帝壮一朗の孫になる。君がここにきたから、僕もきた。一緒の部屋になりたかったから、一緒の部屋になった。つまりはそういうことだ」
殴られる――と覚悟していた詠生だったが、葵は殴りかかってはこなかった。
立ちつくしたまま涙をぼろぼろこぼすと、黙って部屋を出ていってしまった。

葵の出ていったとたん部屋の中が急に薄寒く感じられた。詠生は思わず身を震わせた。

「え？　葵、どうしたんだ？」

「泣いてるのか――？」

「おーい、誰か詠生呼んでこい。葵が泣いてる……」

廊下を三歩歩くごとに、すれ違う野郎からやいやい声をかけられても、葵は振り向かなかった。どこへ行こうというあてもなかった。ただ、詠生のいる部屋だけは戻りたくなかった。友達ヅラして、今の今まで葵を欺き、帝の手先として葵の行動を逐一スパイしていただろう男のところになど――。

そんな男を信じて、心を許し、あまつさえその存在に感謝していた自分。そんな馬鹿な自分がたまらなく悔しかった。

本当は――。

許せないと思っているのは、詠生のことなんかじゃない。

葵はわかっていたのだ。許せないのは、自分自身なのだと――。

この身が借金の担保である身分を忘れて、居心地のいい世界にどっぷり浸かっていた。都合の

いい夢を見て、いい思いをしていた。そんな自分が、本当は一番許せなかった。
事実――、こうやって他の金持ちの坊っちゃん連中と机を並べていられるのも、結局は帝の財力のおかげだった。
帝の金の力で、食べさせてもらい、着させてもらい、勉強させてもらっている。
担保、人質と言い方はいろいろあれど、要は『飼われている』のだ。
葵を金で飼っている帝が、葵をどう扱おうとそんなのは帝の勝手だった。
スパイを放とうが、行動を監視させようが、少なくない金を出資している帝から見れば、それはごく当然のことに違いない。
だけど――。
(だけど、もう誰も信じられない――!)
「…お――っと、葵じゃないか。どうした、お目々が真っ赤…」
廊下を駆け出しかけていた葵を捕まえたのは、羽仁だった。
「……っ……」
しゃくり上げる葵に気がついて、周りの目から庇うように抱きしめた。羽仁の胸元を濡らすのにもかまわず、葵は彼の胸に顔を押しつけた。
「葵…葵……どうしたんだ…?」

おろおろと羽仁が訊いた。

ノックが三回。

詠生はハッと顔を上げたが、それが葵でないことはわかっていた。葵のノックは二回。

返事もしないのに、ドアが開いた。

「おい…葵が泣いてるぜ」

声で、ノックの主がキッドだとわかった。彼は部屋に入ると、後ろ手にドアを閉めた。

詠生は窓辺に座ったまま、じっと窓の外を睨みつけていた。顔を向ける気にもならなかった。

しばらく黙っていてから、キッドが口を開いた。

「…なんだ、てめーが泣かせたのかよ」

「……」

「…放っておいていいのか。今、羽仁さんが面倒見てる。知らねーぞ、例の映画に出させられることになっても」

「……」

「誰かに取られることになっても——知らないぜ」

「……」

キッドは反応のない詠生に見切りをつけたようだ。ドアを開けて、さっさと部屋を出ていこうとした。その背に、詠生は呟いた。

「――誰にもやらない」

「…ま、頑張んな」

それだけ言うとキッドは出ていった。

5

「俺の映画の基本コンセプトは、『恐怖』と『笑い』。常に、この二点にしぼられている。それというのも、ホラー映画なんて、怖くって、楽しくなくちゃ、観ておもしろくないと思うからなんだ」

サロンでは、羽仁の講釈が続いていた。

「俺がゾンビを好きなのもそこなんだ。ある日突然死体が生き返るという非現実性。さらに無差別に人間を襲いまくるという不条理。あっけなく殺されてしまう一般市民。右を向いても左を向いても死体てんこ盛りの、その非日常性――。死体が生き返るなんてそんなことある訳ない。そうわかっているからこそ、彼らの存在はコメディなんだね。たかが作りごとだが、そんな馬鹿馬鹿しさが許される『ホラー』という虚構が俺は好きだ。フィクションの魅力を最大限に表現できる映画という手法に、俺がのめり込むのはそんな理由からなんだ」

お茶のおかわりを淹れに立った小野が、カップを手に戻ってきた。

「――確かに。羽仁の言う通り、恐怖なんてものはギャグとは紙一重の感覚かもしれない。怖がらせようという製作側の意図は、えてして馬鹿馬鹿しい趣向に陥りがちだ。それが『笑い』を生

む」

講釈を邪魔されて、羽仁がうんざりしたように小野を見た。小野はそんな視線などまったく意に介さない。ソファに腰を落ち着けると、優雅なしぐさでお茶を飲んだ。

そんな自治会長と寮長の二人を目で示しながら、キッドが隣の葵にこっそりと囁いた。

「羽仁さんの頭にはホラーの毒が回ってる。本人、あれで充分幸せだからいいけど、葵は伝染しないよう気をつけるんだな。何しろ、あの人のパワーはすごいから。引きずり込まれないよう、せいぜい注意するこった」

「大丈夫だよ」

「それにしても、あの人の映画によく出る気になったな？」

「うん…まあね。別にどうでもいいんだ」

呟く葵の視線は、引きつけられるように右に動いた。小野の隣でゆったりと足を組み、やはり葵を見つめている詠生へと、なぜだか視線が吸い寄せられてしまう。お互いの視線がバチッと合ったところで、葵は弾かれたように顔を背けた。

詠生の正体を知ってから、葵は彼を徹底的に避けるようになった。

寮の部屋でももちろん喋らない。二人っきりの部屋にいるのが気づまりで、自然とサロンに入り浸るようにもなった。追いかけてくるように詠生もサロンへやってくるが、以前の二人とは明

らかに違う距離があった。
サロンのメンバーも、もちろんそんな二人の変化に気づいていた。
羽仁の胸で泣いてしまった。大騒ぎになって、みんなにどうしたのかと訊かれたが、本当のことなど言える訳がない。借金の担保などという身の上のことすら、秘密にしていたのだから。
弱気になったところを羽仁の口車に乗せられた。映画出演をOKさせられたが、そんなことなどもうどうでもいいことだった。
少しでも詠生と離れられれば、それだけで救いになる。詠生と二人っきりになることが、今の葵には苦しくてならないのだ。
「撮影は夏休みを利用しようと思ってんだが…葵はもちろん帰省するんだろう?」
羽仁に尋ねられ、葵はハッと顔を上げた。曖昧に肩をすくめてみせる。
「できれば早めに寮に戻って、リハーサルに備えてもらえたら助かるんだが…」
控えめに羽仁が要請した。やっと勝ち取った映画のヒーロー（?）に対して、羽仁はかなり気を使ってくれる。
「休暇中、ずっと寮に居残るなんてことはできるんですか?」
夏休みとはいえ、潔から連絡がなければ帰省などできそうもない。
「申請さえしとけば、それはできるさ」

「そうですか。たぶん…居残ることになると思うので、俺はかまいません」
「そうか。よかった…。いい映画を作ろうな」
それには苦笑いで返すと、葵は立ち上がった。
「え…っと、明日の予習があるので、そろそろ部屋に戻ります」
詠生も当然のように立ち上がる。それが、葵の勘に触った。
「ついてくんな！　馬鹿野郎ッ！」
振り向きざま怒鳴った。葵の剣幕に、室内の人間が全員飛び上がった。
叩きつけるようにドアを閉めて出ていった。なおも葵を追いかけようとする詠生の肩を、小野がとっさに摑んで言った。
「散歩につき合ってくれ」

寮を出て、校舎へ向かう途中の庭園をぶらぶらと歩いた。
辺りはすっかり暗くなっているが、きちんと手入れをほどこされた庭園は夜間ライトアップされている。生徒は午後八時を過ぎると寮外へ出ることは原則規制されている。だから、なんのためのライトアップかわからないところが、この学校らしかった。



「省エネが叫ばれる時代に、贅沢なことだ」
小野が広々とした庭園を見渡しながら言った。
時刻はもうじき八時になる。外にはもちろん人影はなかった。
「君たちの間に何があったか知らないが――」
芝生の上をゆっくり歩きながら、小野が水を向けてきた。
詠生は黙ったまま、彼の隣を歩いた。
「――葵をあまり刺激しない方がいいのかもしれない。しばらく放っておけば、少しは頭も冷めるだろう。彼に、落ち着くまでの時間をあげたらどうだ?」
「――」
「彼は逃げやしない。そうだろう?」
「離れたくないんですよ。葵に…何かあったら、心配だから…」
突然、急き立てられるように詠生は呟いた。
「いったい何があると言うんだ?」
訝しげに小野が訊いた。
「何か…葵に困ったこととか……」
「参ったね。――彼を甘やかすのもたいがいにしたまえ。葵はしっかりした子だ。放ったらかし

にしたところで、自分のことは自分でケリはつけられる」
「そんなこと、わかってます」
しばらく歩くと、小さな人工池にたどり着いた。小野がベンチへ手招きして、二人はそこへ腰を下ろした。どこからか虫の音が聞こえてきた。
「詠生、君はもしかして以前から葵のことを知っていたのか？」
「なぜ、そう思うんです？」
小野の質問に、詠生は同じく質問で切り返した。はぐらかそうともせず、小野は応えてくれた。
「さあ、なぜだろう。ただ、入学式の前夜、君たちに初めて会った時、僕は君たち二人がとても似ているのにびっくりした。実のところ、兄弟じゃないかと思ったくらいだ」
詠生は作り笑いを口の端に浮かべた。
「そんなこと言うの、小野さんが初めてですよ」
「二度は言わないさ。本当を言えば、そう思ったのは一瞬で、次の瞬間にはそんな疑いは捨てていた。君の葵を見る瞳は、弟を見る瞳じゃない」
「弟なんかじゃないんだから、そんなの当然でしょう」
詠生は冷たく言い放った。
「僕が見込んだ以上のポーカーフェイスだね。詠生、君は――」

「どういう意味ですか」
「僕の質問に答えてないな」
詠生は立ち上がると、人工池の水際に歩いていった。しばらく暗い水面を見つめていてから、ゆっくりと小野を振り返った。
「葵がいたから、僕はここにきたんです」
小野が目を見張った。
「そのために、せっかく一年間通っていた高校を捨てたのか？」
「いけませんか。葵と一緒にいられる――そのためなら、僕はなんでもできますよ」
沈黙に、梢のざわめきが重なった。
「――風が出てきたようだ。戻ろうか」
小野がベンチから立ち上がった。
「…先に戻ってて下さい。僕が戻ると、葵が出ていってしまうから…もう少しここで時間つぶします」
「わかった」
遠ざかってゆく小野の背中を見送ってしまってから、詠生はもう一度池の水面に目を戻した。

＊＊＊

期末試験も終わって、学校はまもなく夏期休暇に入ることとなった。

大方の予想通り、今学期一年クラスにおいての最高評価を取ったのは沢崎詠生だった。葵も二番につけたが、その結果は大して驚くにあたらない。一貫して日本国内の学校教育を受けていた詠生や葵に、海外生活が長かった者たちが太刀打ちしようとしても、まず難しかっただろう。

終業式を前に、詠生と葵は寮会の幹事としての仕事が待っていた。

寮生たちの帰省のスケジュールを確認して、舎監の先生に報告をすませないといけないのだ。

「幹事っていったって、結局は雑用係なんだよな」

つべこべ言う同級生たちからスケジュールを聞き出し、全部屋を一巡し終わった頃には消灯時間が迫っていた。自室に戻って、クリップボードを机の上に放り投げた葵は、やっと解放された気分でベッドの中へとダイブした。

「葵の帰省の予定は？」

机に投げ出されたままのクリップボードから紙を剝がしながら、詠生が訊いた。

「ないよ。そんなもん、あるもんか」

あれから潔からの連絡は一度もなかった。どこにいるのかも皆目わからない。

寮を出たら、とたんに帝の金銭的庇護を失ってしまうだろう葵には、潔もいないアパートにたったひとり帰省するなどという無謀はできそうもない。

人質には違いないが、その人質のおかげでこうやって優雅な生活を送っていられるのだ。そのことを絶対に忘れてはいけない。

学校を逃げ出したと変に誤解されて、潔に危険が及ぶことになったりしても大変だ。

「詠生は？　もちろん帰るんだろ？」

詠生はペンを持ったまま首を横に振った。

「いや、帰らないつもりだ」

「そう」

ペンを走らせる音が続き、

「一〇六は二人とも残ると書いたから…。舎監のところに出してくる」

詠生はそう言って再び部屋を出ていった。

ひとりっきりになった部屋の中で、葵はごろんと身体の向きを変えた。

詠生との仲は、正体不明の危なっかしさを残しながらも、表面上は快方へと向かっていた。

彼のことを以前のように頭っから信頼している訳ではない。それでも、肩肘を張らない程度に、自然体で彼と相対することができるようになった。

もともと葵は、誰かを憎んだり、恨んだりするといった負の感情には慣れていない。父子二人で生きてきてそれなりの苦労は積んだが、その都度周囲の温かさに守られてきた。そんな葵にとって、人を憎み続けるということは、ひとりで万里の長城を築き上げることよりもさらなるパワーを必要とするのだ。

詠生は帝のスパイかもしれない。だが、彼が今まで葵に対して見せてくれた心を、このまま見失ってしまいたくないとも思う。

やっぱり心の底では、まだ詠生を信じているのだろうか。

帝の件に関して何ひとつ弁解しようとしない詠生だけに、なんだかもどかしくって葵は文句のひとつも言ってやりたくなる。

本当は——文句など言う虚勢など残ってやしないのだが。

「……父さん……会いたいなぁ…」

潔に会えば、何もかもがうまくいくかもしれない。

そんな都合のいいことを、ついつい考えてしまう。ろくでもない父親だが、例えどんな男であったとしても、葵にとっては頼りになるスーパーマンなのだ。

父の面影を追うように、葵はそっと目を閉じた。

終業式が終わると、学校は夏期休暇に入る。それは、すなわち葵にとって退屈な毎日の始まりでもあった。

生徒のほぼ全員が、この休暇には寮を出る。帰省する者、旅行に出る者と予定はそれぞれだが、葵と詠生のように、どこにも行かずにずっと寮にこもりきりなどという生徒はまずいない。

寮には、葵と詠生と、あと何人かの生徒が残った。残った生徒らも、しばらくしたら寮を出発するはずだった。本当に、どこにも行く予定のないのは、葵と詠生だけなのだ。

キッドは終業式のあと、飛び立つように出かけていった。彼は、両親のいるドイツには行かずに、友人が待っているというイタリアで、念願のポンペイ遺跡を見学するのだという。ローマで待ち合わせる『友人』というのは、実は女性じゃないかと葵は睨んでいる。

羽仁は、八月中旬には帰ってくると言い置いて、アメリカはハリウッドへと旅立った。なんでも向こうのスタジオにSFXを手がける友人がいるということだった。きっと今度の映画に役立ちそうなスペッシャルに気色の悪いものを作ってくることだろう。

小野は海外には出かけずに、休暇前半を両親のいる神戸で親孝行に費やし、後半をバイクを駆って北海道旅行を楽しむのだと笑っていた。ダンディな小野とバイクの意外な取り合わせに、葵は正直言ってびっくりしたものだ。

夏のきらきらとした日射しの中で、葵はのんびりとした毎日を送っていた。
もともと田舎で、人里から離れた学校だった。生徒たちの歓声にあふれていた日々がまるで嘘だったかのような静寂の中で、セミの鳴き声や野鳥のさえずりだけが響いてくる。
それにじっと耳を傾けていると、ふいに――、本当に突然に、この世にひとり取り残されてしまったような錯覚に陥る時がある。
恐ろしくなって急いで振り返ると、必ず視線の先には詠生がいてくれた。
ほっとした葵の心を読んだかのように詠生が微笑み、そのやさしい表情に葵は泣きたくなる。
詠生が帝の手先だとしても。
そうでなければ、今ここにこうしているのは葵ひとりだったのだ。

「宿題終わったら、写させて」
休暇になったというのに、詠生は相変わらず律儀に勉強を続けている。身についてしまった習慣だからと詠生は言うが、葵は退屈でしょうがない。なんとなく詠生のところにきて、そんなしょーもないことを言ってみたりする。
「なんだ。葵、ヒマを持て余してるんだろう。自分でやった方が、退屈しないですむぞ」

「いーじゃんか、見せて」
「こら！　ダメだって――！」
詠生のノートを横から奪い取って、後ろ手に隠した。詠生が取り返そうとする。ノートを奪い返そうと伸ばされた手を、ノートではたき落とした。
葵が声をあげて笑うと、詠生もつられたように笑みを見せる。
「葵――」
詠生がタックルを仕かけてきた。
避けようとした葵だったが、腕をとっさに摑まれてバランスを崩した。足元をすくわれたような形で、詠生もろとも床にどーんとひっくり返ってしまった。
「いてて…」
幸い頭は打たなかった。詠生が庇ってくれたのだ。
「重い…詠生――」
シャツ越しに、詠生の体温が伝わってくる。熱い身体がぴったりと葵の身体に折り重なっていた。詠生が顔を上げて、じっと葵の顔を見つめた。
「葵…、唇が切れてる……」
「え…ほんと？」

口に手をやろうとして、詠生の手に押し止められた。詠生は葵を見つめたまま顔を近づけると、
「消毒してやる…」
と囁いた。
身体をこわ張らせている葵の顎を摑んだ。伸ばした舌先で、詠生がそっと唇を舐めた。
何かを言おうとした葵だったが、声は出なかった。されるまま詠生の舌がゆっくりと自分を癒すのを感じていた。
いつの間にか、詠生の両手が、葵の両腕を摑んでいた。癒しの最後に、明らかな口づけを唇に落として、彼はようやく摑んでいた腕を離した。
離さないでほしい——。
一心に念じた葵の想いは届かなかった。
詠生は黙って立ち上がると、ノートを拾い上げて部屋を出ていった。

＊＊＊

とるものもとりあえず、手近な身の回り品だけバッグに詰め込んで、葵は寮を飛び出した。
くる時乗ってきたタクシーの運転手から名刺をもらっていたので、電話をかけて車を一台回し

てもらった。再び、あのうるさいＪＲのディーゼル列車に飛び乗った。
詠生には置き手紙を残した。

『詠生へ――
すぐに戻ってくる。だから、寮を出たことは帝には黙っていてほしい。
どうしても父に会いたいんだ。どうしても。絶対に戻ってくると約束する。
一生のお願いだから、帝には絶対知らせないで――。
葵』

短い文面だったが、それが葵に書ける精一杯だった。
出かける間際に、葵は鏡に映った自分の顔を見た。
唇はおろか、顔のどこにも切れたような痕跡はなかった。あんまり予想通りだったので、なんだか笑ってしまいたいくらいだった。
その時思った。
潔に会わなければいけない。会って、本当のことを訊かなくては。
なぜ、そう思いついたのかはわからない。常に胸の奥にあった不安が急に大きくなった。
急き立てられるように、ふいにそう思った。

他人を疑ったり、恨んだり——そんなことは金輪際うんざりだ。
だから、自分と潔、帝や詠生に関わるすべてを、自分は知るべきなのだ。
でなければ、この先どういう形で詠生と向き合っていけばいいのか——。
詠生が何も語らないならば。
あとは自分で行動するしかない。
列車の車窓から、見慣れた風景が飛ぶように行き過ぎていく。あんな田舎だと思っていた山と田園風景だけの光景だった。今はとても身近で、美しいものだと思える。
窓の外に視線を向けたまま、葵の右手はずっとポケットの中に入れたままだった。潔からもらった金色の懐中時計。それをずっと握りしめていた。

6

アパートに着いた葵は、部屋の表札プレートに『壇ノ浦』ではなく『鈴木』という名前がかかっているのを見て驚いた。

鍵はあるが、部屋に入っていいものやらためらっていると、階下のおばさんが部屋から出てきた。

「おばさん！」

階段を駆け下りると、葵の顔を見たおばさんがびっくり顔で声をあげた。

「葵ちゃんじゃない！　ちょっと見ないうちに…立派になって！」

「ちょっと見ないも何も、うちに『鈴木』なんて表札かかってんですよ！」

「あらぁ、だって今、鈴木さん夫婦が住んでるのよ」

「だって、うちが――！」

うちが借りているはずの部屋だッ――！　わめこうとして、おばさんのセリフに耳を疑った。

「だって、お父さん部屋引き払っちゃったでしょ。葵ちゃんが学校出ても、もうここには戻ってこないんだって言って……」

「そんな――！　いつ……！」
「葵ちゃんが学校に出発して、その日のうちによ。あたしたちもびっくりしたわよ。葵ちゃん、夏休みには帰ってくるって話だったのに、急にもう二度と戻ってこないとかって言うんだもの」
「――父さん、父さんが、どこにいるか知らない?!」
「実は、その日以来一度も見てないのよ。遠くへ行くとは言ってたけど……」
葵はあまりのショックに茫然となった。父がまさかアパートまで引き払っていたとは…。
「葵ちゃん、いったいどういうことなの？　あんた、お父さんの居所知らない訳じゃないわよね?!」
おばさんには応えずに、葵はアパートの前から駆け出していた。

商店街の公衆電話から中田に電話をかけた。夏休みなので、バイトか旅行か、家にいないということも考えられたからだ。
中田はいた。公園で落ち会うことにして、葵は再び駆け出した。
公園では、中田が待っていた。途中から走るのをやめて、歩いてきた葵を見てすっ頓狂な声を上げた。

「葵か――？　一瞬、どこのお坊っちゃんかと思ったぜ」
「おふざけはやめてくれよ」
葵はそれどころではない。
「誰がおふざけなんか言うかよ。それ、今の学校の制服か？　なかなかいいぜ。はぁ～、どこから見ても、あのフーテン親父の息子には見えない。どっかいいとこの御曹子みたいだ」
中田は妙に感心している。
「そのフーテン親父のことなんだけど、どこに行ったか知らないか？」
「葵の親父のことを、お前が知ってること以上に俺が知る訳ないだろ」
「アパート引き払ってんだよ、あのクソ親父」
中田がけらけらと笑った。
「どんなに外見が立派になっても、言うことは以前の葵のまんまだな。親父がアパート引き払ったなんてことまでは、さすがの俺も知らなかったぜ」
葵はシルク・リネンの上着を脱いだ。日暮れどきを迎えて、だいぶ涼しくなってきたとはいえやけに蒸し暑かった。
学校のある町はとんでもない田舎だったが、田園を渡ってくる風はとても気持ちよかった。ここには風すらない。よどんだ街中がこんなに暑いものだなんて、葵は初めて知った。

「連絡取りたいんだけど…どこにいるのかわからないんだ。いったい…どうなっちゃってんだよ。話が…全然違うじゃないか――！」

葵は髪をかきむしると、ベンチにどかっと腰を下ろした。何がどうなっているのかわからなければ、これから先どうしたらよいのかもわからない。

「とりあえず、今夜は俺んちにこいよ。二人で、親父をどうやって捜すか考えてみよう。何、心配しなくても、葵が遊びにきたと言えばうちのお袋も大喜びさ。な、そうしろ？」

そうしたくなくても、アパートはもうない。

思考不能に陥った頭をしばらく抱え込んでいた葵も、中田に促されてやっと立ち上がった。立ち上がるパワーがあったことが、自分でも不思議なくらいだった。

＊＊＊

中田家での作戦会議の結果、潔のバイト先であったナイトクラブを訪ねてみるということで二人の意見は一致した。

そのクラブのオーナーと潔が親しくしていたのを、葵は覚えていたのだ。

翌日、中田と二人で出向いていって、オーナーに会った。あらかじめ電話で約束を取りつけて

いたので、彼――北野氏は快く葵たちを開店準備中の店内に招き入れてくれた。
口髭のナイスミドル北野氏は、最近偶然にも潔に会うことがあったのだと語ってくれた。
「つい二か月前だよ。うん、駅前で見かけたんで、こっちから声をかけたんだ。アパート引き払ったなんて知らなかったから、どこで何をしているかなんてことまでは訊かなかった。話の弾みにね、息子さんのことを訊いたんだけど、急に不機嫌になってしまってね。正直あれっと思った。彼、息子の話になると、とたんに親バカになるから。いつも君のことを自慢してたよ。利発で、母親に似たとてもやさしい子だって。肌身離さず写真まで持っててね、うちの女の子たちにもよくからかわれていたもんさ」
どんな形にしろ、潔が死んだ葵の母親のことを口にすることがあったなんて、葵は初めて知った。
「写真って――どんな写真なんですか？」
葵は勢い込んで尋ねた。
「君たち親子三人が写っているとてもいい写真だよ。二十歳くらいの彼と、亡くなった奥さん、まだ赤ん坊の君。旅行先で撮ったんだろうね、どこか…外国の建物の前で、幸せそうに笑っている家族の写真だ」
外国と聞いて葵はびっくりした。外国など一度も行った覚えはない。潔からだって、そんなこ

と一度たりと聞いた覚えはなかった。もちろん、パスポートだって持っていない。
「写真の母は…どんな人でした？」
「そうだなぁ…。写真で見る限りは、なんだか十五、六の少女にしか見えなかった。綺麗な人だった。清楚で、愛らしくて、そうだな…おとぎ話に出てくるお姫様みたいな感じかな。でも、君を抱いて笑っていたところは、さすがにお母さんの貫禄だった。君、やっぱり似てるよ」
北野氏は口髭を細い指先であたりながら言った。
「昔っから父似だとよく言われてたんですが……」
「あの写真を見たことがなければ、そう思っただろうな。でも、君は絶対に母親似だよ。だから、彼もあんなに君を溺愛してたんじゃないかな。奥さんのことは、今でも忘れてないと思うよ」
葵がいくら訊いても母のことは口にしたがらなかった。父は、死んだ母のことを忘れたいのだと――。葵はずっとそう思い込んでいた。それは葵の思い違いだったのだろうか。
北野氏はやはり潔の行き先を聞いてはいなかった。
「彼、時間がなかったみたいで、十五分くらいかな。コーヒーを飲んで別れた。別れ際、息子さんによろしくと言ったら、『俺は息子なんかいらないんだ』と言い返すもんだからびっくりしたよ。家族の写真を大事に持っている彼にしては、らしくないセリフだったね」
「――――」

顔色を変えた葵に気づいて、北野氏はあわてた。失言をとりつくろうように言い継いだ。
「いや、そんな彼らしくないことを言うなんて、きっと何かトラブルを抱えて気が立っていたんだろう。気にすることはないよ。彼の気性がきついのは、君だって知ってることだろう」
薄暗い店を出た。外の明るい日射しの中で、中田と二人黙って立ちつくした。
「――どうする…？」
中田がようやく口を開いた。
午後になってより暑さが増したようだ。外気のむっとする熱気に、葵は吹き出してきた汗をハンカチで押さえた。
「寮に帰るよ」
「帰る？　親父はどうすんだ。あいつの行方をこのまま放っておいていいのか？　うまい具合に夏休みだし、捜すなら今しかないぜ。葵がそのつもりなら、俺んちにどーんと腰を据えてもらってかまわない。これからの対策を二人で考えようぜ。俺にできることならなんでも協力する」
「ありがとう。でも帰らなくちゃ。友達と約束したんだ。きっと心配してる。父さんのことは…もういいんだ……」
「葵……」
中田の家に寄って荷物を取ってから、葵は再び香陵学園に戻るためにバスに乗った。

遠ざかるバスに向かって、中田が手を振ってくれる。応えるように葵も手を振りながら、三月に初めて香陵学園に出発した時のことを思い出していた。

あの時、潔は何も言わずに葵を乗せたバスをただ見送っただけだった。

腕を組んだまま、じっとバスを見つめていた。

その潔の姿が脳裏から離れない。

もうどこにもいなくなってしまった父の姿だった。

＊＊＊

駅に降り立って、一番に感じたのはその空気の違いだった。

初めてきた時には気づかなかった。ここでの空気に慣れてしまってから、街中のむせるような空気に触れたせいだ。ほっと呼吸が楽になったような気がして、気持ちが和んだ。

寮を出たことは舎監にも内緒だった。またあのタクシー運転手の車に乗って、こっそりと寮に戻った。再び足を踏み入れた寮内は、出ていった時と同じく静まり返っていた。

一〇六のドアの前に立った。詠生は怒っているだろうか。ひとつ深呼吸をしてノックした。

返事の前にドアが開いた。詠生が立っていた。

「ただいま」
努めて明るく葵は言った。
詠生は応えず、葵の顔をただ無表情に見つめていた。
「約束守った。ちゃんとすぐ帰ってきただろ？」
詠生は黙っている。
「あー…もしかして、その顔は怒ってる？　うん、怒ってないって言っても、その顔は絶対怒ってる。約束守ったのに、怒るなんて反則だぞ」
詠生が入口を塞いでいた身体を右にずらした。葵は彼の横をすり抜けて室内に入ると、持っていたバッグをぽんと床の上に落とした。
「この暑さだろ。さすがに大車輪の往復はきつかった。でも、寮に帰ってこれてほっとした。俺の帰るところって、もうここしかないんだよな…」
「……」
「父さんに会えなかった。会いたかったけど……もう二度と会えないかもしれない。まったく…家に帰ろうなんて余計なこと考えたばかりに、どん底気分にまで落ち込む羽目になっちゃったよ」
詠生が、やっともの言いたげな瞳で葵を見た。



「父さんは俺がいらないんだってさ。いいよ。父さんの人生なんだから、子供に縛られる必要なんかない。好きに生きていってくれればいいんだ」
「……葵」
「俺も、父さんに頼らないでいけるようやっていく。もう人質とか担保とか、そんな価値なんかなくなった俺だけど、まあなんとかなるだろう。少なくとも、どん底まで落ち込んでいった俺にとって、これ以上悪いことだけは起こりようがないもんな」
「葵――」
「もう……何がきたって、どーんとこい、だ」
「葵…もういい」
いきなり詠生に抱きしめられた。
頭をしっかりと抱えられ、顔を彼の肩口に押しつけられた。そこで初めて、自分の頬がびっしより濡れていることに気づいた。
「…平気だよ……俺」
「もういいから……」
涙声になった葵に、かぶせるように詠生が言う。
「詠生…いてくれるから…」

呟くように言うと、詠生が何度も頷いた。

疲れていたせいか、翌朝遅くまで葵は眠っていた。

詠生が厨房から朝食をトレイに乗せて持ってきてくれて、そのいい匂いで葵は目覚めたのだ。

「どう？　ベッドで食べてもいいよ」

詠生がポットからお茶を注ぎながら言った。

「え…ええーっ、何か外国の映画みたい。寮母さんがよく部屋に飯を持ち込ませてくれたね」

「普段の素行がものを言うのさ。ちゃんと食器を傷つけずに返してくれれば、特別にＯＫだそうだ。それもこれも、僕たち二人っきりだから利かせてくれる融通ってやつだね」

ベッドを下りた葵は、パジャマの上に軽くシャツをもう一枚引っかけた。この土地の朝は、夏とはいえ肌寒いくらいなのだ。エアコンもあまりつけることはない。

開け放してある窓から外を見ると、澄みわたる空をバックにして、遠くの山々を彩る緑模様がくっきりと見えた。

「わぁ…、見て詠生。山が近いよ」

小さな声を上げた葵は、振り返って詠生にも教えてあげた。

「朝の空気って一日のうちで一番綺麗だから、こんなによく晴れた雲ひとつない日は何もかもがよく見えるんだな。近くに見えるっていうのも、そんな目の錯覚のひとつなんだね」
詠生がポットを置いて葵の側に立った。一緒になって、窓から外を見上げてみる。
「綺麗だね…」
「うん、綺麗だ」
詠生が頷いた。
「――空とか、山とか…、自然がこんなに綺麗なものだなんて知らなかった。この学校ってさ、すごく贅沢じゃない。住むところから始まって、着るもの、食べるもの…。だけど、一番の贅沢はこの環境だったんだね。俺、家に戻った時、埃っぽいこもった空気に窒息しそうだった。ここに帰ってきて、本当に『帰ってきた』って気持ちになった。父さんの借金に感謝しなくちゃね」
窓辺を離れると、葵はもう一度ベッドに入った。
「今朝はここで食べる。これが休暇中唯一の贅沢なんだから」
詠生が微笑み、慇懃にお辞儀をしてみせた。
「では、私が給仕を致しましょう。オレンジジュースはいかが？」

＊＊＊

「詠生、約束して」
真正面に詠生を見ながら、葵が言った。
二人っきりのサロン。
窓から射し込む光が、この雑多な室内に不思議なコントラストを作り出している。葵と詠生は光と影の織り成すさなかに立っていた。
「何を…？」
「それ聞いてどうする？　選ぶ権利なんか、最初っから詠生にはないんだ。詠生はあの日俺に嘘をついてキスをした。あのこと忘れてやる代わりに、詠生は俺と約束しなくちゃいけないんだ」
詠生の表情は変わらなかった。
「別に忘れてもらわなくていい。憶えててもらった方が、僕はうれしいんだから」
葵がひるんだのは一瞬だった。
「いいから約束して。理由なんて、じゃあもうどうでもいいよ。したくないなら、それでもいい。俺の望みを足蹴にしたければそうすれば」
「――――」
「約束してよ」

苛立たしげに、葵は詰め寄った。
「君と――何かを約束をする…。そのことが、葵の望みなんだな？」
「そうだ。俺の今一番の望みだよ」
葵の瞳に宿る断固としたものに、詠生は折れた。
「――わかった。だが、葵の望みを叶えてやる代わりに、僕の望みを叶えてくれ。それくらい呑んでくれるだろう。簡単なことだから」
葵は微かに緊張を解いた。
「いいよ。何をすればいい？」
「僕にキスをしてくれればそれでいい。簡単だろう？」
詠生がにやっと笑った。
さっきの葵の脅しに対して、詠生が復讐を仕かけてきたのが葵にはわかった。
あんな切り札で詠生を脅しつけられると思った自分が馬鹿だった。詠生はやさしいが、甘い男じゃない。
「わかった、わかった。さっきは悪かったよ。謝る…」
葵は両手を上げて、降参のジェスチャーをした。
「キスするのか、しないのか？」

葵はしばらく詠生を睨みつけてから、肩を落とした。つくづく詠生は甘くない。
「少し屈んで……、目をつぶって…」
葵からキスするには、背の高い詠生はなかなか不便だ。
詠生は屈む代わりに、手近のソファに腰を下ろした。肘かけに両肘を載せて、優雅に足を組んだ。葵の顔をもう一度悪戯っぽく見やると、目をつぶった。
一発ぶっ飛ばしてやりたかったが、モトはといえば自分の蒔いたタネ。いい加減開き直って、詠生の脇に片膝をついた。
身体を寄せていって、唇を詠生の唇に触れ合わせる。されているはずの詠生が柔らかく唇を吸ってきて、葵はびくっと身体を震わせた。
戸惑いはそれだけだった。葵は詠生に習ったように、唇を吸い返した。
「……」
唇を完全に離してから、葵は頬がほてるのを感じた。どうしていいかわからず顔を伏せた。
「それで、なんの約束をすればいい？」
こちらは顔色も変えずに詠生が言った。
大事なことを思い出して、葵はがばっと顔を上げた。
「父さんが逃げたことを、帝には報告しないって約束して！」

「――」

「父さんのためだけじゃない。俺のためにも――。俺…俺…この学校にいたいんだ。三年経って学校を出たら、『ああ野麦峠』でもなんでもするよ。父さんの借金も、この学校にかかった金も、みーんな働いて返す。奴隷になったっていい。学校出たら、それこそどうなったっていいんだ。だけど…せめてこの学校にいられるうちだけは、見逃してくれ。いたいんだよ、ここに！」

詠生が詰めていた息を吐いた。やさしく葵を見やってから、一言尋ねた。

「なぜ…？」

「なぜ、だろう…。わからない。この恵まれた生活を捨てたくないのか…、それともせっかく友だちになったみんなと別れたくないのか…。わかるのは、まだここにいたいということだけ。自分がどんなあつかましいこと言ってるかわかってるよ。帝には、何も得になることはないんだ。ぺてんにかけたと言われたって、かまわない。だけど――」

「約束する」

詠生が言った。

「本当に――?!」

「本当だ。それが葵の望みなんだろう？　何があっても、それだけは守り通す」

「ありがとう！」

葵は頼りになる友だちに飛びついた。詠生が肩に腕を回して、葵を抱き寄せた。
「ほっぺたかおでこがいいとこだろうと思ってたのに、なんと唇に濃厚なヤツをくれた。そんな葵のためなら、なんでもできる」
詠生を睨みつけたが、それも一瞬だった。さっきのキスを思い出しそうになって、葵はあわてて立ち上がった。

2　オールドボーイ

1

「本当に羽仁さんは映画を作る気なのかな？」
ミートローフをナイフで不器用に切り分けながら、葵が言った。
「それは、葵の方が詳しいんじゃないのか。なんたって主役なんだから」
詠生がそれをパンに挟み込む。ミートローフサンドイッチの一丁上がりだ。
「何するのか、全然聞いてないよ。台本だって、もらってないし」
中庭の芝生の上に丸テーブルと椅子を持ち出して、今夜は屋外ディナーと洒落込んでいた。
夜空は雲が少なく、月が蒼い光を投げかけている。庭園を華麗に演出するライトアップがまたちょうどいい具合で、例によって発案者は詠生だった。
「じゃあ台本がいらない映画なんだろう。無声映画だったら、台本は必要ないだろうし」
詠生がサンドイッチを一口かじって、葵に頷いてみせた。

「無声映画でホラーって、難しそう…」
「悲鳴や音楽で恐怖心を煽るって訳にもいかないしな」
ナイフを置いた葵は、まずジンジャーエールで喉を潤しサンドイッチに手を伸ばした。
映画出演をOKしてしまったことを、葵はすでに後悔していた。やはりできそうもない。そのつもりになって準備を進めている羽仁には大変申し訳ないが、葵としてはこの役はできたら降ろさせてもらいたいくらいだった。
「俺…実は映画――」
言いかけて、葵はパンを手にしたまま言葉を切った。耳を澄ませるようにしてから、詠生に目で合図をする。
「――なんの音？」
音が近くなった。バイクの爆音らしい。音はある一定距離まで近づいて、ふいに止んだ。
「誰かきたみたいだ…」
「誰？　誰が、こんな時間に――」
葵は弾かれたように立ち上がった。潔かもしれない――！
「葵――！」
詠生が呼び止めたが、葵は振り返らなかった。

校門は閉まっている。音は裏門からだった。裏門を目指して葵は暗い小径をひた走った。コツコツ…と足音が響いてきた。石畳の小径を踏みしめて、背の高い人影がこちらにやってくる。

「父さん！　父さんだよね――?!」

影をつかまえようとするかのように両手を差し伸べた。必死に叫んだ。

「葵――?」

月明かりの下に姿を現したのは、意外にもライダーズスーツ姿の小野寮長だった。

「小野…さん……?」

「お父さんを?　お父さんを待っていたのか――?」

小野が尋ねた。

「それより――小野さんこそ…どうしたんです?　まだ戻ってくる時期じゃ…ないでしょう?」

がっくりと石畳に両膝をついた。荒い息の下から、葵はやっと言った。

「葵と詠生がどうしてるかと思ってね。ちょっと様子を見にきたんだよ」

小野がやさしく手を取って、助け起こしてくれた。

「もうっ…勘弁してくださいよ……」

恨めしげに言った。ズボンの膝を払っていると、詠生が追いついてきた。

「小野さん…？」
「やあ、詠生」
月光の下、三人がトライアングルを作るような形で立ちつくした。
しらじらとした沈黙が流れて、小野は少し困ったように眉を上げてみせた。
「なんだか——なんだか、えらく驚かせてしまったようだね」

ちょっと様子を見に戻ったと言っていた小野だったが、二、三日経っても出発しようという気配はなかった。
「北海道旅行はどうなったんですか？」
詠生が訊くと、小野は手を優雅に振った。
「ああ、北海道の帰りだったんだよ」
「ご両親のいる神戸には戻らなくていいんですか？」
「いいさ。親孝行はすませたよ。たった一日だけだったが…」
今日のサロンでのお茶は葵が淹れた。詠生に教えてもらって、おいしい紅茶を淹れられるようになったのだ。

「小野さん、俺の淹れたお茶はいかがでしょうか？」
「とてもおいしいよ。羽仁の淹れてくれたお茶が一番との誉れだが、葵のお茶もそれに負けないくらいだ」
「それは褒め過ぎですよ、小野さん」
詠生が言って、三人は笑った。
先日小野が加わって、今までとは違った日々が葵と詠生の前に訪れていた。
だが、詠生にしてみればあまり楽しくない。すべてのものから取り残されたような、この二人だけの至上の世界が、いつまでも続いてくれればいいと思っていたのだ。
葵は——と見てみると、彼は小野の思わぬ飛び入りがうれしくてならないらしい。
昨日はバイクの後ろに乗せてもらっていた。初めてバイクに触ったという葵は、好奇心を露にして小野の説明に耳を傾けていた。
生き生きと瞳を輝かせ、小野と一緒にいた葵——。
そんな彼を見ていると、自分の出番なんかもうなくなってしまったんじゃないか…。
くだらない思いにとらわれる自分を、詠生は嫌悪する。
「…ああ、葵。昨日言ってた羽仁の映画の件ね」
「はい」

書棚から本を取り出しかけていた詠生は思わず振り返った。
小野が心持ち身を乗り出すようにして、隣のソファの葵に話しかけていた。
「やはり君の口からきちんと断りを入れるべきだと思う。だが、彼もそうわからず屋じゃない。君に引き受けさせたいきさつもいきさつだ。正直に自分の気持ちを話してみるんだな。多少なら僕も口添えしてやれるだろう」
「本当ですか」
「映研の映画製作っていってもね、大仰に考える必要はないんだ。今までだって、資金難やスタッフ不足で、企画はいくつもポシャってきた。ひとりでプロデューサーとディレクター役をこなしてきた羽仁にしたら、トラブルにはもうさんざん慣れっこという訳だ」
「でも…やっぱり羽仁さん、怒りますよね」
「がっかりするとは思うが…怒ったりはしないね。君を弟のように可愛がっている羽仁だよ。君が気の進まないということを、無理にさせる訳がないじゃないか」
二人の会話を目の前にして、詠生はあっけにとられていた。葵がそんなことを小野に相談していたなんてまったく知らなかった。
葵がほっとしたように小野の顔を見た。その口許に浮かぶ微笑みを見てとって、詠生の胸の奥がちくりと痛んだ。

微笑みに応えるように、小野が手を伸ばした。葵の前髪をやさしくかき上げる。
そんな二人を目のあたりにして、さらに痛みが増した。
部屋に帰って、さっそくその件を問い正した。
「昨日…小野さんにやっぱり映画はやれそうもないって相談したんだよ…」
葵はそう答えた。
「僕にはそんなこと言わなかった！　どうして、僕じゃなくて小野さんなんだ?!」
「何怒ってんだよ」
「怒ってる訳じゃない。ただ…ただ、わからないだけだ」
「だって、今ここには小野さんと詠生しかいないんだよ？　羽仁さんが帰ってくる前に、俺としてもどうすればいいのか決めなくちゃいけなかった。小野さんは羽仁さんの親友だし、羽仁さんのことをよく理解してる人だ。これ以上波風立たないようにするには、小野さんの協力が必要だった。どうして相談しちゃいけないんだ?!」
詠生の苛立ちに触発されたのだろうか。急に葵が激高し始めた。
「葵の言う通りだ。だが、小野さんの協力を仰ぐにしろ、僕に一番に相談してほしかった」
「一番に相談――？　よっくゆーぜ！」
葵が吐き捨てるように言った。

「葵…僕は……」
「詠生は勝手だっ！　何ひとつ自分のことは話してくれようともしないで、それで俺には一番に相談してほしいだって――!?　俺のことはすべて詠生に報告しなきゃいけないのか?!　帝の借金に縛られてる身だから、そうしなくちゃいけないって言うのかよ！」
「葵――！」
カッとした。思わず右手を振り上げて、詠生は自分の軽挙に気づいた。
振り上げた手を、葵が呆然と見上げていた。
「殴れよ……」
「……ごめん…」
詠生は手を下ろした。
「――殴ればいいんだ。殴られたって、誰にも言わないよ。そういう権利が、帝には…詠生にはあるんだから…。ふふっ…パンチ一発で借金一万円相殺してもらえたら、もっと助かる……」
自嘲気味に笑った葵の目が濡れていた。
「――」
「詠生のこと…全然わからない。わかりたいと思った時もあるけど、詠生は何ひとつ見せてくれない。もう期待するのやめることにした。訳わかんない詠生なんか、もう知らないよ。知りたく

もない。小野さんはね、大人だしやさしいし、一緒にいると落ち着ける。とても穏やかな気持ちになれる…」

「もうわかった」

詠生は背を向けた。その背に葵が本を投げつけた。

「わかってない！　馬鹿！　死んじまえ！」

「死んでほしいなら、死んでやるよ。葵のためなら、なんでもできるって言っただろう」

前を向いたまま詠生は冷たく言った。

「……やだ…」

葵が背中にかじりついてきた。両手を胸にまわして、二度と逃さぬかのように抱きしめた。

「嘘だ…嘘だよ…。お願いだから……」

2

八月中旬、ハリウッドから帰ってきた羽仁は、葵の断り文句を聞いても大して驚かなかった。それどころか、撮影がお釈迦になったというのに妙に晴れ晴れとした顔で、

「そりゃー残念だ。今回こそ、名作中の名作を撮るつもりだったんだが」

とあっさり了解してくれた。

肩透かしを食った気分で、葵はなんだか物足りない。

小野がこっそり教えてくれたところによると、どうやら羽仁はハリウッドで資金をすべて使い果たしてしまったらしい。フィルム代も賄えなくなって頭を抱えていたところへ、葵の出演辞退は渡りに船だったという訳だ。

その代わりに、特別に見せてくれたお土産というものが、ハリウッドの特殊メイクアップ技術を駆使した羽仁一朗製作『脳天かち割られた男の頭部像』で、葵は充分気持ち悪くさせていただいた。

「本当は、こんな気持ち悪いものばかりじゃなくて、一作くらい『これが青春の記念です！』と言えるような記念碑的なものを作りたかったんだ」

脳天かち割られ男の顔を膝に置いて、羽仁がぽつんと言った。
「それが、今度の映画のつもりだったんですね」
「うん。君といういい素材を見つけて、コレだ！　と思った。ホラー映画なんて、作り物もここに極まれりという、一種のキワモノ的世界だろ。そのお化け屋敷感覚が好きでここまでやってきた。これからもその道をひた走るだろうけど、ひとつだけでいいんだ。作り物じゃないものを撮ってみたかった」
そう言って、膝の上のものをちょっとだけ持ち上げてみせた。
「作り物じゃないもの…？」
葵は首を傾げた。
「うん」
「でも、映画って、結局は作り物じゃないですか？」
「君だよ。今の君を撮りたかった」
「――――？」
羽仁は淡々と言葉を続けた。
「一年先でも、二年先でもない。今の君の姿をフィルムに残しておきたかった。作り物じゃない、本物の君の姿だ。今の君の年頃が持っている美しさ、あやうさを、永遠に残しておきたいと思っ



たんだ…。映画野郎の切ない願望だな」
「わかんないですね…」
不思議そうに呟いた葵に、羽仁がふふっと笑う。
「葵はわかんなくていい」
「なんで？」
「ガキだから」

＊＊＊

長くて短い夏休みが終わって、寮内には以前の活気が戻ってきた。
サロンでは、キッドと葵がさっきから話し込んでいる。
「ポンペイ遺跡って、どんなところだったの？」
「一言で言えば、火山灰に埋もれていた古代ローマの都市の遺跡さ。ナポリ湾に面していてね、火山の噴火によって、わずか三日ほどで完全に町が埋まってしまった。犠牲者の人型まであるんだ。ヘタなホラー映画より、真に迫ったものがあるぜ」
「じゃあ、埋まった町を発掘してるんだ」

「石造りの建物のすごいところだな。一九〇〇年経った今も、立派な町並みを残しているんだ。ヘレニズム文化の影響を強く感じたね。ギリシア風ローマ文化ってやつだな」
キッドが見てきたポンペイ遺跡の話を、葵はずっと楽しみにしていたのだ。
葵に話をせがまれて、キッドもまんざらじゃなさそうだ。小僧（キッド）、と呼ばれる彼だが、葵相手だととたんにお兄さんになってしまう。二人はなかなか気の合ういいコンビだった。
「詠生、ちょっと手伝ってくれないか」
ソファで本を読んでいた詠生に、小野が声をかけた。
「自治会室まで、これを頼む」
小野が示したのは、いつからサロンにあったのかわからない大量の古書だった。二人で分担して、それを自治会室まで抱えていった。
「これ、図書室に返すべきじゃないんですか」
「あとで持っていこう。いや、ここなら誰もいないからな」
詠生が顔を上げた。
「僕に話があったんですね」
「話というものでもないが…。最近、葵は落ち着いてきたようだな」
「葵のことですか。そう…新学期が始まって、皆が戻ってきたせいか気が紛れてるみたいだ」

「まるで他人事だな。そんなに警戒しなくてもいいよ」
詠生は息を吐いた。
「今度は何を聞きたいんです？」
「できることなら、前の質問をもう一度繰り返したいね。君は常に何かを気に病んでいる。葵は感情がひどく不安定だ。君たちはお互いを必要とし合っているかと思えば、妙にぎすぎすした関係に陥ったりする。君たちの危なっかしい綱渡りを見せられるのは、もううんざりだよ。いったいその原因は何だ？　最初の頃のような君たちには、もう戻れないのか？」
「……」
「詠生…僕は無粋なことを尋ねている訳じゃないんだ。個人の恋愛感情については、口を挟むつもりなどさらさらない。だけど、君と葵はそれだけじゃない。もっと根に深いものがある。何が君たちをそんなに悩ませているのか、僕には聞かせてもらう価値もないだろうか」
薄暗い自治会室で、詠生は沈黙を守ったまま立ちつくしていた。
廊下を歩く足音が近づいてきて、それがまた遠ざかっていった。じっと耳を澄ますようにしていた詠生は、机の向こうに立つ小野に視線を移した。小野がまっすぐに見返した。この全寮生の尊敬を集める寮長は、そういえばトラブル解決の名人だった。
何度もためらったあと、詠生は口を開いた。

「僕の祖父は帝壮一朗という実業家です。この祖父に、葵の父親が借金をし、その担保に葵の身柄を取って、この学校に入れました。僕は、葵の監視役としてここにやってきて…それを知った葵はひどいショックを受けた…。例の、泣いた時ですよ。夏休みには彼の父親の行方もわからなくなってしまいました。父親にも逃げられ、借金だけが残された。彼はここを出たら自分の力で全額返すつもりですよ。ひどい話だ。これでどうかならなきゃ、それこそどうかしてる。葵がおかしくなってしまった理由も、これで少しはわかってもらえるでしょう?」

「そんな馬鹿げた話が……」

小野が呻いた。

「まったく馬鹿げた話です。でも、これが葵の信じている現実なんです」

「嘘だろう…?」

小野の問いに、詠生は微かに笑って頷いた。

「もちろん大嘘ですよ。嘘だと何度葵の前でわめきたかったか…」

「わめいてやればよかったじゃないか」

「――なんて? 嘘だとわめいたあと、何を語ればいいんですか? 葵は、帝壮一朗の孫なんですよ。僕とは血の繋がったいとこになります。帝の二人の娘、姉の方が僕の母で、妹が葵の母親なんです。もちろん、借金の担保なんてとんでもない。帝は、孫への愛情――祖父には、僕と葵

しか孫はいないんです——ただそれだけのために、彼をこの学校に入れたんです。

だが、祖父と葵の父親とは昔っから犬猿の仲でしてね。いや、そんな生易しいものじゃないな。二人は互いを憎悪し合っていた。十年以上もですよ。その父親が、突然帝に息子を託したいと言ってきて、そのまま姿を消しました。祖父はもう大喜びですよ。葵のためなら、なんだってしてやるつもりです。借金も、葵を縛りつけるものも存在しない。けれど、父親がいなくなったことだけは真実だ。僕はそれを告げることはできなかった。それが葵にとって一番の痛手だとわかっていたから…。葵が、まだ父親のことを信じていることは知ってるでしょう。バイクで小野さんが寮に帰ってきた時、葵は父親が迎えにきたと思ったんです。まだ、待ってるんですよ、自分を捨てた父親を！」

詠生の瞳から涙があふれていた。

「どうしたらいいのかわからない…！　僕は帝のスパイでも、監視役でもない…、ただ、葵と一緒にいたかった…。子供の頃から、葵のことばかり見てたんだ。最初は祖父に頼まれて、葵の様子を窺いに…。だけど、そのうち僕自身が葵に惹かれていった。子供の頃、近所の子供たちに混じって何度も葵と遊びましたよ。サッカーや草野球、ドッヂボール…。彼の父親も知ってます。葵がどんなに父親のことを愛しているのかも。だから、本当のことなど言えない…。嘘をつき通すことしかできない…！　彼が傷ついていることがわかっても…何もできないんだ」

「嘘をつき通すことだけが、本当に最良の選択だろうか。真実を見据えることなしに、ものごとを解決するなんてことは無理だ」

詠生はキッと小野を睨みつけた。

「何が葵にとっての真実か、教えてあげましょうか。彼の父親の存在、父親の言葉、父親につながるすべてのもの——。親子の絆って、そんなに強いものなんですかね。僕は自分の父親が昔っから大嫌いでしたよ。葵を見ていると、僕はわからなくなる……」

小野はしばらく考え込んでいたが、ようやく詠生を見た。

「君の祖父に連絡は取れるか？」

「祖父に聞いたって無駄です。何度も、葵の父親の行方は聞きました。本当に知らないんですよ。知りたくないっていうのもあるのかもしれませんが…」

詠生はそう言うと、自嘲の笑みを浮かべた。

「いや、それよりも——なぜ、この学校に葵を入学させることになったのか。それを聞いてくれないか？　理由があるなら、それを。どこでこの学校のことを知ったか…そんなことを」

「……わかりました」

「それと、葵の父親との確執の原因だね。なぜ、二人はそんなにも憎み合っていたのか…」

「帝の愛娘…、つまり葵の母親を死なせてしまったからですよ」

「それなら父親の一方的な負い目のはずだ。だが、彼も帝を憎んでいたんだろう。それには、やはりなんらかの原因があるはずだ」
「…聞いてみます」
部屋を出ようとした詠生に、小野は声をかけた。
「僕も少し調べてみたいことがあるんだ。僕の考え通りだったら、これは葵にも聞いてもらうべきことだと思う」
しばらく小野を見つめてから、詠生は曖昧に頭を振った。黙って部屋を出た。

3

一時はうるさいくらいにどこにでもついてきた詠生だったが、最近は気がつけば葵の周りから姿を消しているといった時間が多くなった。

どこに行ったのだろうと思わず目で捜して、葵は気がつく。以前なら、常に葵を捜しまわっていたのは詠生だった。保護者のような顔をして、どこに行くのも当然の顔をしてついてきた。

そんな彼を疎ましく思った時もあったが、今は違う。詠生の向ける視線ひとつにも、彼の想いを読み取れるようになった。彼の存在ひとつで、自分が包み込まれているようにも感じられる。

時折不安定な感情の波にとらわれそうになる自分の手を、しっかりと握りしめてくれるのは、詠生だけなのだ。

だから、以前とまるっきり逆転してしまったような立場に、葵は戸惑いを隠せない。

「詠生なら、さっき自治会室で小野さんと話をしてたぜ」

詠生を捜して寮内をうろうろとしていた葵に、廊下ですれ違ったキッドが教えてくれた。

「なんの話？」

「さあな。深刻そうな話だったから、遠慮した。来期の寮長、詠生にやらせてくれりゃあ、俺は

助かるんだがな」

十月に寮会の役員人事の交替が行われる。小野現寮長から、来期の寮長の要請を受けているキッドは『自分は寮を仕切る器ではない』と、渋い顔だ。

キッドと別れて、部屋に戻った葵はやることもないので明日の英語の予習をするべく教科書を開いた。一時間経っても、詠生は戻ってこない。心配になった葵は自治会室まで出向いてみた。部屋は真っ暗で、誰もいない。サロンにいるかもしれないと思って顔を出してみると、お茶を飲んでいた上級生が、

「さっきまでここで捜し物をしていたが、また二人で出ていった」

と教えてくれた。葵はがっくりして、再び部屋に戻った。

消灯は十一時だが、特に点呼もない寮内では実質的な消灯時間は生徒の自主に任されている。行方不明になった詠生をそのままに眠る気にもなれなかった。窓を大きく開け放ち、詠生がよくそうしているように、窓辺に腰かけて外を眺めた。

遠くの山々はこう暗くては見えない。木々の深い影から、月がおぼろに見える。

こうやって、たったひとりでいる時間は、寮にやってきて初めてのような気がする。潔との生活の時は、出かけていった父を待って、よくひとりっきりの夜を過ごしたものだが。

西崎高校に進んでいれば、多分それまでと同じ夜が続いていたに違いない。父の帰りを待って、

たったひとりで過ごす永い夜が……。
軽くノックがして、ドアが開いた。
振り返った葵に、ドアの隙間から詠生が言った。
「葵。悪いが、サロンまできてくれ。小野さんもいる」
それだけ言うと、ドアは再び閉まった。葵が何かを問う間もなかった。
時間が時間だったので、着替えなくてもよしと勝手に決めた。あわててパジャマの上にナイトガウンを引っかけて、サロンへの廊下を忍び足で歩いた。
サロンでは、小野と詠生が待っていた。二人とも制服姿で、お茶も淹れていない。
間違っても茶飲み話をするつもりではなさそうだ。いつもとは違った二人の様子に、葵は言葉を発することもできずに、手近の椅子を引き寄せると神妙に腰を下ろした。
詠生がまず口を開いた。
「このことを葵に言わないでおくことは、フェアでないという結論に達した。真実を告げることが、葵にとっても、僕にとっても、ひいては帝や君の父親にとっても最善策なのだと思う」
「なんのこと……？」
「すべて、小野さんに話した」
詠生がそう言うと、一瞬彼を睨みつけてから葵は床に目を落とした。

他の人間に知られてしまった――！

こんなみじめな身の上のことを、誰よりも知られたくなかったこの学校の人間に――。

葵の頭の中で、半鐘ががんがん鳴り響いているような感じがした。

「僕の知ってること。葵の知らないこと。すべてだ。そこから、小野さんが仮説を立ててくれ、その仮説に従っていろいろ調べた結果、さらに誰も知らなかった事実がわかった」

詠生は、潔の借金から始まる一連の帝壮一朗絡みのトラブルが、すべて帝と潔の仕組んだ大嘘であったのだと語った。葵が帝の孫であること。以前から葵を引き取りたがっていた帝に、ようやく潔がその気になったこと。葵に帝の世話を受けさせるための方便として、借金の担保云々という途方もない大嘘をついたのだと。

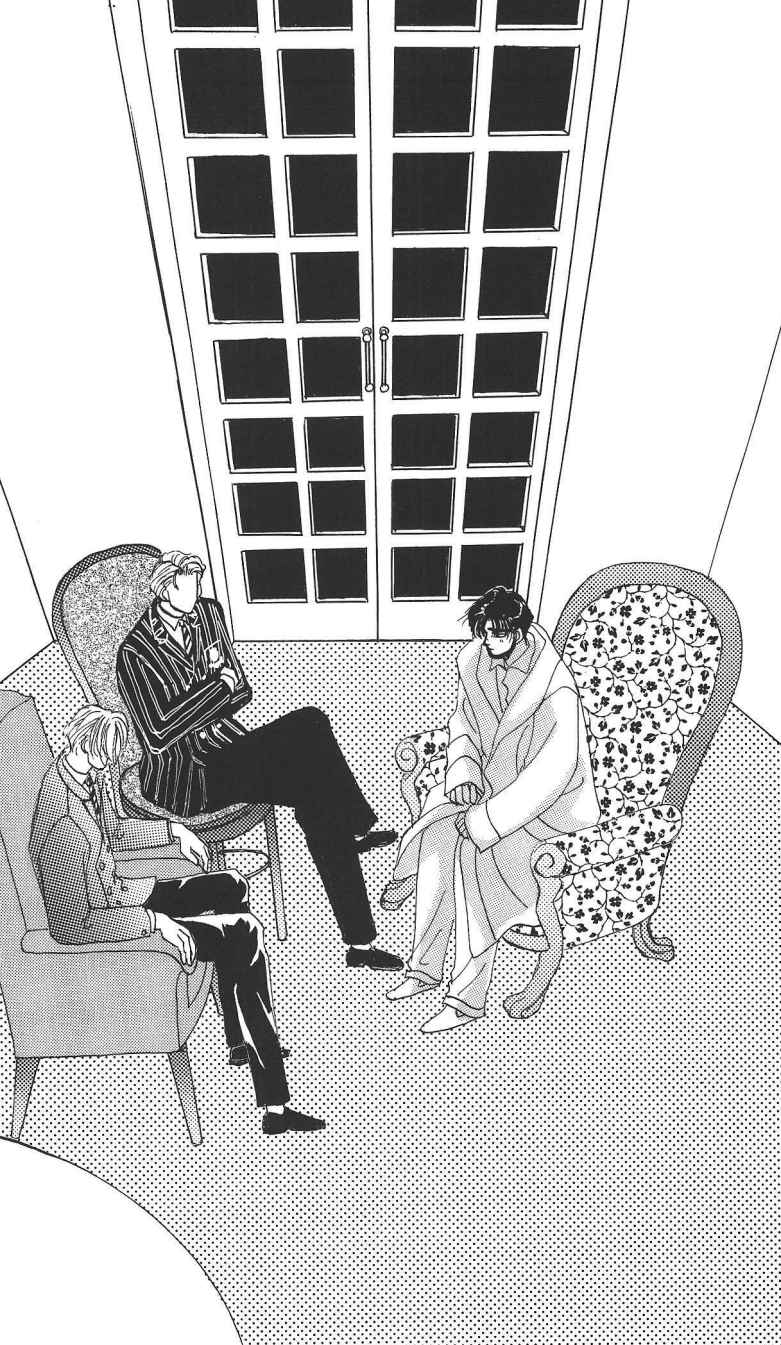
「嘘……？」

床の絨毯にじっと視線をあてていた葵は、ようやく顔を上げた。じっと見つめる詠生の瞳とぶつかった。あの、いつもの葵を守ってくれるような真摯な目だ。小野はさっきから一言も発しない。

頭の中の半鐘よりも、今は胸の動悸の方が激しくなっていた。

「帝の……孫だって…？」

「そう。葵はね、僕とは血のつながったいとこなんだ」



詠生の言わんとすることが意識の中に浸透するのを待った。
自分が詠生のいとこで、帝壮一朗の孫――？
「それならそれで…どうして父さんがいなくならなきゃならないんだよ？　嘘でも、ホラでもかまわない。何がどうなってたって、それでいいから…だから父さんのいる場所を教えて…！」
「葵…、お父さんがどこにいるかまではわからないんだよ」
「そんな――じゃあ、確かめようがないじゃないか」
「何を確かめるんだ？」
「本当のことを、だよ」
詠生は一冊の小冊子を差し出した。
「本当のことはここにある。見てごらん」
渡された小冊子は古いもので、表紙に『香陵学園高校第十二回卒業生名簿』とあった。
B6版十ページほどの冊子の中ほどのページに折り目が入れてあった。開いて、紙面に目を走らせた葵は、赤ペンでアンダーラインを引いてあるひとつの名前に釘付けになった。
その名前は『壇ノ浦潔』――。
間違いなく父の名前だった。
「これは、僕にもまるで予想外だった。祖父ももちろん知らなかった。このことがわかったのも、

小野さんの仮説のおかげだ」

ここでやっと小野が口を開いた。

「――詠生から話を聞いた時、少々違和感を感じたんだ。なぜ、君がここの学校にきたのか。これが大きな疑問だった。君や、詠生は知らないかもしれないが、この学校は大っぴらな営業方針を取ってる訳じゃない。入学案内パンフなんかも作っていないし、学校の広報活動も皆無といっていい。ごく一部の人間しか知らないような、まぁ特殊な学校でね。ご承知の通り、親が海外赴任中の子弟及び帰国子女を預かるのを使命としている。そんな学校に、葵を入学させたのは君の父親の意志だというじゃないか。詠生から確認してもらった。帝は、君の父親の意向に…脅しと言った方が近かったらしいが、従っただけだ。じゃあ、なぜ君の父親がこの学校を名指しできたのか。これは、簡単だ。僕や羽仁、キッドの父親に訊いても同じ答えが返ってくるだろう。もちろん、自分が三年間を過ごした学校に、ぜひ息子もやりたかったからだ。卒業生だったんだよ、この学校の！　君をこの学校に入学させること。それが、帝に君を託す際の第一の条件だったんだ」

「……」

「詠生から聞いた話の裏づけを取るために、古い書類を調べたよ。その卒業生名簿が見つかって、僕は自分の仮説が間違っていなかったことを確信した」

「人違いだ…。父さんはこの学校にこられるほど金持ちじゃない…」
葵は呟いた。身寄りのひとりもない潔に、こんな金持ち学校を卒業できる訳がない。
「葵は本当に何も知らないんだな…。君の父親は、京都のさる名家の長男だった。彼の父親…、君の祖父にあたる人だが、彼は外交官としてヨーロッパに長く滞在していた。壇ノ浦潔氏は外交官の長男としてノルウェーのオスロで生まれ、子供の頃は父親と一緒にヨーロッパの任地を巡っていたんだよ」
何かを言おうとした葵は、それでも何を言ってよいのかもわからなかった。立ち上がって、身振りでこの混乱を表そうとするのだが、うまくできない。
詠生が葵の手を取ると、やさしく握った。促すようにして座らせると、言った。
「お父さんの思いがわからない？　お父さんは、大嫌いな帝壮一朗に折れてまで、君をこの学校にやりたかった。これは、葵がお父さんから受け取るべき、立派なプレゼントなんだ。誰に恥じることもない。お父さんも、葵がこの学校生活を充分に楽しんでくれることを願っているはずだ。お父さんにとっても、楽しい想い出ばかりだったんだろうね。その後のお父さんには、つらいことばかりだったろうから…」
「教えてよ…。どうして父さんはお金に苦労するようになったんだ？　どうして身寄りがひとりもいなくなったんだ？　俺の母さんはどうなったんだよ？」

小野が頷いた。

「そのすべてに答えるのは無理だが、わかるところだけでも説明しよう。外交官だった君の祖父は、残念ながら、潔氏がここの三年生の時にロンドンで亡くなっている。爆弾テロに巻き込まれたということだ。君のお父さんに振りかかった不幸はそれだけではすまなかった。突然の当主の死により、お家騒動が巻き起こってしまったらしい。潔氏の生母は彼が六歳の時に亡くなっていた。後妻に入った女性には、潔氏の異母弟にあたる息子がいた。血のつながった息子を跡取りに据えたい後妻の思惑は、親族を互いに反目させる火種になった。潔氏がなかなか個性的な人物だったことも、保守的な親族の反感を買った。事態は総領息子を排除する方向へと動いた。我慢がならなかったんだろう、潔氏は壇ノ浦の一族と大ゲンカすると、自ら縁を切って家を飛び出した。いやはや…筋金入りの人物だ。

潔氏は学校に戻ると、その足ですぐに退学届を提出したらしい。実家と縁を切った以上、学費は期待できない。名前の通り、潔い人だね。その時の校長が、あと数か月で卒業のはずの潔氏に奨学金を出してくれた。彼はそのおかげで卒業できた」

「……」

「奨学金を校長に直訴したのは、この学校の生徒たちだった。寮会の幹事をしていた潔氏は、寮生の間でもバツグンに人気があったそうだから…」

葵はちょっと頬を染めた。潔がこの学校にいたら…、と考えてみただけで楽しそうだった。
「どうして、そんなことまでわかったんですか」
「いろいろとね…探したんだよ、当時のものを。この奨学金のくだりは、当時の自治会長が日誌に書いていた。これは…葵にも謝らなくてはいけないかもしれないが、その日誌を解読するのに、どうしても羽仁の力が必要でね。彼に、君のことを話した」
「いいです。もう今さら」
「その日誌は、すべてドイツ語で書いてあった。これは羽仁の領分だから、彼に翻訳を頼まざるを得なかった。おかげで、いろいろと当時のことがわかったよ」
「教えてください」
「それは明日にしよう。今夜はもう遅い。それに羽仁に直接話してもらった方がよさそうだ」
まだ話を聞きたかったが、小野の言う通りだった。ちらっと時計を見てから、葵は頷いた。
詠生と連れ立ってサロンをあとにしようとして、ふと小野を振り返った。
「あんまり突然で…なんて言っていいかわからないんですが……」
小野はひじかけ椅子にもたれたまま、両手の指を組んでいた。
「その…ありがとうございます」
小野はほんの少しだけ首を傾けた。

「それは、詠生にこそ向けられるべきものだ。君は独りじゃない。最初から、父親の、祖父の愛情に守られ、詠生の想いに守られていたのだから」
目の奥がつんと熱くなった。葵はようやく頷いた。
詠生がドアを開けた。葵を先に出してから、詠生がサロンから出ると後ろ手にドアを閉めた。
「詠生……」
深夜の廊下を歩きながら、そっと隣を歩く詠生を呼んだ。
「うん…？」
「ひとつ聞いてもいいかな…。その…借金も担保ももともと存在しないのなら、どうして詠生はこの学校に入り直すなんて面倒なマネをしたんだ？」
「……もう何度も言ったような気がするが…。葵のためなら、なんでもできるってことだ」
「会ったこともない俺なんかのために……」
詠生がくすっと笑った。
「何度も会ってる。実はガキの頃、一緒に遊んだことがあるんだ。五、六回かな…。葵と遊ぶのは楽しくて仕方がなかった……」
「ごめん…ごめんね……詠生……」
気づかぬうちに、熱いものが頬を伝っていた。

何気ない仕種で詠生の腕が肩にまわされ、ぐいと身体が引き寄せられるのを感じた。
「ひとりじゃないんだ。葵も……僕も……」
歩みは止めなかった。
頷く代わりに、葵は詠生の肩に押しつけるように顔を伏せた。

＊＊＊

潔がいないことには変わりのない朝がやってきた。
だが、この朝は、潔が葵のためにくれたものだった。父親を恨む気持ちはまったくなかった。彼がどこにいようが、葵を愛してくれているのに変わりはないのだから。
「だいたいあの借金のことは、なんだったわけ？」
葵の疑問に、キッドが一言で答えてくれた。
「親父はな、息子の性格をよ～く知ってたんだよ。普通に話して、通じる相手かそうじゃないか、読まれてたんだ、きっと」
羽仁が翻訳した日誌のドイツ文を整理する役目を仰せつかったのが、やはりドイツ滞在の経験があったキッドだった。

この件に関しては意識して隠し立てする必要はない。葵はそう腹をくくったのだ。今まで自分を偽ってきたという負い目があるせいか、その方が何倍も気が楽だった。
「どういう意味だよ？」
「お祖父ちゃんは金持ちだから、世話になんなさい。俺は、ジジイが大嫌いだから、嫌だけど。――そんなこと親父に言われて、葵は『はい、そーですか』ってジジイのところに行けるか？」
「まさか」
「じゃあ、ま、でっちあげの借金作って、ソレっぽく葵を差し出して、この学校に放り込む以外のやり方はなかっただろうな。親父、なかなかやるじゃんか」
「そういうもんかなぁ…」
サロンのドアが勢いよく開いて、羽仁が大股にやってきた。
「これ、本当に葵の親父さんか？」
手には小野が探し当てた日誌を持っていた。
「『これ』が、どれのことを指しているのかわかりませんけど…」
葵がそう言うと、羽仁は日誌を振り回した。
「小野が、こいつが葵の親父だって言うんだが…」
「小野さんがそう言うんなら、たぶんそうでしょう。やっぱりとんでもない人間でしたか？」

「うーん、そうだな……キッド、お茶を淹れてくれよ」
「文句言うから、やだ。うまいの飲みたかったら、ご自分でどうぞ」
羽仁がぶつぶつ言いながら、奥でお茶を淹れ始めた。
「ああ…、その日誌を読んでいておもしろいことがわかった。それを書いたのは、当時の自治会長で、岩沢という人物なんだが……な〜んか聞いたことある名前じゃないか？」
香り高い紅茶の匂いが漂ってきていた。今日のベースはアールグレイらしい。
羽仁の謎かけに、キッドが葵の顔を見ながら言った。
「岩沢って、そんなに多い名前じゃないな。確かに、聞いたことのある名前だ。葵、知ってるだろう？」
「え…まさか、英語の岩沢先生？」
キッドはにやりと笑った。首をひねって、羽仁に声をかけた。
「羽仁さん、ミスター岩沢で正解だろ？　日誌によると、当時の自治会長は寮会幹事とも、ツーカーの仲だった。――とすると、おあつらえ向きの生き証人がこの学校にいた訳だ」
羽仁がトレイに載せたポットとカップを持ってきた。
「その通り。なかなかおもしろいことになってきた。さあ、お茶が入った。これで一服やりながら、ビスケットでも食べよう。かつてのミスター岩沢と壇ノ浦潔氏も、きっとここでお茶を楽し

んだことだろうし」
お茶も淹れずに、羽仁の登場を待っていて正解だった。羽仁のお茶はそれこそ最高なのだ。
キッドが、
『だろ？』
と目配せしたので、葵は小さく笑みを返して同意を表した。

4

『どこの家でも多少のトラブルはあるものだが、彼の場合は彼の性格がさらに騒ぎを大きくしているようにも見えてしょうがない。とにかく、学校をやめると息まく彼を取り押さえて、校長先生に相談に行った。校長は力になってくれると約束してくれた。サロンに戻ると、彼は退学届をポケットに入れたまま、いつものメンバーとブリッジに興じていた。思わずぶん殴ってやりたくなった』

『必要最低限の小遣いは奨学金の中に入ってはいたが、彼がそれで満足できるわけがない。今まで以上にカードに熱中した。彼にしたら、生活がかかっているのだから真剣なのだろう。しかし周りはたまったものではない。彼の餌食にならぬよう、カードの誘いを断らなければならない。それでも好き好んで彼に金を絞り取られにくる輩もいる。これが学校に知れたら大ごとだが、忠告したところで彼は耳を貸さない。誰が止めたって、彼はカードをやめる気はないのだ』

『卒業したあとのことを聞いても、彼は結婚するとだけしか言わない。結婚はいいが、具体的な生活設計が果たして彼にあるのだろうか。彼女が深窓の令嬢なだけに、結婚の話を聞いても手放しでは喜べない』

羽仁がくれた、彼の訳したドイツ語による日誌の抜粋だった。
「日誌という性格上、学校内のさまざまな出来事が書かれてあって、とてもじゃないが全部は読み切れなかった。なんとかそれっぽいところを抜き出して、訳してみたんだが……」
訳文はキッドが最終チェックし、ワープロに打ってくれたのだという。きれいにレポート用紙に整理させたそれを渡しながら、羽仁はそう言った。
今それを詠生と一緒に読みながら、葵はかつてこの寮内にいた父の姿を文面から追ってみる。
「ブリッジはカードゲームだね。父さんはかなりカードに入れ込んでいたようだ」
葵がそう言うと、詠生は頷いた。
「いっぱしのギャンブラーだったようだな。これを書いたミスター岩沢は、自治会長という立場上かどうかは知らないが、潔氏のカード狂いにやや批判的だ。でも、羽仁さんが言うには、実はミスターもカード好きらしい。ポーカーやブリッジを潔氏とやり始めた頃のことも、日誌に書いてあったそうだ。ただ、ミスターは潔氏のように金を賭けてやることには反対だったようだ。学校側に知れてしまうことを恐れていたんだな。確かに、そんなことがバレれば、奨学金は一発で取り消されるだろう」
「やっぱり…昔っからとんでもない奴だったんだ……」

くらくらする頭を抱えて葵は呟いた。父親の無軌道ぶりをこうやって白日の元に曝してみると、彼のとんでもなさがよくわかる。

他のページには、まだ父親を失う前の潔の姿が描かれてあった。

『今日は球技大会。快晴。いつものように彼がヒーローだった。彼がボールをキープするたびに歓声があがる。その声に応えるように、彼は必ずシュートを決める』

『まっ昼間に池にボートを漕ぎ出した彼が、そのまま眠り込んでしまうということをやらかした。起きてみたら、肌が真っ赤に灼けてしまって、熱いの痛いのとグチる。みんなで相談してバケツの水を頭から盛大にかけてやったら、案の定怒り狂った。しかし、僕らは大笑いだった』

『彼が寮を脱走すると、いつも冷や冷やする。本当に帰ってくるのだろうか。もう二度とここには戻ってこないのではないか。彼が樋をよじ登ってサロンのバルコニーから姿を現すと、みんなはほっと胸をなで下ろす。舎監への言い訳を考えずにすむことよりも、彼の姿をもう一度目にすることができたのを、皆よろこんでいるのだ』

「寮を脱走？　脱走してどこに行くっていうんだろう…」

詠生がレポート用紙をめくった。

「ここを読んでごらん」

『いつものように樋を登って帰ってきた彼が、もう一度下に降りると言う。そして僕にも一緒に降りろと言う。仕方なく、初めて樋にぶら下がるという芸当をした。降りたところには、彼の大切にしている噂の彼女がいた。なんと、僕に紹介してくれたのだ！　非常に感激した。とても美しい人で、がちがちに緊張してしまって何を話したのかも覚えていない。最後に『彼をよろしく』と言ったことだけは覚えている。なんでも、彼女の両親も二人の交際には大賛成とのことで、結婚まで決まっているという。まったくうらやましいことだ』

葵は驚いて詠生の顔を見た。

「『噂の彼女』だって」

「葵のお母さんのことじゃないかな」

「え――ッ!!」

「お母さんのこと、聞いたことない？　たびたび寮を抜け出して、二人は会っていたんだ。これは僕の母から聞いたんだけどね。とにかく、熱烈な恋愛だったらしいから」

「熱烈な……恋愛……」

復誦するように呟いた葵の頬に、詠生が唇を押しつけた。
「僕もちょっとうらやましい。そんな、熱烈な恋愛…してみたい……」
間近にある詠生の顔が微笑ってる。
父と母の『熱烈な恋愛』とはどんなものだったのだろう。それには、帝壮一朗も絡んでいるはずだった。父と母。父と帝壮一朗の反目…。母の死によって、父と祖父は互いに憎み合うようになってしまったのだろうか…。
知りたいと思う気持ちと、知らない方がいいのではないかという気持ち。その二つが葵の中でぶつかって、小さなしこりとなって残っている。
葵のベッドに並んで腰を下ろして、二人は身体を寄り添わせていた。ふと詠生の体温を、彼の息づかいを感じて、葵は心拍数を上げた。
詠生が再び唇を寄せようとした。葵はふいとそれを躱すと、キッと詠生を見上げた。
「俺は男だよ」
「今ごろそんなこと言っても遅い」
「何が遅いんだよ？　本当のことだろ」
「人の気持ちに歯止めをかけられるかい？　頭でわかってはいても、心はどうしようもならない。だから、もう遅い…」

詠生がキスしようとして、寸前のところで止めた。そのまま葵を見つめていた。
「……」
葵は言葉を失っていた。見慣れた詠生の顔が間近にある。それは、別段驚くべきことではない。それにしても、詠生はこんなにセクシーな顔をしていただろうか。
詠生の大人っぽい顔が、感情表現の乏しい（と思っていた）顔が、なんだか別の生き物のようにも見える。少し苦しそうに眉を寄せて、熱い瞳で葵を見つめる。葵の知らなかった、詠生のもうひとつの顔だ。
「熱烈な恋愛をする相手は、もうずっと昔から決めていた…」
「……」
「ずっと昔から、決めていたんだ……」
「――いとこ同士は近親相姦にならない？」
葵の問いかけに、詠生がくっと笑った。
「葵のそのストレートなもの言い、好きだな」
「どういたしまして。キス……――するのか？　それとも……」
「する」
詠生が遠慮も会釈もない男だと初めて知った。

息が止まるようなキスに、葵が降参するまで……、それは続けられたのだ。

＊＊＊

最近はサロンに足を運ぶより、詠生と過ごす時間の方が多くなった。
とはいえ、昔のようにべったり一緒という訳でもない。それぞれ交遊が広がったせいか、一緒にいても別々のことをしているといったケースが多くなったのだ。
どこで何をしていようと、詠生を感じる。彼が、葵を見ていてくれる。想っていてくれる。
ひとりではないということは、そういうことなのだ。
ならば、もう思い惑う必要はなかった。
この大自然に囲まれた土地で、自由で優雅な学校生活を精一杯満喫すればいい。
それが、父から葵に贈られた最高のプレゼントなのだから。
いつか小野が話してくれたことがあった。
まだ自分の身が借金の担保だと肩身が狭かった時。恵まれた他の生徒たちのことを密かに羨んでは、自己嫌悪に陥ってばかりいた時期だ。
情けない自分の身の上をひたすら恥じては、つまらないことをグチっていた。小野はそんな葵

を知らないながらも言ったものだ。

「ここの生徒が恵まれたお坊っちゃんばかりだなんて、それは君が彼らのことを知らないからだ」

不思議そうな葵に、小野は続けた。

「海外から帰国したんだ。ここは日本なんだから、この先の大学進学のことも考えてみれば、普通の高校に通った方がより理想的だとは思わないか？」

確かに、大学受験のことを考えたら、そうするのが一番自然だった。何しろ、日本の学校の教育レベルは高いのだ。そう改めて考えてみれば、こののんびりとした香陵学園は大学進学に必ずしもプラスになっているとは思えない。

「…だが、彼らの多くは、いろんな意味で日本の学校に馴染めなかった。早い話が、まあ…人が言うところのおちこぼれだってことだ」

冷たく言いきった小野に、葵はびっくりした。そんな言葉を彼の口から聞かされるとは思わなかった。

「驚いた？　だって本当のことだからね。僕自身、どうしようもないおちこぼれだった。中学は半分しか行ってないよ。自分の意志で、学校にいくのをやめたんだ。後悔してないけどね」

小野はキッドのことも話してくれた。一年の六月に転校してきたキッドは、約一か月もの間、

誰とも一言も口を利かなかった。彼が初めて発した声は、羽仁の淹れたお茶を一口飲んで呟いた「おいしい…」という言葉だったという。

羽仁は入学した時から明るかったが、彼の頭には十円ハゲがいくつもあった。彼はそれを隠さなかったし、誰もそれを笑わなかった。そのうちハゲはいつの間にか消えていた。

「目に映る表面上ではわからないことって、意外にたくさんあるものなんだな。幸せそうに見える人間が、本当に幸せだとは限らない。それと同じで、自分は不幸だと思い込んでいた人間が、その実ちっとも不幸じゃなかったってこと、あると思うよ」

あの時の小野の言葉が、今ならよくわかる。

何より不幸のどん底にいたと思っていた自分が、多くの人間に守られていたことを知ったのだから。潔や詠生といった血縁の者だけじゃない。小野やキッドや羽仁…、その他のたくさんの友人たちが教えてくれたものの多さに、今さらながら葵は気づいた。

この学校の生徒たちは個性が強く、一見みんながバラバラに見える。だが、他人に対しては、皆一様に思いやり深い。それは、単に外国で培われた習慣のせいだと思っていた。もちろんそれもあるだろうが、それだけではなかった。

他人の痛みを、自分の痛みとして理解できるから。

彼らは他人に対してやさしくなれるのだ。

この学校にくることがなければ、葵はただ上を目指して勉強ばかりに打ち込むような人間になっていたかもしれない。自分のことを考えることもなく、ましてや他人のことになど関心がないまま…。

実際、一度進学校に進んだ詠生は、そこでの生活を「息が詰まりそうだった」と評していた。この学校にきて、やっと自分を取り巻くいろんなものを見るゆとりができたとも。

大学に進むためだけなら、決して香陵学園はプラスにはならない。だが、それ以上のものを得ることができる。学校から、友人から…。

そして葵にはもうひとつ。

――父から。

サロン及び自治会室に埋もれていた大量の古書を図書室に返す作業は、寮会幹事を全員動員してもまる半日かかりそうだった。

小野の指揮に従って、ジャンルごとに仕分けし直し、書棚にきちんと収納するのだ。すでにあふれ返りそうな書棚を整理し直さなくてはならなくて、二重の手間がかかった。

キッドと羽仁にも手伝ってもらって、なんとか収拾がつきかけたころ、図書カードを新たに作

り直していた詠生が、ミスター岩沢を連れて葵たちのところにやってきた。
この学校で潔とともに青春を過ごした（らしい）ミスターは、まだ独身のせいか若々しい雰囲気の少年みたいな人だ。見かけの割には気難しいが、生徒とはきっちり一線を引いたところが逆に生徒には受けて、『ミスター』といえば『岩沢先生』で通る。一年の英語の授業も、もちろんこのミスターによるものだが、葵はこれまで特に親しく話をしたことはなかった。
「あ、これこれ。ずっと探してたんだ」
ミスターは瞳を輝かせると、積み重なった大量の本の山の中から一冊の本を引っ張り出した。『ピックウィック・ペーパーズ』とタイトルはなんとか読めるが、中はすべて英文なので、葵にはさっぱりだった。
「ディケンズの小説だな。俺も読んだことはないが」
キッドが耳打ちした。ディケンズって何を書いた人だっけ…と考えていた葵は、ミスターに呼ばれて顔を上げた。
「君、悪いけど、これとこれと…あ、それも！　僕の部屋まで持ってきてくれないか」
否応もなく、葵の手の中にどさどさと本を乗せた。ミスターも両手いっぱいに本を持っている。
「よう、いってらっしゃい！」
キッドが手を振って見送ってくれた。振り返った葵は肩をすくめただけだった。

職員の宿舎は、生徒の住む寮とは少し離れている。いったん外に出て、小道を通ってぐるりと校舎を迂回した林のすぐ側だ。ミスターの部屋は日あたりのいい二階の角部屋だった。

荷物を置いてさっさと出ていこうとした葵を、ミスターはあわてて呼び止めた。

「待ちなさい。おやつあげるから…。あれ、あのクッキーどこいった？」

寮の部屋と同じくらいの広さの部屋には、本がうず高く積まれていた。その本の山をかきわけ、ミスターは葵にくれるためのクッキーの缶を一生懸命捜していた。

そのあわてぶりが気難しいと評判のミスターらしくもない。だいたい子供のお駄賃じゃあるまいに、おやつだって…。入口でその様子をくすくす笑って見ていた葵は、ふと小物がごちゃごちゃひしめくサイドボードのガラス戸の奥におさめられている写真立てに気づいた。

離れているので、写真まではよく見えない。でも……。

「ああ、あった！」

クッキー缶を手に、ミスターは葵の前に戻ってきた。

「本、重いのにありがとう。これあげるから、さっきのみんなと食べなさい」

「あの……」

「ん？」

（――俺は、壇ノ浦潔の息子なんです…。父のこと、覚えてますか？）

喉の奥から、そんなセリフがこぼれそうになった。ぐっとそれを抑えて、葵は缶を受け取った。
「すみません、いただきます」
ちらっと奥の机の写真立てに目をやった。男女二人の人物が写っていることはわかった。その片方の男が、やはり潔に似ているような気がしたのだ。
葵は小さく会釈すると、ミスターの部屋を出た。

「ミスター岩沢の部屋に、父さんの写真があったような気がする」
葵が言っても詠生は別段驚かなかった。
「そんなことは不思議じゃないね。何？　見せてもらわなかったの？」
詠生がきれいにアイロンのかかった清潔なベッドシーツを手渡してくれた。
自分のベッドの上掛けを適当に丸めながら、葵は頷いた。詠生はさっさとシーツをベッドに敷いて、ベッドメイキングを終わらせようとしていた。
「どうして。見せてもらって、お父さんの話を聞いてみればよかったのに…」
「これ以上、父さんのやらかしたことを聞けって？　穴掘って隠れてしまいたいほど、充分聞かせていただいたよ」

詠生がにやにや笑った。
「なんだ、つまらないな。キッドなんか、おあつらえ向きの生き証人がいるってよろこんでいたのにさ。葵がそんなこと言ってどうするんだ」
「……」
葵はことさら詠生を無視するように、ベッドシーツをぱあっと広げた。
「葵……一緒に寝ようか？」
詠生がそんなことを言って誘う。頷いてしまいそうな自分を抑えて、葵は首を振った。
ミスターの部屋で見た、潔かもしれない写真……。
遠目で見ただけのそれを、なぜ潔だと思ってしまったのか。
ベッドメイキングを終えて詠生を振り返ると、彼はもう自分のベッドに入っていた。横になって、葵をじっと見つめている。
彼の瞳が何を言おうとしているのか、今の葵ならわかる。
（一緒に寝たいのは俺の方かもしれない……）
それは、詠生が好きだから？
それとも、潔がいない寂しさを、もうひとりの、血で繋がる詠生で埋めようとしているのだろうか。

葵は部屋の電気を消すとベッドに入った。部屋は真っ暗になったが、詠生の側のライトスタンドの小さな明かりだけが灯っている。

「おやすみ、詠生」

「おやすみ…葵……」

何か…。

何か彼に言わなくていいのだろうか。ベッドの中で、ライトのぼんやりとした明かりに浮かぶ詠生の端正な顔を見つめながら、葵は唐突に思った。

だが、何を言ってしまえばいいのか。

肝心なそれを考えつく前に、葵は眠りに引き込まれてしまった。

5

季節は早足で過ぎてゆく。

夏休みが終わったと思ったのもつかの間、校内はすぐに学園祭へと突入した。

体育祭と文化祭を一緒にしたそれは、小さな学校らしい小さなイベントだったが、学園ＯＢも大勢やってきてちょっとした同窓会の雰囲気だった。

そこで、ミスター岩沢だけでなく、ここの教員の多くがこの学校のＯＢなのだということも知った。案外、過去の生き証人とやらは、探せばもっとたくさんいるのかもしれない。

小野や羽仁やキッドの家族たちもやってきた。彼らの『洗練された』身内に紹介された葵は慣れないことゆえ緊張しっぱなしだったが、ともかくも楽しい二日間だった。

学園祭が終わると、季節は冬を迎える。

この土地の冬は、長く厳しい。四方の山々から吹き下ろされる風に、すべてのものが凍りつくされるような、暗く暗鬱な冬だという。

「それじゃ雪も積もるんだ」

夕食のあと、サロンではいつものようなお茶の集まりが開かれていた。

今日のメンバーは葵にキッドに羽仁に小野。時期が時期なだけに、サロンのメンバーのうちでも、三年生の多くは受験に向けて図書室や自室にこもる日が多くなった。

そういう訳で、今時サロンで優雅にお茶していられるのは、天才的頭脳を持つ小野か、さらにそれを上回る悪魔的頭脳の羽仁くらいのものだ。二人とも、卒業後は外国の大学に留学するというのでのんきなものだった。とはいえ、羽仁が学年トップの頭脳の持ち主だということをごく最近知って、人は見かけによらないと葵は実感したばかりだった。

「あったり前だろ。校庭でスキーやってる奴もいるぜ。俺なんか、かまくら作ってしばらくそこに住んでいたもんな。舎監から七輪借りて、モチ焼いたりすんの。うまいぜー」

キッドは次期の寮長就任を了承させられていた。それにあたっては、葵を寮長補佐にする、という条件付きだった。小野に頼み込まれては、葵も寮長補佐就任は断れなかった。

「鎌倉？」

葵が訊く。

「かまくら」

キッドが答えた。

「七…七味？」

「七輪！」

漫才をやってるような二人に、小野が肩をすくめる。本を開いていた羽仁が小さく笑った。
暗く長い冬がやってくる割に、案外明るいいつものグループだった。
ドアを軽くノックして、詠生がやってきた。
「葵、ミスターから写真借りてきたぞ」
一同が興味顔で詠生に寄ってきた。
「ちょっと、ちょっと…葵に持ってきたんですよ」
しっしっと外野を追い払って、詠生が葵に写真立てを渡した。
葵は黙って手の中に視線を落とす。いつかミスターの部屋で見かけた、写真だった。
「……」
古い写真だということはすぐにわかった。
人物は二人だと思っていたが、実は三人が写った写真だということに気づいた。
「これ……」
写真立てを手に、葵は詠生を見上げた。
「うん。いつか葵が言ってた写真だろう。舎監にミスターへの届け物を頼まれて、思い出したんだ。ミスターに頼んだら、葵の写真だからって快く貸してくれたよ」
『葵の写真』という一言が、胸に響いた。

今、手にしているこの写真こそ、あの夏ナイトクラブのオーナー北野氏が言っていた、家族の写真だった。

明るい日射しの中で二十歳くらいの若々しい潔が写っている。その隣には少女のような面立ちの女性が寄り添うように立っていた。胸に水色のベビー服を着た赤ん坊を抱いて、美しい笑顔をこちらに向けていた。

北野氏は、どこかの外国らしいと言っていた。葵は外国へ行ったことはない。やはり外国ではなかったのだ。

父と母の後ろに建つ石造りの建物は、どこの国のものでもない。まぎれもなく、葵の今いるこの香陵学園の校舎のたたずまいだった。

葵の内部から、言葉にできない何かがわき上がってくる。必死に抑えようとして、抑えきれなかった分が、目から少しだけあふれた。

写真の中の父は、ちょっと緊張した顔を見せていた。にもかかわらず、若さと、自信と、希望に満ちあふれた青年の顔だった。彼の人生はどこから狂ってしまったのだろう。

父親がテロリストに殺された時から？

それとも、愛していた妻が死んだ時から…？

「葵……？」



詠生が震える腕を取った。
「大丈夫か…？」
葵は涙で濡れた瞳を詠生に向けた。
「……」
その潔の隣に寄り添う女性こそ、葵が初めて意識する『母』だった。子供を産んだとは信じられない、少女のような面ざしに細い肢体。写真も、位牌も、墓もなく、思い出すらなかった。母、その人だった。
小野もキッドも羽仁も、訳がわからないといった顔をして二人を見ていた。
葵は写真立てを胸に抱え込むと、詠生に訊いた。
「父さんに…もう二度と会えないのかな？」
自分の意志で、息子の前から去っていった父親だった。
だが、まだ早い。このまま別れてしまうには、父子はまだ何も話していない。
葵には知りたいこと、聞きたいことが、まだたくさんあるのだ。
潔が過ごした学園生活のこと、早くに死んだ母との恋愛のこと。
何より、たったひとりで葵を育て上げてくれた、父のことをもっと――！
「そんな訳ないだろう？」

「でも……本当のことだ。もう二度と会えないんだ。だから、帝壮一朗に頼んで、この学校に入れたんだ…。最後に…最後に、親らしいことをしてやろうとして……」
「葵……」
「まだ…まだ、なんにも父さんと話してない…。もっと父さんといろいろなこと、話したいよ…」
葵は詠生の腕を振りほどくと、一歩後ろに退いた。
そこでやっと自分を見つめる友人たちに気づいたようだった。一瞬、戸惑うように視線を泳がせた。
「……葵」
詠生の呼びかけに、葵はちょっとだけ振り返っただけだった。すぐにドアを開けると、外に出ていった。

葵が出ていった後、詠生が追いかけるように出ていった。
毎度毎度のことなので、誰も口を挟まなかった。残された者たちがそれぞれ元いた席に戻ると、キッドがまず口を開いた。

「俺さ、葵を見てると、アレに似てるって思うんだ」
「アレって？」
羽仁が、読みさしの本をもう一度手に取りながら尋ねた。
「ジェットコースター」
羽仁と小野が同時に笑う。
「スクリューみたいにひねってない、スタンダードなやつ。ただし、傾斜角度がめちゃくちゃキツいの」
「じゃあ…詠生は……」
小野の問いに、三人はもう一度顔を見合わせた。
「ブレーキ！」
三人は声を揃えて叫んだ。

部屋の中では、〝ジェットコースター〟葵が写真立てを片手に一生懸命深呼吸をしていた。
潔がいなくなったという事実を今さらながら思い出して、一瞬我を失ってしまった。
だが、それはもうすでにわかっていたことだった。ひとり部屋に戻って、しんと静まり返った

空間に立ちつくして、葵はそこに思い至ったのだ。高ぶりかけていた心が、なんとか平静を取り戻し、頭の芯が冷えてくると、そんな自分が馬鹿らしくなる。

それでも、いまだ葵の宇宙は潔を軸に回り続けているようだった。どこで何をしていても、忘れかけていた潔の存在が、葵のふいを襲うように蘇ってくる。そのたびに、彼がなぜ去っていってしまったのか、悩まなければならない。

二人で生活していた時、潔が幾日も家を空けたとしてもそんなことを感じたことはなかった。こんな感覚は、この学校にきてからだった。詠生の存在が、それに拍車をかけたのかもしれない。葵を悲しませまいと彼が囁く慰めの言葉に、なおも葵は潔を待ち続ける確信を深める。潔は葵を捨てたのではない。父親としての愛情からこの学校に入れてくれただけなのだと。そして、約束通りいつかきっと葵の許へ迎えにきてくれるのだと。

それが欺瞞だと知りつつも、真実からなんとか目を背けていたい葵は、その言葉にのみすがっていくようになっていたのだ。

サロンを飛び出した時、詠生が呼んでいた。

その必死の声に葵は思った。また彼を心配させてしまった。また彼に追っかけさせるようなマネをしてしまった。そう思うと、葵は毎度のごとくの自分の頼りなさに情けなくなってしまう。自分が取り乱すと、それだけで詠生に負担をかけることになる。彼はそれを負担だとは思って

いないだろうが、葵はいつまでも守ってもらうべき子供じゃない。もうそろそろ詠生の庇護から抜け出していいころなのだ。

そんな決心もつかの間、詠生がすぐに追いついてきた。彼は、何があっても葵の側から離れるつもりはないらしい。

「葵……」

入ってきたドアを閉めて、葵に近づいてくる詠生の気配を背中に感じた。

ついさっき、詠生に甘えるのはよそうと思ったばかりだった。なのに、そうやって後追いしてまで自分を心配してくれる彼がうれしかった。

詠生がゆっくり歩み寄ってくる。彼の腕が葵の首に回される。引き寄せられて、詠生の匂いに安堵する。背後からふんわり抱きしめられたまま、葵は目をつぶった。

潔がいなくなってしまったように。

もしも、詠生までいなくなることがあったとしたら——。

葵は、自分がどうなってしまうか…想像もできなかった。

「写真…余計なことだったか……」

耳に唇をつけるようにして、詠生が囁いた。

「ううん……。わざわざミスターから借りてきてくれて、ありがとう…。俺は…その…、お母さ

んを見たの初めてだったんだ…。父さんの若い頃の写真も……」
詠生がとっさに腕を解いて、葵の顔を覗き込んだ。
「お母さんの顔、知らなかったのか？」
「うん…」
彼の瞳をまっすぐ見返すのがなぜだか眩しかった。葵は戸惑いながら、頷いた。
「――――」
明らかに詠生は衝撃を受けたようだった。いくら早くに死に別れたとはいっても、写真一枚くらい、あって当然なのだ。それがまったくなかった壇ノ浦の家は、やはり世間一般の家と大きくずれていたと思わざるを得ない。
「ごめん…。そこまで気がつかなかった。そうか…、もっと早く知っていれば…。帝の邸にはね、君のお母さんの写真、それこそいっぱいあるんだ。祖父ももう年だからね、今ではそれらが唯一の心の慰みだよ。僕の母も、君たち親子の写真を何枚か大切に持ってるんだ。母にとっても、たった一人の妹だから…」
「うん…」
葵の動転の理由を知って、詠生はすっかり安心したようだ。唇の端にうっすらと微笑みを浮かべて、一気に余裕の表情になる。

「そうか…。ミスターから借りた写真、いきなり僕が突きつけたから、葵はびっくりしてしまったんだな。そうか…初めてお母さんに会えたんだ…」

「……」

詠生は、いつでも葵が困らないような解釈をしてくれる。彼のやさしさ、愛情に甘えて、ここまできたけれど、このまま彼に守られるだけの自分でいていいのだろうか？

それはずっと以前からの疑問だった。自分は、詠生のやさしさに甘えて、彼を潔の代わりにしているのではないか――。

葵は唇を湿らすと、勇気を奮い起こした。彼の両腕を摑み、彼の身体を引き寄せるようにしながら訊いた。

「一度聞いてみたいと思ってた。――詠生がそうやって俺にやさしいのは、俺が詠生のいとこだから？」

「――」

「帝のお祖父さんに、俺のこと頼まれているんだろ？　詠生のお母さんにも。そのために、この学校にきたんだ。だから、詠生は俺のことを守るし、なんでも許すことができるんだ」

詠生が顔色を変えた。

「馬鹿な…。誰に何を頼まれようが、そんなこと関係ある訳ないだろう。第一、ここへは僕の意

志でやってきた。そのことで、誰にも指図はされてない」
「でも、詠生のしてることは結果的にそうじゃないか。俺のこと、ただ甘やかしてる…」
葵の言葉に、詠生は傷ついたような顔をした。
「僕の気持ちは、葵もとうにわかってくれてると思ってた。…どうして今になってそんなこと言い出すんだ…」
「俺自身、詠生に甘えて気持ちよかったからだよ…。何を言っても、何をしても、詠生は俺を許してくれる。守ってくれる。そんなふうにしてもらえるのって、生まれて初めてだったから…。それが気持ちよすぎて、俺も詠生に頼りきって甘えてたんだ…」
「それのどこがいけない？　僕は葵が好きだ。ずっと昔っから！　祖父さんと葵のお父さんのことがあるから、堂々と会いにいくこともできなかった。ずっと、ずっと、こうやって葵と一緒にいられることだけを待ち望んでいた。それがどうしていけないんだ！」
すごい愛の告白だった。思わず頬に血の色を昇らせた葵は、だがここであっさり引く訳にはいかなかった。
「――詠生が俺を甘やかせば甘やかすほど、俺はいつまでたっても父離れができないからだよ。こんなこと、詠生に言うのは間違ってる。父離れできないのは、俺自身の問題だ。だけど、あえて言わせてもらう。俺を好きだって言うんなら、いつまでたってもめそめそ父さんのことを恋し

がってる馬鹿な俺を、一発張り飛ばすなりなんなりしてでもいいから、目を覚まさせてくれたっていいじゃないか！」

「――――」

叫んだせいか、はたまた興奮のせいか、息が切れてしまった。詠生の腕を摑んでいる手が熱い。葵はひとつ大きく息継ぎしてから続けた。

「自分がこんなに情けない人間だとは思わなかった…。本当に、父親似の阿呆だよ。こうなってもまだ、自分から父さんを思い切れる自信がないんだ。父さんの人生は父さんのもの。俺の人生は俺のもの。そんなことわかっているのに…。いつまでも小さな子供のように、親の手を探してしまうんだ」

「……」

詠生は黙って葵の顔を見ていた。彼の顔にはさっき浮かんだ激情の色はもうほとんどない。

「こんな俺を、詠生はいつまでも辛抱強く守ってくれなくていいんだ。めちゃくちゃ言ってくれていいんだ。ぶっ飛ばしてくれていいんだ。『いい加減にしろ！』とはっ倒してくれていいんだ。本当に俺のことを好きだと言ってくれるのなら！」

もう何を言っているのかもわからなかった。わかるのは、こうやって自分でも持て余す感情をぶつけることによって浮かび上がる、自分のもうひとつの想い……。

「葵……」
詠生が呼んだ。
反射的に詠生の両手を離した。代わりに自分の顔を両手で覆い隠して、葵は叫んだ。
「俺だって、詠生のこと好きなんだから――。そうでもしてくれなきゃ、俺の立場はないじゃないか――！」
顔を隠してしまったので、詠生の顔は見えない。見えなくてよかった。こんな自分の顔を見られなくてよかった。
訳のわからないことをわめいた挙句に出てきたセリフは、葵自身思ってもみなかった告白だった。自分の中の苛立ちを全部ぶつけて、最後に残ったもの。それが、たったひとつの葵の本音だったのかもしれない。
「……」
詠生が何か応えてくれるのを待つことの、なんと長かったことか。
しかし、いくら待っても詠生からのリアクションはない。
不安感に苛まれた葵は、そろそろと両手を外した。えいっ！　と詠生の顔を見上げて、彼の途方に暮れたような顔にぶちあたった。
「詠生……」

「……」
詠生は相変わらず無言のまま葵を見ていた。葵の言ったことが聞こえてなかったのだろうか。
「聞こえてる？」
「うん……」
うん…と言いながらも、詠生にいつものキレはない。
「詠生のことが…好きだと言ってるんだけど」
「だけど……、友だちとしてだろう？　あるいはいとこ――」
「ばっか野郎っっっっ！」
思わず手が出る、という状況は誰しもあるものだ。詠生の頭をどやしかけて、葵はハッとその手を引っ込めた。
「本当…に――？」
葵にぶたれかけて、詠生はようやく合点がいったようだった。
二人はやっと互いの顔を見つめ合った。
恥ずかしいような照れくさいような気分だった。きっと詠生も同じ気分だったのだろう。めったに表情を面に出さない詠生が、葵にもそうとわかるくらいにあわてていた。
葵は言った。

「父さんのことで、俺がまだうだうだ抜かすようなら叱ってくれていいから」
「そんなこと……」
「じゃあ、ヤキモチ妬いて…。僕と親父のどっちが大切なんだ！　って言って。もっと怒っていいから」
「そうして欲しかったのか？」
「たぶんね……」
詠生はいつもやさしかった。借金の担保に学校に入れられたと思い込んでいた葵のために、彼はこの学校を選んできてくれた。慣れない環境に四苦八苦する葵の手をいつでも引いてくれた。潔がいなくなった時は、取り乱す葵の一番の支えになってくれた。
そのやさしさが、実は一番の障害だった。彼がやさしくしてくれるだけに、父のことを整理することができなかった。ただ慰めてもらうことが気持ちよかったのだ。
だが、いつしかそれでは足りないと葵の心が悲鳴を上げるようになってきた。真綿でくるみ込むだけの彼の接し方に、歯がゆい思いを抱くようになっていたのだ。
本当は葵自身もっと早く、彼への想いに気づいているべきだった。
詠生は葵への想いを隠そうとしてはいなかった。だが、彼は想いを隠さなかったばかりか、答えを求めることもなかったのだ。

待っているばかりでは望むものは与えられない。
それに気づくには、あまりにも無知だった。
こと恋愛事に関しては、葵はまったく慣れていなかった。中学時代にラブレターをもらったことがあるくらいで、世間並みの初恋の記憶すらなかった。そんな葵に、詠生への想いが友情なのか、肉親への愛情なのか、はたまた恋というシロモノなのか、わかるはずもなかった。
教えてくれる人もいなかった。いろんなことを教えてくれるキッドや小野や羽仁にしたところで、そんなことなど、ちっとも教えてくれなかった。
だから、無理矢理でもいい。詠生の方を向かせて欲しかった。潔のことで思い悩む葵の内部から、潔の影を追い払って欲しかった。
「葵……キスしていいか？」
詠生が訊いた。
もう何度も彼の口から聞いているセリフだった。にもかかわらず、ものすごく新鮮に感じた。
「いとこ同士はいいんだっけ？」
これも一度葵は訊いた。詠生が微笑う。
「外国は知らない。少なくとも日本では法律違反じゃない」
「安心した…」

唇が触れ合った。もう何度目かもわからないキスだった。
けれど、今までで一番情熱的なキスだった。

＊＊＊

その頃、サロンでは羽仁が大あくびをしていた。
部屋はストーブで暖められているが、夜も更けて外はかなり冷え込んでいるのだろう。バルコニーに続くガラス戸は白く曇って、外気との温度差を表している。
羽仁は開いていたページに栞を挟み込むと、本をぱたんと閉じた。
「そろそろ引き上げるか」
羽仁の提案に、書き物をしていた小野が壁かけの時計に目を走らせるとひとつ頷いた。
さっきまで気持ちよさそうにうたた寝をしていたキッドは、もう一度椅子に座り直すと、テーブルの上のティーカップを片付け始めた。
「明日でいいよ」
小野の言葉に、キッドは手を止めた。
「明日…、葵は元気になってるかなぁ…」

「詠生がついてりゃ大丈夫だろう。けろっとした顔してるぜ、きっと」
羽仁はさっさとストーブの火を消していた。
「ちぇっ！　詠生、葵にはとっことん甘いもんなぁ。俺の入る余地がないんだよ」
「入る余地があったって、あの詠生が許すもんかね。あいつ怒らすとジェイソンよりも怖いぞ」
羽仁が笑いながら言った。筆記具を片付けた小野は、立ち上がると上着を取った。
「ストーブは消したな。あとは、電気を消してOKだな」
毎夜のことながら、小野は指差し確認を怠らない。
「ああ、羽仁さん。明日自治会役員が集まるんでしょ。副の高田さんがなんたら言ってたな」
「知らない。そんなの」
「無責任だなあ…、あんた会長でしょうが」
「快調になりたいワ・タ・シ～…」
そんな会話を交わす羽仁とキッドのあとについて、最後に小野がサロンを出る。壁のスイッチを押して、もう一度真っ暗な部屋を振り返った。
「――――」
ドアを閉めた小野は、だがその前でしばし首をひねった。

廊下を先に行っていた羽仁とキッドが気づいて、サロン前に引き返してきた。
「小野さん、どうしたの？」
「うん……。電気を消した直後、サロンに人影があったような……」
「まさか…。やだなぁ、あそこには俺たち三人しかいませんでしたよ」
キッドが呆れたように言う。
「幽霊が出たのかも……」
両手を前に突き出す幽霊ポーズをとりながら、うれしそうに言ったのは羽仁だ。目をらんらんと輝かせている。
「羽仁さん、あんたは黙ってて。あんたが絡むと、そのうちゾンビでも出てきそうで不気味だから」
キッドにつつかれても、羽仁の目の輝きは消えなかった。
「おい、ドア開けてみようぜ。ちょっくら室内を探検してみよう」
「冗談じゃない。サロンで幽霊探しなんてごめんだ。俺たちは眠い。さっさと部屋に帰っておねんねするべきだ」
羽仁とキッドの意見は真っ二つだ。
「ここは民主的に多数決でいこう」

羽仁が言ってさっそく決を取りに出た。
「自室に戻って、とっとと寝るか？」
キッドがふくれっ面で手を上げた。
「室内の異常を調べてみるか？」
羽仁が手を上げた。小野も迷った末に手を上げた。
「よーし決まった。俺がドアを開ける。怖かったらついてこなくてもいいぞ」
「誰が怖いって？」
「キッドだろ？」
羽仁のからかいにむっときたキッドはいきなりサロンのドアノブに手を伸ばした。さっと押し開けて、室内の電気が煌々とついているのにぶったまげた。
「わ――ッ!!」
小野が確かに消したはずの照明スイッチが、再び入っている。開けっぴろげのドアの入口に、キッド、羽仁、小野の三人が鈴なりになって、驚きのあまりしっかり固まったまま、室内中央に目が釘付けになった。
なんと、サロン中央の安楽椅子には見知らぬ男が優雅に腰かけていたのである。
「どっ…泥棒ーっ！」

第一声を浴びせたのはキッドだった。同時に、小野がぐっと身を乗り出したので、押されてキッドは前によろけて押し出された。
「てめえっ！　どっから入った！　ここは神聖なる学問の巣だ。てめえの探すような金目のもんなんか、ありゃあしねえんだッ！」
キッドのタンカに、男は大きなくしゃみで答えた。
「羽仁さん！　ぼけっとしてないで、舎監呼んでくるんだよ！　それと警察！」
キッドが振り返って羽仁に怒鳴った。おっかぶせるように、男が言った。
「――ガタガタ騒ぐんじゃねえ、このガキども。お前らがさっさと寝ないから、俺が風邪ひくところだったんだ」
「なんだとぉ…偉そうに。いったいナニ様のつもりだ、この野郎！」
「キッド…、ちょっと待て」
逆上しかけたキッドを押し止めて、小野が前に進み出た。
「あなた、もしかして壇ノ浦潔さんじゃありませんか…？」
キッドが飛び上がった。羽仁はにやにや笑って、キッドを見た。
「なんで俺を知ってるんだ？」
男の問いに、小野は納得したように頷いてみせた。

「僕らは葵の友人です。あなたのお噂はかねがね聞かせていただいてます。今夜も、あなたの若かりし頃のお写真を見せてもらったばかりです。いや、あの頃とまったく変わってはいませんね。葵のお兄さんと聞かされても、違和感ありませんよ」

「いいから、ドア閉めろ。誰かが起き出してきたら、まずいことになる」

促されて、入口に立っていたキッドと羽仁ももう一度サロンに足を踏み入れた。ドアを閉めたのを確認した小野は、潔に再び向き直って彼の顔色に気づいた。

「外の樋を登って、ずっとバルコニーで僕たちが部屋を出るのを待っていたんですね」

潔は返事をしなかったが、彼の蒼ざめた顔色がそう物語っている。きっと身体の芯まで凍え切っているに違いない。

キッドがあわててストーブに再度火を入れる。羽仁はお茶の支度に立ち上がった。

小野が言ったことはまんざらお世辞でもなかった。あの、壇ノ浦葵の父親である。彼をもっとシャープにして、とことん研ぎ澄ましたような男らしさを備えた男だった。全身黒づくめだったが、彼が着るものにもうるさい男だということは、小野にも一目でわかった。

しかし外見はともかく、やることはとことん無鉄砲だ。この寮の住人だった時ならまだしも、外部の人間が樋をよじ登ってバルコニー越しに学校内に侵入してこようとは。いくら息子に会いにきたとはいえ、これじゃあ誰に訊いたって立派な不法侵入罪だ。

だが、そんな考えをおくびにも出さず、小野は羽仁の淹れたお茶を勧めた。
「外は寒かったでしょう。どうぞ、彼の淹れたお茶は評判いいんですよ」
潔は黙ってカップを口にした。
「なんで、急に俺を接待する気になったんだ？」
温かいお茶でようやく人心地ついたのだろう。潔が尋ねてきた。
「なんでって、あなたが葵の父親だからですよ。彼に会いにきたんでしょう。きっと喜びますよ。あなたのことばかり、彼は心配してましたから」
「……」
「――そもそも、なんで面会日にこないで、こんな夜更けにこっそりやってくるんだよ。葵にだって、都合というもんがあるだろ」
遠慮会釈もなくキッドは疑問をぶつける。
「葵の都合もあるだろうが、俺の都合もあるんだ」
潔の答えはそっけない。
「あっそう！」
（俺たちの都合ってもんもあるんだよ）
このオヤジにゃあ匙投げた…というように、キッドは大仰に肩をすくめてみせた。

そんなキッドを視線でなだめたのが小野だ。
「もう休んでるかもしれませんが…呼んできましょう。葵を呼んできていいですね？」
潔は頷いた。
「呼んでくるよ」
小野と羽仁の目配せに、キッドがしぶしぶ立ち上がった。

＊＊＊

何度も繰り返されるキスに、葵の息は上がっていた。
詠生は、今までセーブしていたものをすべて解き放ったかのように、葵を貪り続ける。
キスという行為で詠生をもっとも身近に感じることになった葵も、同じように詠生を求めた。
「いいよね…葵？」
彼が何を訊いているのか、鈍い葵にもわかった。Aのあとには、BからCへと続くように、詠生もまたキスのあとの了解を求めているのだ。
「ん……」
葵は微かに頷いた。心は決まっていたが、どういう反応を示せばベストなのかわからなかった

のだ。
葵の身体を抱きしめるだけだった詠生の手が、すっと背中を撫でた。ぞくっと身をすくませた葵をやさしくなだめるように、彼の手は身体のラインを辿って着衣をゆっくりと脱がせていく。部屋の蛍光灯は消してあった。詠生のベッドサイドのランプの明かりの中で、二人は生まれたままの姿になった。
「今夜から、僕を葵の一番にしてほしい…」
葵の右手に何度も口づけながら、詠生は言った。
「一番だよ」
「僕のことだけ見ていて」
「ずっと見てる…」
ずっと見てる。
ずっと見てる。
何度も胸の中で繰り返した。何度も何度も。
葵の想いが、腕を、手を、指を伝って詠生に届いたのだろうか。
詠生が手をとったまま葵を引き寄せ、やわらかく抱きしめてきた。
「ありがとう。お父さんのことは、無理しなくていい。泣きたい時は泣いて、わめきたい時はわ

めけばいい。葵が俺をちゃんと見てくれている限り、俺は葵を信じてる」

「――――」

父のこと以外で泣けるなんて思わなかった。気がついたら、あふれ落ちる涙を詠生の指が拭ってくれていた。

「うん……」

ベッドに横たえられて、葵は詠生の肌に顔を埋めた。

血のつながった、たったひとりのいとこ。それでなくとも、きっと大好きになっただろう彼の身体に手を回した。こうやって抱きしめることのできる詠生の存在に、胸が痛くなる。

「愛してる…」

詠生が囁いた。

「うん…」

「葵も言って」

「…愛してるぜ、詠生」

小さく吹き出した二人は、やがて真剣に互いの熱を追い始めた。

詠生がいとおしげに葵の肌を愛撫する。そうすると、葵もそれを真似るように詠生の肌に手を這わすのだ。



「……ぁ…っ…」

生まれて初めて、他人の手に握られた。かーっと顔を赤らめた葵は、それでも同じ行為を返そうとして、詠生の手に止められた。

身体を走り抜けた強い快感に、すでに葵は抗うすべもなかった。

彼の手が、緩急をつけて葵の牡の証を愛撫する。堅く張り詰めたそれを、まだ勃たせようとするように。そうされると、身体の芯を訳のわからない奔流が渦巻いて、葵にはもう何も見えなくなってしまう。ただ熱い喘ぎを洩らし続けるだけだった。

「…詠…生ッ――」

いきなり、びくびく震えるものに軽く歯を立てられた。彼の唇によって愛撫されているのだと認識したとたん、パニックに陥った葵は逃げを打つ形で暴れた。

「逃げないで――！」

ビシッと言い放たれて葵は身体を硬直させた。自分の抵抗が彼を不快にさせてしまったのではないかと、とっさに不安になった。

「怖くないから……」

その囁きのなんと甘やかなことか…。

ふっと力の抜けた葵の足を再び抱え上げると、詠生は遠慮がちに身を割りこませた。もう一度、

唇を寄せるとこまやかな愛撫を送り始めた。
「…ぁ…っ……あッ……」
先端を舌でつつくようにしたかと思えば、深く口腔に含み歯で扱く。あまりの快感にただ酔いしれるだけの葵を、なおも煽るように強くやさしく刺激を与え続けるのだ。
「あっ……や…ッ……――」
無意識に詠生の髪に指を差し入れていた。すがるように髪を握りしめて、葵はただすさまじい快感の嵐に耐えるしかなかった。
「……も…もう…ッ――」
射精感は突然に襲ってきた。
詠生を制止する間もなかった。彼の口に含まれたまま、葵は絶頂を迎えていた。
放出したものを詠生が飲み下し、最後の一滴までも萎えたものから舐め取ってくれた。
己の痴態に半泣きになった葵は、詠生から顔を背けたままだった。こんなことになるんなら、最初からやらなきゃよかった。泣きながら己を呪いまくっていた。
だが、詠生はやらなきゃよかったなどとは微塵も思っていなかったらしい。いくぶん脱力した葵の身体を抱え直すと、ギョッとしている本人にもかまわず、もう一度愛撫の手を伸ばしてきた。
「おっ俺は、もういいからッ！」

一度いかせてもらっているのだ。今度は詠生の番だと思った。彼がしてくれたように、指でさすって、舌で扱いて、彼を気持ちよくいかせてあげなければ……。

その時、肌をゆっくりと辿っていた詠生の指が、葵の身体の奥の窄まりに触れた。かすめるだけの触れ合いに、葵はびくっと震えた。そうして、詠生が今切実に求めているものを肌で感じた。彼は、葵とひとつになりたがっているのだ。

今まで何ひとつ求めようとはせずに、葵を守り続けてくれた詠生…。

彼が望むのなら、それが何であっても叶えてやりたいと思う。

そっと目を閉じた。

詠生の与えてくれる愛撫にすべてを委ねるだけでいい。簡単なことだった。

そうして、彼の舌が彼の指が葵の全身をゆっくりと暴いていく。彼の昂りが葵の肌にこすれるたびに、葵の中心も誘われるかのように熱くなった。

じわじわと肌の内側から浸食される。欲情が葵の全身を侵していく。詠生への愛情にあふれたそれは、なんて熱いのだろうか。葵は、自分が求められるのと同じくらい、強く詠生を求めている自分を認識した。

葵の秘部をやさしくほぐしていた詠生の指が抜かれた。深い息をついた葵は、次にくるだろう衝撃を待った。

待つことが、こんなにエキサイティングなものだなんて。
葵は初めて知った。

＊＊＊

（もう寝てんじゃねえのか？）
一〇六号室のドアの前に立って、キッドはそう考えていた。
もう皆とっくに寝静まってる時間に、わざわざ寒い廊下を一年棟までやってきて、寝ているであろう人間を叩き起こさなきゃならないなんて。なんで俺が。
半ばやけっぱちなまま、キッドはドア板を軽くノックした。
案の定返事はない。詠生か葵が起きてくるまで、何度ノックを続ければいいんだ？　そりゃ、どっちかが起きてくるまでさ。キッドは自問自答を繰り返した。
キッドのノックは三回。それを十セットばかり繰り返したところで、ドアの向こうからやっと応答があった。
「誰だ？」
詠生だった。その声は怒っていると言ってもいいくらい、たいそう厳しかった。

「俺だ。キッドだ」
「なんの用です。いったい今が何時だか、わかってるんですか」
言われると思っていたことをぶつけられて、キッドは思わずくさってしまいそうになる。
「用がなきゃこねえよ。悪いが、葵を起こしてくれ」
「葵は今手が離せない」
「なんだよ、それ」
詠生はドアを開けてやろうという気すらないようだ。寒い廊下に馬鹿みたいに立たされて、キッドはつくづく自分の貧乏くじを呪った。
「なんの用か知りませんが、明日にしてください」
「葵の用事だ。お前に聞いてんじゃない。とっとと葵を出せ」
「手が離せないと言ってる」
(なんなんだよ〜〜〜〜!)
詠生の強情さもだが、彼の言ってることにも、キッドは叫び出したくなった。
「いいから、葵を出せ!」
しばらく返事は返ってこなかった。葵を起こしているのならいいが。これでまた詠生が出てきて、『葵は手が離せない』なんてほざこうものなら、きっと雄叫びをあげてドアをぶち破ってし

まうことだろう。
「キッド——？」
幸いにもドアの向こうから聞こえたのは葵の声だった。寝起きなのか、声がひどく掠れている。
とりあえずキッドはほっとした。
「葵、寝てたところごめんな。ちょっと大事な用件あってさ、ちょっくらサロンまで足運んでくれないか？」
「……」
「葵？　ここ、開けてくれよ」
キッドの哀願に、困ったような声で葵が応える。
「ごめん…。今取り込んでて……。ちょっと行けないよ…」
（なんなんだよ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！）
詠生にしろ、葵にしろ、二人ともどうなってんだ。キッドはあわてふためいた。
「俺がわざわざ呼びにきたのに、これないって言うのか。小野さんが呼んでんだぞ。葵のよろこぶもんが、サロンで待ってるっていうのに」
「ごめん…。でも、今本当にだめなんだ」
「葵の親父さんがきててもか？」

「俺の親父がきててもだよ」
葵の返事はきっぱりしていた。
そうか。
キッドはなんとなく納得した。葵もとうとうあの親父に愛想をつかしたということか。
口元に笑みを浮かべると、キッドはドアの向こうに声をかけた。
「わかった。睡眠の邪魔をして悪かった。葵の意志を汲んで、ここは引き下がるぜ。何、お前の主張はちゃんと伝えておいてやるからさ。まあ、ゆっくりねんねしな」
「わざわざきてくれたのに、ごめんね」
「いいってことよ。夜中に悪かったな。おやすみ」
「おやすみなさい」
キッドは飛び立つようにサロンへと歩を向けた。
これで、晴れて一発言ってやれるお墨付きを葵からもらったようなものだった。

「これないって？」
小野がすっ頓狂な声をあげた。

「へー。あのファザコン気味の葵がねえ……」
羽仁も妙に感心している。
サロンに戻ったキッドが、意気揚々と葵とのやりとりを報告した時のことだ。
そんな一同の中で、安楽椅子におさまった潔だけがあっけにとられていた。
「俺の率直な感想、ついでに言わせてもらっていいですか？」
キッドが潔に尋ねた。潔が眉根を寄せてキッドを見た。
「ざまーみろ、このクソ親父」
「キッド！」
小野の叱責が飛んだが、キッドは素知らぬ顔でマグカップに注がれたココアを飲んでいる。
「まあね…、キッドの感想もわからん訳じゃない。第一、この父親のおかげで、どんなにか葵が小さな胸を痛め続けたか……」
そう言って、羽仁は腕組みしながらしばし回想にふけった。
「――これからどうしますか？」
羽仁とキッドにはもうかまってられない。小野は潔に尋ねた。潔は葵に会いにきたのだから、その葵との面会が果たされない今、彼は次にはどういう行動に出るのか……。
しばらく考えていた潔は、やがて顔を上げると小野たち三人の顔を見てニッと笑った。

「せっかくメンツが揃ってる。カードやろうぜ」

明かりを絞った深夜のサロン内では、学園部外者約一名を含む四人で密かにブリッジが行われていた。ポーカーにしようというキッドの意見を却下して、ブリッジを断固主張したのは潔だった。人数的にもブリッジが妥当だとの小野の判断で、ゲームはやっと始まったのだ。

「そうすると、あなたは別に葵を捨てた訳じゃないんですね？」

山札をめくりながら小野が訊いた。ゲームもそろそろ中盤に差しかかっていた。

「あたり前だ。なんで俺が可愛い息子を捨てなきゃならない」

「嘘の借金話に続いて、当のあなたが行方不明になったりするから、葵がそう思ったとしても仕方ないでしょう」

「借金話はともかく、帝のジジイがよろこぶようなことを俺がするか。あのジジイには、金だけ出してもらう。可愛い孫のためになる金をね。それが奴にはうれしいことらしい。ふん、せいぜい金を使ってもらうだけさ。金は出しても、口は出さない。これが奴との約束だ」

「口は出さなくても、もう一人の孫を出してるよ。詠生っていう」

キッドが言った。もう寝るだの、ポーカーがいいだの文句たれていたキッドだが、ゲームが始

まると結構熱くなっている。
「そうだ。詠生が口を出すのはいいのか？　もしかしたら手まで出してるかもしれん――」
羽仁がとんでもないことを言い出した。
テーブルの下で小野が羽仁の向こう脛を蹴り飛ばし、ほぼ同時にキッドのムチのような平手も羽仁の脳天にヒットした。
「いってー…」
テーブルに突っ伏して呻く羽仁をそのままに、小野は潔に向き直った。
「差し支えなければ教えてくれませんか…。いえ、袖振り合うも他生の縁というじゃないですか。僕たちは葵の友人で、彼の家庭の事情も少しは承知している。父親のあなたとも、こうやってカードをするぐらいの親しさはある。無理にとは言いませんが、僕はぜひ聞いてみたい。あなたが、なぜそこまで帝壮一朗と対立しなければならないのか――」
「――」
「もちろん、葵には絶対に洩らさないとお約束します」
そう言って、羽仁とキッドを見た。キッドが頷き、羽仁もようよう顔を上げて了解の意を表した。
潔はカードを手に、一人うさん臭げに一同を見回していた。

「お前、いったいいくつだ？　並みのガキらしくないもの言いするじゃないか」
「恐れ入ります。これでも十八のヤングのつもりなんですが…」
小野が苦笑いした。羽仁とキッドは肩を震わせて爆笑をこらえていた。
「まあいい。俺の息子ももうガキって年頃でもない。知られたって、今さらあいつがどうこうなるという訳じゃないしな」
「やっぱり、葵のお母さんのことなのかなぁ？」
キッドの問いに、潔は首を振った。
「それは、トドメの一撃ってやつだ。それ以前から、あのジジイには恨みがあった…」
そう言う潔からの、ほとばしる感情の発露とやらを期待していた一同を裏切って、彼は視線を手元に落とし、小さくため息をついてみせた。彼らしくもない物憂げな仕種だった。
「時たま、なんでこうなったんだろうって思う時がある。あの夏、俺の父が死ななければ――。俺が短気を起こして家を出なければ――。そんな、してもしょうがない仮定ばかりだ。だが、少なくとも、今よりはまともな人生を送れたかもしれない。祝福された結婚をし、子供を育て、世間並みの成功をおさめる。平凡だが穏やかな幸せ…」
「そうおっしゃるところを見ると、そうじゃなかったんですか」
潔はそれには答えなかったが、彼の表情には何かを懐かしむような色が浮かんでいた。

「この学校に帰ってくると、落ち着くよ。昔は牢獄に押し込められているようで、文句ばかり言ってたが…」
「うちの父もよくそう言ってました」
小野がそう言うと、潔は微笑んだ。
カードテーブルを囲む三人はドキッとした。彼が笑うと、葵によく似ていた。
「もし、願い事がひとつだけ叶うのなら、俺はその願いごとをもうすでに決めているんだ。もう一度時間を巻き戻して、この学校の生徒に戻るんだ。父の死が回避できない運命だとしても、絶対に負けない。簡単に家を捨てたりしない。ジジイともよく話し合う。二度と後悔しない人生を送るために、でき得る限りの努力をすると」
「……」
「まぁ…夢だ。現実は、葵の母親の死の責任を、帝のジジイといまだになすりつけ合ってるよ。ジジイが俺を殺してやりたいくらい憎んでいるように、俺も死ぬまで奴を憎み続けるだろう。なぜ奴と対立するかだって？　ジジイが葵の母親を間接的に殺したからじゃないか」
サロンはしんと静まり返っていた。ゲームは完全に中断し、その場の空気は潔によって完全に支配されていた。
「壇ノ浦家の総領息子との結婚は許せても、文無しのろくでなしには娘はくれてやらないとあい

つは言ったんだ。それだけじゃない。娘を取り戻すために、あらゆる妨害を仕かけてきたんだ。俺の就職の口をことごとくつぶして、親子三人をもう一歩で無理心中の淵にまで追い込んでくれたよ。『金の切れ目が縁の切れ目』、何不自由ないお嬢さま育ちの娘のことだ。生活に困ればそのうち泣いて家に帰ってくると踏んだんだろう。ふん、おあいにくさまだ」

「――――」

「もうわかっただろう？　帝壮一朗は娘を取り戻そうとして、結果的にその娘を殺したんだ。奴の金庫には札束がうなるほどあったというのに、奴の娘は病に侵されてもまともな治療すら受けることができなかった。奴の招いたどうしようもない貧しさに…殺されたんだ」

カードを握りしめていた潔の手がぶるぶると震えていた。

「葵にそんな思いは絶対にさせない。みじめな思いはさせない。誰がなんと言おうが、あの子のためなら、俺は喜んで悪役になってやる。利用できるものは、利用する。それが帝のジジイであってもだ。どうせ俺はろくでなしだ。帝に言われなくたってわかってる。今さら何を言われようが、俺は全然平気だね。そうして時がくれば、いっさいがっさいを墓場まで持っていくんだ。憎しみも思い出も。それでいいと思わないか？」

「だから…母親のことを何ひとつ葵に教えなかったんですね…」

小野がようやく口を開いた。

「あたり前だ。まっさらな子供に、わざわざ憎しみを教え込みたいという親がいるか。母親のことを口にすれば、俺は帝を非難してしまうだろう。自分の中の憎しみをわが子に見せてしまうだろう。それだけはできなかった。これは、俺と帝との間のことだ。葵には関係ない」

小野は頷いた。

「――確かに。あなたは憎しみに凝り固まったろくでなしかもしれない。だが、子供は親の鏡だ。葵を見ていればわかります。少なくとも、あなたは父親として立派だった」

潔は手の中のカードを覗くと、次に三人を見やった。

苛立たしげにテーブル中央の山札を示すと言った。

「次は誰だ？　さっさとめくれ」

6

目覚し時計のアラームとともに、詠生の胸の中で目覚めた。

朝のひんやりとした空気も、互いの肌がもたらす温もりにはかなわない。葵のベッドの中で、二人仲よく身体を寄せ合って、夢と現の間を行き来する。できれば、このままもう一度、二人だけの世界へと戻っていってしまいたいほどだ。

「葵……」

気だるげに身体を起こしたのは詠生だった。これから洗面をすませて、食堂へと朝食を取りに出かけなければならない。始業の時間はすぐやってくる。ぐずぐずしている時間はないのだ。

にもかかわらず、葵はまだうっとりと目を閉じている。毛布にくるまったまま、さらに甘やかな惰眠を貪ろうかというように。

そんな葵に、思わず詠生は微笑みを浮かべた。

「――大丈夫か？　起きれそう…？」

「うん…」

身体を気遣ってくれる詠生に、葵は微かに頷いてみせた。

詠生は半身を起こした姿勢のまま、肩口に何もかけずに葵を見下ろしている。そんな彼の視線を感じながら、葵は昨夜の幸福な夢を辿っていた。

詠生と寝てしまった。

親友で、たったひとりのいとこでもある彼と——セックスしてしまった。

それを思い出すだけで、胸の奥が熱くなってしまう。

後悔なんか、これっぽっちもしていない。どんな形でにしろ、彼にまた一歩近づくことができた。父親以外の誰かを身近に知り、その誰かを愛することを知った。そんな葵にとって、詠生とのセックスは生まれて初めて経験する心の歓びでもあった。

「起きないと、遅刻するよ」

詠生の手が葵の髪を撫で、それから離れた。彼はベッドから降りると、身仕度を始めた。

「ねえ、詠生」

もぞもぞと毛布を引っ張り上げながら、葵は身を起こした。

「ん？」

「俺たち、こうやって同室にならなかったら、今頃どうしてたかな？」

同室にならなければ、こんなふうな二人にはならなかったかもしれない。それを思うと、こうしていることが、何かの運命のようにも葵には思えるのだ。

「心配無用だよ」
葵の疑問に、詠生はこともなげに答えた。
「何が？」
「同室にならなかったら――なんて、そんなことは絶対にありえないことだから、考える必要はないんだ」
「どういう意味だよ？」
「たとえ天地がひっくり返ろうと、絶対に同室になろうと僕が決めてたからだよ。あれ、もしかして葵、僕たちがたまたま同室になったとでも思ってた？」
ベッドから降りて、シャツに腕を通していた葵はびっくり顔で詠生を見た。
「だって…部屋割りは舎監が決めたんだろ…」
「何のために僕が一番乗りで入寮したと思ってるんだ。部屋割り表をね、舎監の目を盗んで書き換えるためじゃないか」
「部屋割り表を…勝手に…書き換えた訳？」
「当然だな」
しゃあしゃあと言ってのける詠生に、葵は開いた口が塞がらなかった。
「最初っから、葵のためならなんでもできると言ってたはずだけど？」

そう言って詠生が笑った。
なるほど…、と葵は密かにひとりごちる。
運命とは、自分の手で書き換えるものだったんだ。
「真面目な顔して、意外と悪党だったんだね。詠生って」
「なんとでも。悪党だということがわかって、もう嫌になってしまう？」
澄ました顔をして詠生が訊いてくる。
昨日の今日で、今さら嫌いになどなれない葵を知っていてそんな意地悪を言うのだ。葵のことに関しては、いつでもギリギリ切羽詰まっていた詠生にしては、えらい余裕だ。
葵も負けてはいない。にっこりと笑ってみせた。
「聖人じゃないってわかって安心した。悪い奴のほうが、魅力的だっていうし」

朝食を取りにいった食堂では、キッドを始め小野や羽仁の姿はなかった。
昨夜遅くに呼び出しにきてくれたキッドのことは、多少気にはなっていた。しかし、昨夜の状況が状況だっただけに、呼び出しに応じる訳にもいかなかったのだ。
結局、食堂では会えずじまいで授業に入り、引っかかりを残したままの葵は、放課後詠生と連

れ立ってサロンに足を向けてみた。
「小野さーん…」
室内はカーテンが引かれたまま、薄暗い。いつもきちんと整っているはずのサロンだが、今日ばかりはお茶のカップやらカードやらが中央のカードテーブルの上に放ったらかし状態になっている。
「まったく――誰だよ、カードやったまま片付けもしないで…」
ぶつぶつ文句を言いながら、詠生と二人で後片付けをした。椅子が四つ、テーブルにセッティングされたままだ。いったいどういうメンツでカードが行われたのやら…。
一通り整理をつけて、勤労後の一杯とばかりに詠生とお茶を楽しんでいると、ようやく小野が顔を見せた。
「あれ、きてたんだね」
「小野さん、部屋ぐちゃぐちゃでしたよ。誰？　カードやったの」
葵が口をとがらせて言うと、部屋を見回した小野が頭をかいた。
「ごめん、ごめん。片付けてくれたんだね。いやー、昨夜のゲーム、なかなか白熱してしまって」
そう言った小野は、なるほどどことなく寝不足顔だ。いつも冷静沈着な彼だからこそ、いった

んハマり込むと大変らしい。やるときゃ、とことんまでイッちゃう人なのだといつかキッドに聞いたことがあった。

「キッドと羽仁ももうすぐくるよ。羽仁はほんっとにワルイ奴だな。午前中ずっと保健室で睡眠補給してた。――ったく、あいつは」

「そんなになるまでカードに熱中するなんて、めずらしいですね」

はっきり言って、サロン内ではカードは流行っていない。寮の他の三つの娯楽室では、今ポーカーが大流行しているらしいが、このサロンだけはまるっきり別世界だった。

「葵の親父さんが強いのなんのって。ついこっちもムキになっちゃってね」

「――え？」

葵の親父さん？

聞き違いだろうか。なんだか妙な胸騒ぎがした。それは詠生も同じらしい。不安げに互いの顔を見合わせたところで、ドアを大きく開けてキッドと羽仁がぞろぞろと入ってきた。

「やぁ！　葵のとーちゃんって、なっかなかやるなぁ。あんまり強いんで、イカサマやってんじゃねーかって、こっちも一時はマジで疑っちまったよ」

羽仁がそんなキッドの頭を指先で思いきり突いた。

「だからって父兄にケンカ売る奴がいるかよ。あー葵、俺たちごく平和的にやってたから。心配

しなくても、大丈夫！」
「……――――」
唐突な眩暈に襲われた葵は、そのままふ――っ…と意識が遠のいていきそうになった。後ろにひっくり返りそうになって、あわてて詠生が抱き止めてくれた。
「大丈夫か…？」
「うん……」
詠生がそっと椅子に座らせてくれた。キッドもびっくりして、葵の側に駆け寄った。
「葵ッ！　大丈夫か――」
「キッド……」
呻くように葵が呼んだ。
「なんだッ？」
「夜、急に呼びにきたのって…」
「そりゃ、葵のとーちゃんがきたからさ…」
「……」
葵はがっくり肩を落とした。と同時に顔を両手で覆った。
潔が、この学校にきていた――。

昨夜、葵に会いにきてくれていた！

キッドがそう言ったのを葵は覚えていなかった。呼びにきてくれていたキッドを追い返すことで頭がいっぱいだった。彼が言うことなど、最初っから頭に入っていなかったのだ。

詠生とセックスをしている真っ最中だったから――！

「そうならそうと、なんでもっとはっきりと言わなかったんだ！」

いきり立ってキッドに食ってかかっていったのは詠生だった。

「言ったよ。言っただろ、な？　葵――」

「……」

キッドも、そろそろ今自分が置かれている状況を把握し始めたようだ。必死に同意を求めようとするのだが、葵は返事を返せない。あふれ出てしまった涙を隠すだけで精いっぱいだった。そんな葵の姿に、サロンにいた全員はすぐに気づいたようだった。

「誰だ、葵を泣かしたのは！」

キッドが怒鳴って、その場の全員をきつく睨めつけた。

「お前だ」

羽仁が無情な一発を食らわした。キッドにしてみたら、強烈なカウンターパンチだったのだろう。へなへなと葵の足元にしゃがみ込んでしまった。

「俺が……葵を泣かすようなこと、するわけないだろう…」
それこそ泣き出しそうに呟いた。
「そうだよ。泣いてるなんて、そんな、ひどいな…」
葵は顔を上げた。涙の跡を素早く拭ってキッドに微笑みかけた。
誰のせいでもない。
そう——あの時、潔自身が呼びにやってきたとしても、葵は出ていけはしなかっただろう。どんなにか待ち望んだ父親であったとしても。
呼び出しに応じてしまったら、葵は詠生を裏切ってしまうことになる。
『僕を葵の一番にして…』と囁いた詠生に、『一番だよ』と応えたのは、葵自身だったのだ。その詠生をひとりベッドに残して出ていけやしない。
「葵……」
いつもとびきり元気のいいキッドがしょぼくれていた。
もはや慰めてるのがどっちかもわからなかったが、キッドがぼそぼそと言い訳するのを葵は笑って聞いてやった。羽仁が横から余計な茶々を入れ、キッドがそれに過剰反応するのをなだめたりしているうちに、なんだか無性におかしくなって大声で笑い出したくなった。
潔がなんだ。

父親がなんだ。
親がなくとも、子は育つというではないか。
親がなくても、こんないい友だちがいるではないか。
詠生だっていてくれる。
泣くことなどないのだ。かつてそう思い込んでいたように、葵は一人ぼっちではない。
葵はそのことにもう気がついてしまったのだから。

サロンの外の廊下では、詠生と小野が声を潜めて会話を交わしていた。
「本当に葵の父親がやってきたんですか？」
まずそう尋ねたのが詠生だった。サロンでわぁわぁやってる他三人を置いといて、小野を部屋の外に連れ出したのも彼だ。
「知らなかったのか？　キッドを呼びにやらせたんだが…」
「う…ん。そこのところがなんとも曖昧で…。何しろ、遅い時間だったでしょう」
その件に関しては、場合が場合だっただけに詠生の歯切れも悪い。
キッドの言い方の悪さももちろんあるだろうが、はなから彼を追い返すような態度を取ったこ

とを、今さらながら詠生は悔やんでいた。
「おかしいと思ったんだ。父親がやってきたのに、葵がこないなんてな…」
腕組みをして考え込んでいた小野が小さく舌打ちした。
「それで、父親は何をしに…？」
「何も。可愛いじゃないか、あの父親もどうやら息子恋しさに学校に忍び込んだということだ」
「忍び込んだ？」
「秘技《樋登り》というヤツだな。日誌にあっただろう。彼が昔よくやったという、アレだよ」
「ははあ…」
噂に聞く通りの無鉄砲な男らしい。いくつ歳をくっても、彼の内面はいまだ少年のままということか。
「そういう訳で葵に振られてしまって、潔氏、突然手持ち無沙汰になってしまってね。皆でブリッジをやろうということになったんだ」
「考えてみたら、すごいメンツですよね…」
キッドに羽仁に小野。とどめに葵の父親。縁もゆかりもない四人が集ってカードに興じる…。
思わず顔を見合わせた詠生と小野は、ハハハ…と乾いた笑い声をあげた。
「まあ…白熱したゲームの合間にいろんな話を聞いたよ。…ところで、帝のお祖父さんは、これ

から葵をどうするつもりなんだ？」
「どうするも、ミカドグループのいっさいがっさいを、葵に譲るつもりらしいですよ。いくら祖父が強欲ジジイとはいえ、金はあの世までは持っていけないですからね」
「君が帝の跡を継ぐわけじゃないんだな？」
詠生は首を振った。
「あんな祖父でも、葵に、死んだ娘に、何かしてやりたい気持ちでいっぱいなんじゃないですかね。二人とも彼の血を引いていながら、ずっと不遇のままでいましたから。それに比べて、僕は生まれた時からなんでも持っていた。実際、そんな人間などどこにもいる訳ないんですけどね。少なくとも祖父は、僕のことをそう見ている。だから、もうひとりの孫である葵が手に入るのならば、僕を後継ぎにする必要も特にないんですよ」
「ずいぶんと利己的な爺さんに思えるが…」
小野が唸った。
「そういう人間じゃないと、あそこまでグループを大きくすることはできなかったでしょう。善人に、金儲けは向いてませんからね」
「葵は素直に後継ぎにおさまるだろうか？」
「どうでしょうか…」

詠生は肩をすくめた。
帝の跡を継ぐということは、金や地位を手に入れる一方、自分自身をがんじがらめに縛られるということに他ならない。それが帝の祖父にできる精一杯の愛情なのだとしても、『責任』という名の重い枷に一生縛りつけられることになるのは変わりない。
だが、帝が葵を後継者に据えたいと切望するのなら、それはそれでいいと詠生は思っていた。どちらにしても、葵の選びたい道を尊重させてやりたかった。彼が望むことなら、叶えてやりたい。決して、周囲の思惑で彼を動かすようなことだけはさせたくない。
「……僕はね、昨夜潔氏に会って、話をして、彼が息子をこの学校に入れた訳を、やっと理解できたような気がするんだ」
呟いた小野の言葉に、詠生は顔を上げた。
「葵は、潔氏自身そのものなんだよ。彼は昨夜言っていた。もし願いごとがひとつだけ叶うのなら、もう一度時間を巻き戻してここの生徒に戻りたい。もう一度、後悔しない人生をやり直したいんだと…。葵は、そんな彼のもうひとりの自分でもあるんだ」
「もうひとりの自分…」
詠生はくり返した。
「そして、驚くべきことだが、潔氏はもうひとりの自分を信じているらしい。乱暴な手段でこの

学校へ放り込んだ息子が、何ものにも負けずにまっすぐ道を歩んでくれるとね。かつて自分が踏んだ苦い後悔への道へと足を踏み外すことはないと、心から信じきっている。いやはや…、見上げた父親だ。誰がなんと言おうとかまわないが、僕は彼を心から尊敬するね」

「小野さんたちが、いったい何を話したのかは知りませんが…」

「君たちはまだ知らなくていいと思うよ。苦い過去のことは、いつか潔氏が自分から話してくれるだろう」

「……」

小野がぽんと詠生の肩を叩いた。

「だが、潔氏と帝の対立も、母親の死も、君たちの未来に影を落とすものではない。君たちはまだこれからなんだ。如何なるものにもとらわれる必要はない。君と葵は、自分らしく前を向いていってくれればいいんだ」

「小野さん……」

世話好きの寮長殿は、詠生の顔を見てニッと笑った。

「潔氏を見ていたら、妙な話、僕も自分の子供が欲しくなってしまった。他人に影響を受けたことなんて、考えてみたら生まれて初めてだよ」

サロンでは、残されていた三人が和気あいあいとお茶していた。
さっきまでのヤバい雰囲気はどこへやら、葵を始め、キッドも羽仁もいつもの明るさを取り戻していた。
「あ、詠生。俺、これから駅へ行ってみようと思うんだけど」
部屋に帰ってきた詠生をさっそく見つけて、葵は言った。
「駅？　どうして」
「うん…、散歩がてら」
言い難そうに口ごもる葵の横で、キッドが口を挟んだ。
「パパが駅から帰っていったから、行ってみたいんだとよ」
詠生が見やると、葵はちょっとばかりばつの悪い顔をした。
「いいよ。一緒に行こう」
詠生の明るい声に、葵はほっとしたように立ち上がった。
少し肌寒かったが制服の上着だけを引っかけた。寮の外に出ると、風の冷たさをものともせずに、校庭ではサッカーに興じる生徒たちが走り回っていた。
校門を抜けたところで、詠生が大きく振り返った。

大きな校門の先には、見慣れた石造りの校舎があった。まだやっと半年を過ごしたばかりの小さな世界。だが、いろんなことがあったと思う。

「ここで、写真を撮ったんだね。葵と、お父さんとお母さん…。卒業して何年経っていても、どんな生徒であっても、やっぱり母校には戻ってくるものなんだな」

「うん……」

葵は黙って、ただ校門から望む校舎を仰ぎ見ていた。

昔、まだ赤ん坊の頃、母に抱かれてこの前に立っていた時のことを思い返そうとするかのように。

町へと通じる一本道をずっと辿っていけば、駅につきあたることができる。小高い丘の上にある学校から続くだらだら坂を下りながら、葵は口を開いた。

「…母校に戻ってくるといえばね。父さん、またきてくれるんだって」

「え?」

「いつになるかわからないけど、またこられる時にくるんだって。俺に会いに」

多少緊張しながら、葵はキッドたちから聞いたことを詠生に伝えようとした。潔は、学校を去る時に、そうはっきりと言ったというのだ。

「そう…。よかった」

ほっとした安堵感が、詠生のその面に浮かび上がる。自分が葵と父親との再会を阻んでしまったのではないかと思っていたのだろう。もう二度と父親がこられないなんてことになったら、それこそどうしていいかわからない。そんな詠生の感情がわかるだけに、葵は胸の奥がチクッとする。

「詠生…、怒っていいんだよ？」

反応を窺うように葵は言った。

「怒る？　葵が、父親のことばかり言うって？　そんな気にならないな。第一、僕へ向けてくれる気持ちとは別ものだ」

「余裕だね？」

「余裕だよ」

顔を見合わせて笑った。

身体をつなげ合うということは、こんなにも相手を信じるだけの余裕を生み出してくれるのだろうか。

丘を下りきると、あとは刈取り後の田んぼを突っきる通りを行くことになる。

どこまでも続く田んぼを過ぎて、川を渡れば町はもうすぐだ。のどかな田園の風景は、例によって人っ子ひとりいない。時折、鳥のさえずりがどこからか響いてくるだけで、平和すぎると感

じるほど辺りは静寂に包まれていた。
「もし……、帝の祖父さんが葵を自分の跡取りにしたいって言ったら…、葵はどうする？」
突然、しじまを破るかのように、詠生がそう尋ねてきた。
それが、先ほど小野が向けてきた問いだということを葵は知らない。詠生はその問いを、改めて葵自身に向けてきたのだ。
葵をミカドグループの後継者にする。
祖父はそうするために全力をつくすだろう。そして、それはそんなに遠い先のことではないのだ。
「やだよ」
葵はにべもなく答えた。
「ミカドグループの総帥だよ？　金も、地位も、欲しいものも、何もかもその手に入れられるんだぞ？」
「じゃあ、詠生がそうしたら。詠生だって、帝の孫なんだから」
軽く言ってのける。
一瞬、葵が帝壮一朗のすごさをわかっていないんじゃないかと詠生は思った。ミカドグループの総資産が、バブルがはじけた今でもいったいどのくらいものなのか、まったく理解できていな

いのだと思った。
「まあ、そう簡単に言わないで、よく考えた方がいいと思うけどな。これは葵の一生を左右するような重大な選択なんだから。今すぐ決める必要もない。時間はまだまだある。これからゆっくりと考えて――」
「金なんていらない。そんなもの、誰からでも譲り受けるもんじゃない。譲り受けたが最後、責任の重さに身動き取れなくなってしまう。俺も父さんの子だからさ、どこへ行っても自由で、好き勝手なことしてる方が好きなんだ」
「葵……」
「でも、もし詠生がその道を選ぶんなら、俺は協力する。詠生のためにできることは、なんでもする。約束するよ」
葵はポケットを探ると、一個の金色の時計を取り出した。高校入学前に、潔から入学祝いだと贈られた古い懐中時計だ。
それを詠生の前にかざして見せた。
遮るもののない外の陽を浴びて、それはきらきら光った。
「詠生、これ初めて見るよね。あんまりダサいもんで、ずっと机の中に隠したまんまだったんだけど、実はこれ父さんから譲り受けたものなんだ。父さんも、父親から譲り受けたんだってさ。



人間、上を見たらキリがないけどさ、俺はもうこれだけで充分なくらいのものを、父さんからもらっていると思うんだ」

「……」

「他にはもう何もいらない」

葵は手の中にしっかりと時計を握り込んだ。

「父さんのことも……三年経って借金返してくると約束した。父さんはきっと、過去という名の借金をきれいにして、帰ってくるんだと思ってるよ。そう信じてやるのが、息子のつとめじゃないかな」

「息子の、つとめか……」

詠生は小さく呟いた。

やはり、この親子の絆は深く断ちがたい。

壇ノ浦潔は、これから先も詠生にとって油断のならない強敵になることだろう。そう切実に思い、深く肝に命じた。

駅前の町に入って、ようやく人の姿が見られるようになった。二人とも、少しほっとした。

香陵での寮生活を送っていると、自分たちが世捨て人になったような気分になってしまう時がある。そんな時、こんなふうに普通に生活する人たちを目にすることができて、ほっと安心する

のだ。
ぶらぶら商店街を覗き見た。欲しいものはなんでも調う寮で生活していると、こうやって外部との接触も少なくなる一方なので、なんだか妙に新鮮だった。
「もっと、寮の外に出てみてもいいかもしれないね」
葵が言った。詠生も頷いた。
「寮に閉じこもってばかりいたってだめだな。誰かさんみたいに、脱走しては、樋を登って帰ってくるくらいの度胸ないと……」
「それって、イヤミ？」
葵が口を尖らせて詠生を見た。
「イヤミに聞こえた？」
「嘘だよ」
詠生が真っ正面に受け取ろうとするから、葵もそれ以上言えない。何か言いたくて、でも言えなくて、やみくもに詠生の手を摑んだら、彼が指を絡ませてきた。
往来のお天道様の下で、手をつないでいるなんて。
赤くなりながらも、まんざらじゃなかった。どうせ誰も見ていない。詠生と肌で触れ合う感触が、昨夜のつながりの熱さを葵に思い起こさせた。

その手を離さないまま小さな駅舎に入った。
「たぶん…朝一番の列車に乗ったんだろうね」
掲示してある時刻表を詠生と共に一心に見つめた。朝方迎えにきたタクシーに乗って、潔は駅へと向かったと葵は聞いてきたのだ。
「お父さん、どこへ帰ったのか聞いてる?」
詠生が時刻表から視線を外した。
「キッドが尋ねてくれたらしいけど、『遠いところ』だってさ…」
葵は笑って答えた。
どこへ父親が行ってしまおうが、そんなことはもう大した問題ではないのだ。どんな距離も、隔たりも、今の葵には感じることができない。
詠生が、握っていた手をさらに強く握り返した。
そうやって、やってきたディーゼルカーが駅に止まり、再び発車してゆくのを見送ってから、二人は寮に戻るべく駅舎を出た。
変わらない静かな駅前のたたずまいに、葵は思い返していた。春浅いあの日、潔と別れて初めてここにやってきたことを。
あの頃は、まだ詠生の存在も知らなかった。たくさんの友人たちに恵まれることも知らなかっ

た。借金に縛りつけられたこの身を呪いながら、悲壮な決意で駅に降り立ったのを憶えている。
まだ、葵が何も知らなかった、あの春の日のこと――。
「寮に、帰ろうか…」
葵の呟きに、詠生が頷いた。
一歩足を踏み出しかけたところにすごいスピードでタクシーが滑り込んできた。いつぞやの若い運転手が操るタクシーだった。
「香陵の生徒さんは、俺っちのカモ…いや、お客さんだ。今日の制服もイカスぜ。さあさあ、乗った、乗った！」
トレードマークの帽子をくいと上げて、威勢のいい声を張りあげた。
「はあ…でも…」
金を持ってない…と言いかけたのに、
「いいから、いいから！　今朝も父兄さんひとりで、学校までの往復稼がせてもらってねぇ…。夜中に送っていって、朝方迎車しただけで、はい五万円！　さすが香陵だ、俺は感動したねぇ。もう香陵しかないっっっ――と心の底から思ったね」
葵と詠生は顔を見合わせた。
夜中送って、朝方迎えにいった父兄となれば、思いあたるのはただひとりしかない。

「あのー…、たぶんそれ、俺の父だと思うんですが。その…お世話になりまして、すみません…」

ぺこりと頭を下げた葵に、運転手は目を白黒させた。

「何、あんたのお父さん！　それはそれは…。そういや、あんた似てるよ。あの二枚目の、若いパパさんだろ？　息子が香陵にいるって言うんでびっくりしたよ。あんた、そりゃー弟の間違いじゃないのかってさ」

「…母親似だとも言われるんですが」

葵はなんだかくすぐったい。父親を知っている人間と、父親のことを話すのが、なんだか妙にうれしかった。

「いーや、あんたは父親似だよ。笑ってる顔なんか、瓜二つだね。親子が似ているのってさー、微笑ましいもんだよねえ…」

「実をいうと、父親も香陵の卒業生なんです」

詠生が言った。

「か――っ。息子がニューボーイで、親父がオールドボーイってか。いいねえ…。親子っていいもんだねえ…。車の中では、息子の自慢話ばっかだったよ。俺も眠かったもんで、終いには『あんた、黙んなさい』って言っちまったけど、もっと聞いてやりゃよかった。ほんと、いい親父さ

んだったよ。たくさんたくさん親孝行してやんなきゃ…」
「はい…」
ふいに浮かんだ涙の意味はわからなかった。ただ、その涙を詠生に見られたくなかった。顔を逸らしたのに、逆に手を引かれた。
正面に見上げた詠生の瞳が、やさしく微笑っていた。葵の髪をくしゃくしゃにかき回した。
「さ、早く乗んな、あんたら」
運転手が急かす。見ると、駅前ロータリーに別のタクシーが入ってきていた。
「あの…、でも、今金持っていないんです」
「いい、いい！　あんたの父さんがその分くらいは払ってるから。ほら、そっちの兄ちゃんも…」
詠生を窺うと、彼は仕方ないというように肩をすくめてみせた。
無理矢理乗せられて、タクシーは急発進した。
「本っ当に、お金持ってないんですよ？」
重ねて言った葵に、運転手は手を振った。
「いいってことよ！　その代わり、親父さんまた学校に寄ることがあったら、俺の車に乗ってくれるよう、あんたからよく言っといてよ」

タダでは転ばない運転手に、葵と詠生は笑いをこらえるので精いっぱいだった。
帰ろう。
皆が待つ学校へ。
父の想いと、これからの自分たちの未来が待つ学校へと。
車は一路、田んぼを突っきる一本道へと向かう。
「やってください。俺たちの、学校へ――」

あとがき

こんにちは、高坂結城です。

この度は、『ニューボーイ・オールドボーイ』をお手に取ってくだって、本当にありがとうございます。

やっと形になることができて、ほっと一息♡

なにせ、一冊まるまる長編一本。軽く引き受けたものの、プロット立てる段階で「こりゃー無謀な挑戦だったわ、ハッハッハッ…」と気がついてしまいまして、多少青くなったりしたわけです。書き始めると長くなる傾向の私ですが、最初から長編となると勝手が違って、いろいろと手間どってしまいました。

それでも、しっかり楽しみながら書いていたというのもホント。学園生活を書いているのが結構楽しくて、私の趣味もしっかり入ってしまいました。

映画は最近まったく観に行くヒマがないんですが、実は大好きなんです。系統としては娯楽もの、アクション系でいえばやっぱシュワちゃんでしょうか。あと、やっぱりホラーですねぇ♡

特にゾンビものが大好きで、ジョージ・A・ロメロのゾンビ三部作なんか、感動もののおもしろさでした。ゾンビじゃないけど、ダリオ・アルジェントの諸作品も私の中では別格の位置にあります。彼の原色を多用した映像美には、やっぱりホラーがよく似合う！

ストーリーの中で、羽仁が葵を通して目指していたというのも、実は『フェノミナ』のジェニファー・コネリーの美少年バージョンだったりして（笑）。それにしても撮影当時十四歳のジェニファーちゃん、めっちゃくちゃ可愛かった♡

一時期のスプラッタ映画ブームが去って、今はあんまりホラー映画は見かけなくなりました。レンタル屋さんに行けばあるのかもしれないけど、行かない私にはＴＶだけが頼みの綱です。深夜でいいから、ガンガン放送してくれないかしら…。

あぁ映画のことを書き始めると止まらなくなる。ブルース・リーも好きだったんだあぁぁぁ！

オタッキーな話題はこのくらいにして……。葵の父、壇ノ浦潔氏は担当の飯塚さんのお気に入り？　だったとか。このとんでもない父親のことをもっと書きたかったのですが、いかんせん未熟者の私。筆力不足で書き込むことができなかったのがちょっと心残り。

そんなこんなで、図らずも親子のつながりを意識することになった今回の作品でしたが、ちょうどラストを執筆中、母が入院・手術ということになり、私自身大変動揺してしまいました。

私がこうやって好きなことをして、好きな小説を書けるのも、協力してくれる母がいるからこ

そ。それに改めて気がつくきっかけにもなりました。人間、ひとりじゃ何もできないんですよね。

この本も、たくさんの方々のご協力があってこそ出来ました。

挿絵は、須賀邦彦様に描いていただきました。キ○プ翼パロから同人に復帰した私にとって、須賀様は超憧れの作家さんでした。まさか、自分のキャラクターを描いていただける時がこようとは…！　本当に、ステキな葵や詠生をありがとうございました♡　制服も、なんときっちり三種類描いていただけて、マジで感涙です。

担当の飯塚様。締切りを思いっきり破った私を、やさしくお許しくださってありがとうございました。もうしません…とイマイチ言い切れない私を、どうか怒らないでね。

ここまで読んでくださった読者の皆様方…。楽しく読んでいただけてたらとてもうれしいのですが。作品の感想などありましたら、ぜひお聞かせくださいませ。

この本に携わったたくさんの方々に、心からの感謝を――…。

そして、最後に。

お母さん、この作品はあなたに捧げます。

高坂　結城

この本を読んでの、ご意見・ご感想をお寄せください。
また、著者へのファンレターもお待ちしております。

〒101 東京都千代田区神田和泉町1-11
プラントビル5F　FISH BONE内
㈱オークラ出版 アイスノベルズ編集部

ニューボーイ・オールドボーイ

1995年　3月30日　第1刷発行

© Yuuki Kousaka

著　者　高坂　結城

発行人　長嶋　正博

発　行　株式会社　オークラ出版
〒153　東京都目黒区上目黒1-5-10-308
TEL　03(3792)2400
FAX　03(3792)2448

印　刷　図書印刷　株式会社

落丁・乱丁がありましたら、お取替いたします。

ISBN4-900780-11-1 C0093 P880E 定価880円(本体854円)

葵は高校入学を目前にしたある日、ギャンブルマニアの父親・潔から、借金の担保にお前を差し出したと告白された。絶望にくれる葵は入学を予定していた公立校を山奥の全寮制お坊っちゃん学校に変更させられ、来る〝牢獄ぐらし〟を覚悟していたのだが、そこで待っていたのは優しいルームメイト詠生と、素晴らしい生活だった。日々の時間の大半を詠生と共に過ごし、詠生の存在を大切に思う葵だったが、詠生には秘密があり――。